

●山本　剛（やまもと　つよし）

1969年8月7日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F.E.A.R.に所属。TRPGのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『アラベスク　運命の風』(ホビー・データ)がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。

カバーイラスト/壱
カバーデザイン/小林博明

SNEAKER BUNKO



角川スニーカー文庫

56-2
520
魔導物語2　ぷよぷよ大明神の復活っ!　山本　剛
角川スニーカー文庫

ISBN4-04-415602-6
C0193　P520E　定価520円
(本体505円)
9784044156022
1910193005203

ルシファー先生が行方不明!?　一流の魔導師を目指して修業中のアルルのもとに届いたとんでもない知らせに、さっそく緊急対策会議を開く。気乗りのしないサタンをエサでつり、カーバンクルとシュテルン博士を含めた一行は捜索に出発。目指すは"日出る国"。どうやらルシファー先生の失踪の裏にはぷよぷよ大明神なるものがいるらしい?「魔導物語」「ぷよぷよ」シリーズのキャラクターたちが活躍する、面白すぎる大冒険!!

角川スニーカー文庫
山本　剛作品集

魔導物語
ぷよぷよ大魔王の降臨っ!
魔導物語2
ぷよぷよ大明神の復活っ!

カバー　暁印刷

魔導物語2

ぷよぷよ大明神の復活っ!

山本剛

角川文庫 9627

魔導物語2 ぷよぷよ大明神の復活っ!

山本剛

角川文庫

9627


ふっふっふっ
今日のカレーはだな
にやり
肉屋のおばさんにただで
もらったコロッケを入れた
コロッケカレーだっ
ざっぱー
LOVE
……
ぱち
ぱち
ぱち


ルシファー


サタン
アルル


シェゾ・ウィグィィ
「ふん……、邪悪な匂いがプンプンするな」

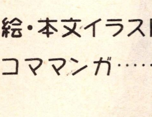
魔導物語2

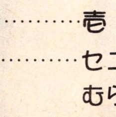
ぷよぷよ大明神の復活っ!

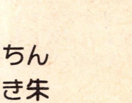
山本剛

角川文庫 9627

目 次

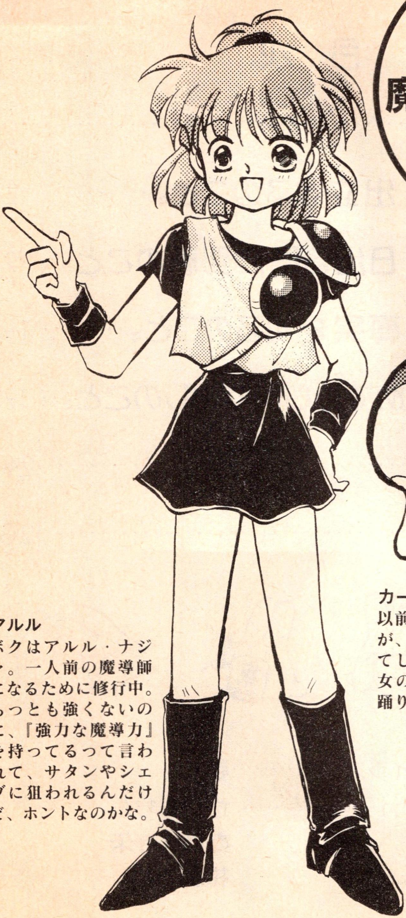




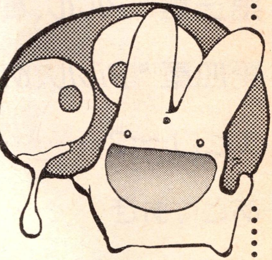


口絵・本文イラスト…………壱
四コママンガ………………セニョちん
むらさき朱
村長さわ

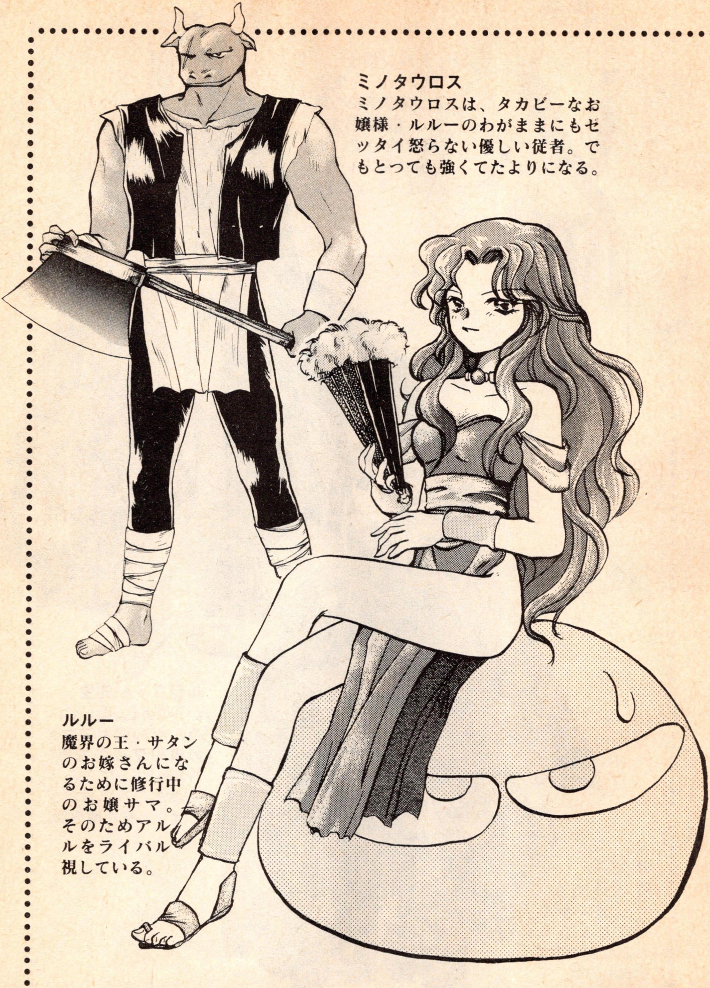
アルルと魔導ワールドの仲間たち



アルル
ボクはアルル・ナジャ。一人前の魔導師になるために修行中。ちっとも強くないのに、『強力な魔導力』を持ってるって言われて、サタンやシェゾに狙われるんだけど、ホントなのかな。

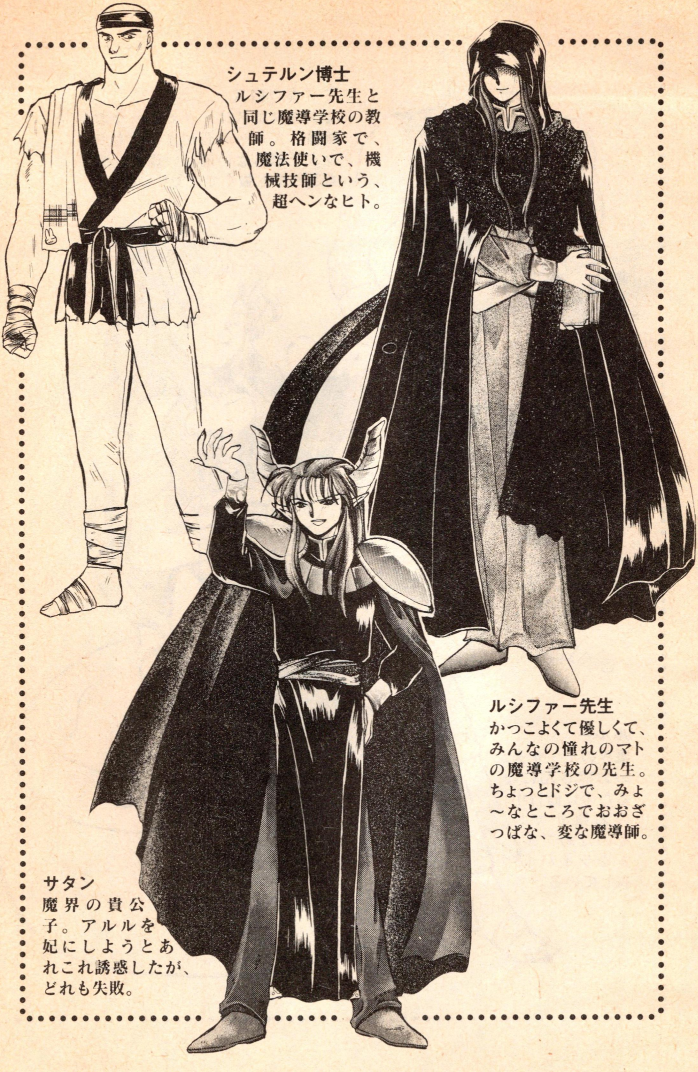


カーバンクル
以前はサタンのペットだったが、なぜかアルルについてきてしまったおかしな生き物。女のコと食べ物が大好きで、踊りがじょうず。



ミノタウロス
ミノタウロスは、タカビーなお嬢様・ルルーのわがままにもゼッタイ怒らない優しい従者。でもとっても強くてたよりになる。

ルルー
魔界の王・サタンのお嫁さんになるために修行中のお嬢サマ。そのためアルルをライバル視している。

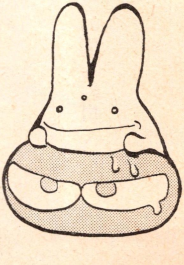


シュテルン博士
ルシファー先生と同じ魔導学校の教師。格闘家で、魔法使いで、機械技師という、超ヘンなヒト。

ルシファー先生
かっこよくて優しくて、みんなの憧れのマトの魔導学校の先生。ちょっとドジで、みょ〜なところでおおざっぱな、変な魔導師。

サタン
魔界の貴公子。アルルを妃にしようとあれこれ誘惑したが、どれも失敗。

プロローグ
竹林の剣劇っ！
……これってホントに魔導物語ぃ？



ザザザァッ……。

風の舞いに、竹の葉がざわめきで応えた。それにあわせて、地面に映った影もゆらぐ。人影に襲いかかるように……。

『………』

人影は、ふと足を止めて空を見上げた。竹林の隙間(すきま)からわずかに見えるのは、銀色の満月。まわりには雲ひとつない、極上の月だ。その光りが、この地の象徴(シンボル)——〝フジヤマ〟——が形作るスロープを、鮮やかに照らしだしていた。月の銀と山の黒がおりなす微妙なコントラストは、人影の住む地ではなかなか味わえない美しさである。

『月見酒、といきたいところだな……』

つぶやきながら、男はふたたび歩きはじめた。

歩にあわせて、まるで今夜の闇をそのままかぶったかのようなローブがゆれる。手には、幾何学的にねじれた杖。

おおよそ、月と竹林の背景には似つかわしくない格好ではある。

『やはり、キモノでも着てくるべきだったかな……』

人影は、目深に降ろしたフードの中で、そうひとりごちた。

ザザザァッ……。

それに応えるかのように、竹林がざわめく。

『……ん？』

ふと、目の前にもうひとつの人影があらわれた。

月の光を鮮やかに反射する、白い着物。それとは対照的な、漆黒の袴。そして、手に握られているのは、鍔のない刀……。

『なんの用かな？　お侍さん』

「ルシファー殿、とお見受けしたが……」

サムライは、相手を切れ長の眼で見据えた。瞳の力強い光が、ローブの男を射貫く。

『いかにも……。手前はルシファー』

相手にあわせて、ルシファーも古風な口調で答えた。

「拙者、マサムネと申す。そなたに、少々お付き合い願いたい……」

『え……？』

ルシファーは、両手の拳(こぶし)を口許にあてて、あとじさった。

『わ、私には、そのようなシュミはないのだが……。いやしかし、そなたがどうしてもというのなら……』

「は？……ちがうちがう、そーいうイミではござらん！　用があるから、来て欲しいと拙者は言っているのだ」

『あ、なぁ〜んだ』

ルシファーは、ローブの上から頭の後ろをポリポリかいた。

「……もし、そなたの合意が得られぬときは……」

ザッ！

とマサムネ——と名乗ったサムライは、左手に鞘(さや)、右手に柄を握って、いつでも抜刀できる姿勢をとる。

——〝イアイ〟というヤツか。

そう分析しながら、ルシファーは答えた。

『私は急用で、この〝日出る国(ひいずるくに)〟まで赴いた。残念ながら……』

「やはり……」

刀を握るサムライの手に、ググッと力がこもる……！

ザザザァッ……。
ふたりの緊張をあおるかのように、竹林がまたもやざわめいた。無造作に後ろで束ねたマサムネの髪が、それにあわせてたなびく……。

＊　＊　＊

コト、コト、コト……。
キッチンで、お鍋が鳴いてる。
ぷぅ～ん……。
ってボクの後ろから、ツンとしたおいしそうな匂いが、音といっしょに流れてくる。
『とほほ……。どうしてオレがこのようなコトを毎日毎日……』
ついでに、誰かさんのブーたれる声も聞こえてくる。
ボクはといえば、スプーンをテーブルの上でお人形みたいに躍らせながら、ゴハンができあがるのを待ってるトコ。
「ごっはん～★　ごっはん～★　今日のおっかずっは……カレーライスっ！」
最後の〝カレーライスっ！〟ってトコで、ボクはスプーンをピョンと手でジャンプさせた。
あ～、早くできないかなぁ。今日も一日、魔法の修業でクタクタだもんね。

「ぐーぐー！」

ボクの友達のカーバンクル——黄色いおまんじゅうに、眼と口と、ちっちゃな手足と、ウサギみたいな耳、それからオデコに宝石をつけたモンスターも、スプーンを持ってテーブルの上でピョコピョコ踊ってる。そりゃあなんたって、カレーライスはカーくんの大好物だもんね。

……まあ、彼のバアイ、食べられればなんでもいいんだケド。

「ねぇねぇ、カレーまだぁ？」

ボクは振り返って、キッチンのほうに声をかけた。そろそろ、オナカが我慢できなくなってきたよ。

『ええい、もう少しくらい待っていられんのか！』

と〝ぷよぷよ〟柄ののれんを手でよけながらキッチンから顔を出したのは、あの〝魔界の貴公子〟サタン！

「ぷ……」

彼の姿を見て、ボクは思わず吹き出しそうになった。

『ナニがおかしい』

サタンが鋭い眼でボクを睨む。ちょっと、照れ臭そうにホッペを赤くしてるケド。

「べ、別になんでもないよ」

とは言うものの……。

いや別に、サタンの顔そのものがオモシロイっていうわけじゃない。逆に、サタンは自他ともに認める美形だ。ちょっと眼がキツイけど顔の形は整ってるし、背は高いし、リッパなツノも2本はやしてる。キラキラして長い髪なんかは、うらやましいくらい。

ナニがおかしいって、そんなカッチョイイお兄さんが、〝給食のオバサン〟ルックをしてるってコト。胸にカーバンクルのワンポイントが入った割烹着を着て、頭にはこれまたカーくん柄の三角巾、おまけにカレー汁のついたオタマまで握ってるんだもの。初めてその姿を見たときは、1時間くらい笑いが止まらなかったもんね。最近、ようやく慣れたトコなんだけど、やっぱりイキナリ見せられると笑いそうになっちゃう。

『フン……。だいたいだな、お前は我慢が足りん！』

ビッ、とサタンはオタマをボクに差して言った。

『5分ごとに「まだぁ～」なんてマヌケな声で聞きおって』

「だってぇ～、オナカすいちゃったんだも～ん」

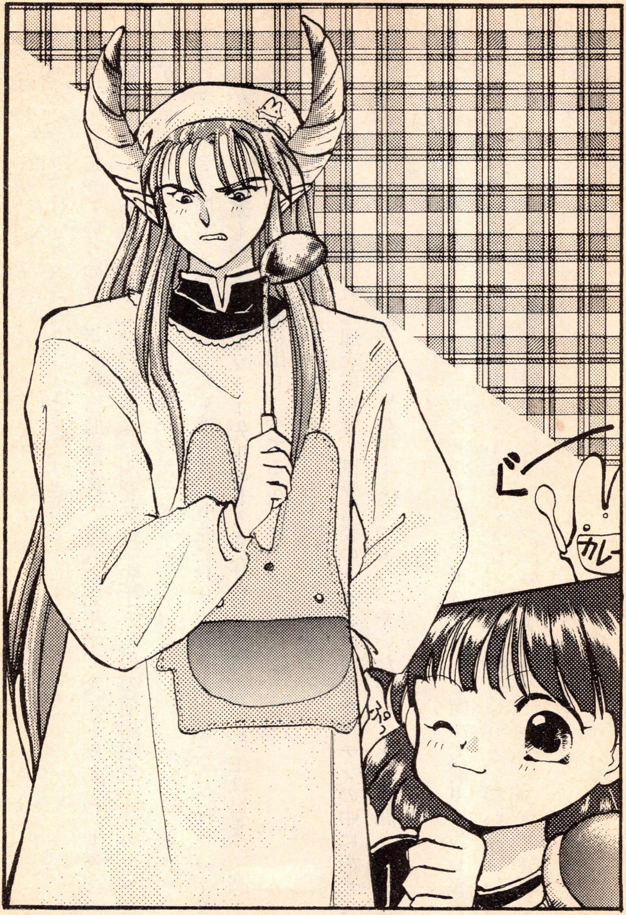
『あのなぁ……』

「早くゴハン作ってよぉ、ねぇねぇ」

「ぐぅぐぅ」

カーくんもいっしょにおねだりする。

「早くしないと、ルシファー先生に言いつけちゃうもんね」


じー
カレー

ボクの必殺ゼリフに、サタンはちょっとあとずさりした。

ルシファー先生っていうのは、ボクの〝魔導学校〟時代の先生で、なんとなんと、サタンの双子の弟なのだ！　あの優しくて絶対怒らないルシファー先生と、目の前の短気でワガママなサタンが兄弟なんて、いまでも信じられないんだケド……。

それはサテおき、魔導学校を卒業したいまでも、先生にはナニかとお世話になってて、ボクやサタンがいまいる家も、実はルシファー先生のおうちなんだよね。当の先生はいま、『調べものをしてくる』とかいって、旅に出ちゃってるんだけど……。

『もう少しだ。それまでこれでも食って待っていろ！』

ドン！　とラッキョウを入れた皿をおいて、割烹着姿のサタンはまたキッチンの中に消えていった。そのとき、『オレに力が残っていれば……』ってつぶやいたのを、ボクは聞き逃さなかったもんね。

魔界の貴公子っていうくらいだから、ホントだったら、ボクなんかを魔法で簡単に殺しちゃうくらいの魔力は持ってる。それがナゼカレーなんかを作ってるのかというと、深い深ぁい事情があって、ルシファー先生に魔力を封印されてしまったからなのだ。だから、さっきの捨てゼリフが出るってワケ。

「う……」

『クッ……』

ふと、先生がサタンの魔力を封印するシーンを思い出して、ボクはちょっと身震いした。
アレは、ちょぉっとショッキング。できれば、もう二度と思い出したくないよ……。

＊　　＊　　＊

ザザザァッ……。
3度目のざわめきを合図に、サムライと魔導師は間合いを保ったまま真横に駆け出した。竹林が、互いの姿を見え隠れさせる。
ザザザザザッ！
タタタタタッ！
「はっ！」
出し抜けに、マサムネは間合いを詰めた。そして……、
「とぅっ！」
一瞬、身体を沈めて刀を抜き、そのまま振り上げる！
『甘い、ブラックボール！』
刃が届く寸前、ルシファーは目の前に放電する真っ黒な球体を作り出した。

グオオオオッ!

「うおっ!」

球体は、一気にマサムネを包みこむ!

ザザザァッ……。

笹の音、そして静寂……。

「……なんと!」

サムライは、いつのまにか魔導師の遥か後方に立っていた。黒い光球が、マサムネを強制的に瞬間移動させたのだ。

「やるな。拙者の〝飛沫(しぶき)〟を見切るとは……」

マサムネが振り返ると、ルシファーはフードの下で微笑(ほほえ)んでいた。

「だが、勝負はこれからでござる!」

とマサムネは構えなおす。一方のルシファーは、杖(つえ)を頭上高く掲げた。

『私の魔法より、早く踏み込めるか……?』

杖の先が、パチパチと放電しはじめる。

『行くぞ! サンダーボルトっ!』

振り降ろすと同時に、プラズマの矢がサムライに襲いかかる!

ピシャァ――――ンッ！
しかし、稲妻はマサムネの身体をすりぬけた。
『なにっ！』
戸惑う魔導師の頭上で、月光を浴びた刃がきらめく！
「とりゃぁっ！」
気合一閃(いっせん)！　マサムネは刀を振り降ろした。
ザザザァッ……。
竹林がざわめく。
マサムネは、パチンと鯉口を閉じた。その合図に、魔導師の身体がくずおれる。
「鬼斬一刀流奥義(きざんいっとうりゅうおうぎ)、〝疾風(はやて)〟……」
しかしその声は、ルシファーの耳には届いていなかった……。

＊　＊　＊

『ほれ、できたぞ』
頭でちょいっとのれんをよけながらムッとした顔で、サタンがカレーてんこ盛りのお皿を運

んで来た。ボクのぶんと、カーくんのぶんと、サタンのぶん。
「いっただっきまーすっ！」
「ぐー！」
ボクとカーバンクルは、さっそく一口食べた。とろ〜りして、ほんのちょっとピリリとした味が、口の中にひろがってくる。
「ん〜、おいしっ★」
「ぐー★」
『そ、そうか……？』
ボクらの言葉に、サタンは照れ臭そうにホッペをポリポリかいた。〝給食のオバサン〟ルックはそのまんま。
こういうとき、サタンとルシファー先生はやっぱり兄弟なんだなぁ、って思う。お料理の味がまったくおんなじ。
「そういえば……」
ふと、ボクは窓の外のまんまるお月サマを見た。
ルシファー先生が旅に出て、もう一週間。いまどこにいるんだろう？
早く帰ってこないかなぁ……。
ボクは、お月サマに先生が無事で帰ってくるよう、そっとお願いした。カレーライスを食べ

ながらじゃ、聞いてくれないかな……？

＊　＊　＊

ゴォォォォォォォッ……。

陽の光とて届くスキのない洞窟(どうくつ)で、生物のようにうごめく炎だけが、その中を照らしていた。

しかし、その光りですら、全体を明るくさせることができないほど、洞窟は広い。まるで突然に太陽が姿を消した地上のようだ。

炎の背後に、十字架にはりつけられた人物がひとり……。

闇(やみ)に溶けこむような漆黒のローブ、端正な顔の、上半分を覆い隠しているフード……。

魔導師ルシファーは、生気なく頭をたれていた。その姿は、裏切られ磔(はりつけ)にされた救世主のようにも見える。

『フッフッフ……』

グォッ！

突如、洞窟中に含み笑いが響き、意志を持ったかのように炎が大きくうごめいた。そして、炎はおぼろげな形を造りはじめる。天高く伸ばした2本のツノ、大きく広げた翼、見る者を瞬

時にすくませる鋭い眼……。

背後のルシファーを磔にした十字架が、それの邪悪さをより深くかもし出していた。

『〝魔力の種〟は手に入れた……。残るは〝引き金〟のみ……』

悪魔の輪郭を取った炎が、眼前を見渡す。それに照らされ、炎の前に控える魔物たちの姿が浮かび上がった。

蠍(さそり)の皮膚と尾を持つ男、人間の手足を持つ巨大魚、直立した象、竜のような力強いツノと羽を持つ少女、天女の美貌(びぼう)と鳥の翼を持つ女性、マントのような漆黒の身体を広げた鳥のごとき魔物、そして、洞窟の天井に届かんばかりの巨大な竜……。

彼らに混じって、竹林でルシファーを斬ったサムライも炎の前に立っている。

ポゥ！

炎の悪魔が腕を差し出すと、手のひらに真紅の瓢箪(ひょうたん)が現れた。

『誰ぞ、これに〝引き金〟を封じてまいれ……。彼奴(きゃつ)は、西にいる……』

「ほな、ワテが……」

と一歩進み出たのは、雪だるまのような体格の蠍男。手にした槍の先に瓢箪のヒモをひっかけ、ひょいと手に取る。

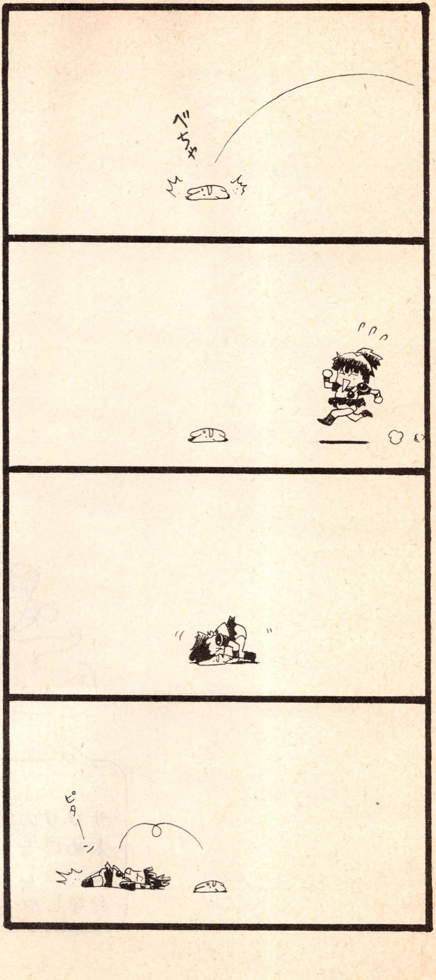
『よし、貴様に任せた……』

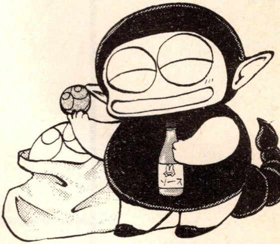
「行ってきまっさ」

蠍男は、この場の雰囲気にはあまりにも不釣り合いな非常に人好きのする笑顔を残して、洞窟の闇へと消えていった……。

第一章〝アルル、出立するのこと〟

すきんしっぷ



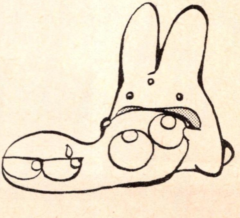


さそりまん

サソリの格好をしたちょっと太めのモンスター。いつもニコニコしていて、なぜか関西弁をしゃべる。

一　先生が行方不明っ？

……大変！　早く助けに行かなきゃー



「たっだいまぁ――っ！」
「ぐーっ！」
ボクとカーバンクルが勢いよく玄関を開けると、ぷぅんとおいしそうなスパイスの匂（にお）いが流れてきた。う～ん、食欲がますますわいてきたぞ。
……のはいいんだケド。
「ねぇねぇ、またカレーなのぉ？」
ボクは、テーブルをはさんで玄関の正面にあるキッチンに向かって、おっきな声で言った。
昨日の夜もカレーだったし、おとといも、その前もずぅっとカレーだったような気がする。
まあ、オイシイし大好きだからいいんだけど、こういっつも続いちゃぁねぇ……。さすがにちょっとあきてきた。

『ふっふっふ、甘いぞアルル』
　とキッチンから出てきたのは、いつもの〝給食のオバサン〟ルックをしたサタン。もうかなり慣れたから、いきなり吹き出したりはしないぞ。
『今日のカレーは、ひとあじ違う』
「甘口なの？」

『ちっが――う！』

　サタンは、オタマを持ったまま腕を組んでボクをにらんだ。……格好が格好だけに、ちょっと迫力ないケド。
「だって、いま言ったじゃない。甘いぞアルル、って」
『そうではない！　だいたい、オマエは甘口しか食えんだろうが！』
「あ、そうか」
　実は、カレーライスが好きなワリには、ボクは辛いのが結構ニガテだったりする。
「じゃあじゃあ、なんなの？」
『ふっふっふ、聞きたいか？』
　サタンは、もったいぶった顔で含み笑いをした。
「う〜ん……。ホントは聞きたいケド、もったいなさそうだから、あとのお楽しみにしとく。

「じゃあ、できたら呼んでね」

『ああっ！　ウソですアルルさん。お願いです、聞いてください』

二階にあるボクのお部屋に行こうとするのを、サタンは慌てて、すがるように引き止めた。

〝魔界の貴公子〟ともあろうお方が、ちょっとナサケナイ……。

「じゃあ、聞かせて」

『ふっふっふ、今日のカレーはだな……』

サタンはまた、もったいぶった顔に戻った。忙しいヒトだなぁ。

「うんうん、今日のカレーは？」

『肉屋のおばさんにタダでもらったコロッケを入れた……！』

ビシィッ！とサタンはオタマをあさってのほうに向けて、ポーズを取る。

『コロッケカレー、だっ！』

どっぱぁ〜〜〜〜んっ！

いきなり、サタンのバックに荒々しい波しぶきが現れた。

「お――っ！」

「ぐ――っ！」

ぱちぱちぱち……。

なんだかよくわからない迫力におされて、ボクとカーバンクルはポーズをキメるサタンに拍手する。

『はっ……！』

その音で我に返ったサタンは、今度は突然、頭を抱えて床を転がりはじめた。

『ああああっ！　オレともあろう者が、どーして肉屋のおばはんにコロッケをもらったくらいで喜ばねばならんのだぁっ！』

あっちへゴロゴロゴロ……。

『オレは〝魔界の貴公子〟サタンだぞぉっ！　もーいやだ、こんな生活には堪えられんっ！』

こっちへゴロゴロゴロ……。

「………」

ボクには、そのサタンの変わりようが堪えられないよ。

でもまあ、魔力がなくなっちゃうってコトが、それだけサタンにはショックだったんだね。

そのへんはわかる気がする。うんうん。

ボクだって、魔力がなかったらなんにもできないもんね。逆にいえば、それがあったから、カーくんとか、ルシファー先生とか、サタンとか、たくさんのお友達ができたんだと思う。

「う～ん……」

ボクは、まだゴロゴロしてるサタンを横目で見ながら、腕を組んだ。

こうなることがわかってて、ルシファー先生はサタンの魔力を封じちゃったんだろうなぁ。それを考えると、先生ってばちょっとザンコク……。さすがにサタンのことが憐れになってきちゃった。

いつの間にかカベに向ってしくしくやってるサタンの肩を、ボクはそっとポンポンと叩いた。

「だぁいじょうぶだって、サタン。先生が帰ってきたら、きっともとに戻してくれるよ。ボクからも頼んでみるからさ」

『アルル……』

サタンは、涙でぐしょぐしょになった顔を上げた。……ちょっと鼻水まで出てる。

『オマエというヤツは……！』

ガバッ！

いきなり、サタンはボクに抱きついた！　そして、身体をぐいぐいと押しつけてくる。ちょ、ちょっとぉ！　鼻がついちゃうよぉ！

『やはりオレのことが好きだったんだなぁっ！　よぉーしわかった、スグ結婚しよう！　いましよう！　ほれしよう！』

「なぁんの……」

ボクは、サタンの襟をぐいとつかんだ。そして……、

「ハナシじゃ――――っ！」

うるぁずど〜ん！

と気合を込めて、サタンを巴投げ！

ドッカァ——ンッ！

サタンの身体は玄関に大穴を開けて、夕焼けの外に消えていった。

「まったくもう……」

立ち上がってパンパンとほこりをはらいながら、ボクはつぶやく。

せぇっかく、本気で同情したのに……。もう心配なんかしてやんないんだから！

『あうう……』

とうめき声を上げながらボロボロのサタンが戻ってきたのは、火にかけたカレーのお鍋がほどよく煮えたところだった……。

＊　＊　＊

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……！

月が静かに見下ろす街道を、爆音と土煙が一直線に切り裂く。街道の周りは大草原。かなり遠くはなれた先に、山々の影が見える。

「うおりゃあああああああああああああああああっ！」

〝格闘機械魔導師〟シュテルンは、まるで暴走したイノシシのように全力疾走していた。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……！

丸太のような両腕が、一回転しそうなほどの勢いで交互に振り上げられ、地面につかんばかりに下げられたぶ厚い胸の下で、筋肉の隆々とした太股（ふともも）がうなりをあげる。それだけ派手で大きな動きにもかかわらず、ハチドリの羽のように回転は早い。

ドドドドドドドドドドドドドドドド……！

シュテルンの背後では、巨大なクワをひきずったように地面が削り取られていた。そして、まわりの草花、木々、運悪く近くにいた納屋などが、衝撃波に襲われてズタズタになっている。その爪痕は、シュテルンの後方、地平線のかなたまで続いていた。かすかに、倒壊した家屋も見える。

「……むっ！」

前方にも家を発見。こちらは破壊されていない。シュテルンは右の肩を前に突き出し、そのままタックル！

「おっしゃあっ！」

ドゴン！

バリバリバリ……！
なんの罪もない家を突き抜け、〝格闘機械魔導師〟は疾走を続ける。
ドドドドドドドドドド……！
自身の研究所を置いた雪山から、彼はある一点を目指して直進していた。障害物を蹴散らしながら……。
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……！
「……おっ！」
そのハタ迷惑な疾走のゴールが、ようやく見えはじめた。草原にぽつんとたたずむ、古めかしい造りの家。
「うるぁっ！」
ドォッ！
シュテルンは、魔導師ルシファーの家が視界に入ると同時にスパートをかけた。そして……、
「は――――っ！」
星々につかみかからんばかりの勢いで、彼は天高くジャンプした。月光を受けてスキンヘッドがきらめく……。

＊　＊　＊

サククッ。

「おっ」

カレーライスの上にちょこんと乗ったコロッケを、スプーンでちょっとちぎったトコで、ボクは確信した。

このコロモはサクサクで、中がほっくりほっくりしたコロッケは……、

「商店街のカドのお肉屋さんだね」

とボクはテーブルの向かいに座ってるサタンに問いかける。

『あ？』

だけど当のサタンは、カーバンクルにおかわりをつぐので大忙し。カーくん、次から次へとひとくちで食べちゃうもんだから、ボクの言葉がちゃんと耳に入ってない。

『門松（かどまつ）がどうしたって？　正月にはまだ早いぞ』

ずる。

ボクは、あやうくイスからずり落ちそうになった。

「そーじゃなくて！　このコロッケはカドのお肉屋さんのだね、って言ってんの！」

『おう。そこのおばさんが揚げたてをくれたのだ』
「へぇ～、スゴイじゃない。サンタ……じゃなくてサタン」
ボクが言い間違えると、サタンはジトッと睨(にら)んだ。
『オレの名は、サ、タ、ンだっ！　まぁだ覚えとらんのかオマエは』
「ちょっと間違えただけじゃない。……それは置いといて、ここのコロッケってオイシイことで有名なんだよね。ルシファー先生も言ってた」
ボクの言葉に、サタンはえっへんと胸をはる。〃給食のオバサン〃ルックのままで……。
『そこのおばさんだけじゃないぞ。昨日は八百屋のおっさんに産地直送のニンジンをもらったし。……そうだ！　今度サカナ屋の若旦那(わかだんな)が白身のイイところをくれるといっていたから、それを揚げて〃フィッシュカレー〃にしよう』
「おー」
ぱちぱちぱち……。
『はっ！』
ボクの拍手で我に返ったように、サタンはまた頭を抱えた。
『ああっ、オレともあろう者が、こんな庶民的な幸福を喜ぶまでにおちぶれるとは……』
「まあまあ」
庶民的で悪かったわね！……と思いつつ、ボクはサタンをなぐさめる。

「ぐーぐー」

テーブルの上のカーくんもいっしょになぐさめ……と思ったら違った。単におかわりが欲しくて、サタンの肩をぽんぽん叩いてるだけ。片方の手で空になったお皿をぷるぷると振ってる。

『ええい！　ひとりでパクパク食ってんじゃないっ！　オレのぶんがなくなってしまうではないか！』

と皿をひったくって、またてんこ盛りにカレーをよそう。……なんだかんだ言っても、優しいサタンくんであった。

『アルル、おまえもさっさと食え。さめてしまうぞ』

「は――い！」

早速、ボクはスプーンでコロッケカレーをすくった。

「いっただっきまぁ――す！」

と口に入れた瞬間っ！

どんがらがっしゃぁ――――んっ！

なにかが、上から思いっきり落っこちた！

そのショックで、ボクらのカレー皿、お鍋、ゴハンのおひつ、それからカーバンクルまでがまわりに飛び散る。テーブルはコナゴナ。

「ん――――――っ！」

ああっ！　ボクのゴハンがぁっ！

……と言ったつもりだけど、スプーンをくわえたまんまなので、声になってない。

もぐもぐもぐ……ごっくん！

ボクはスプーンを抜いて、口の中に残っていたコロッケカレーを、よぉく噛んでから飲み込んだ。カーバンクルは別として、ちゃんともぐもぐしないと、消化に悪いもんね。

……ンなコト心配してるバアイじゃない。

「いったい、ナニが起こ……」

「大変だあっ！」

「うわぁ！」

いきなりのおっきな声に、ボクはもうもうとしたホコリと一緒に吹き飛ばされそうになった。

ナニが起こったのぉ？　って言おうとしたのにぃ。

「あっ！」

よくよく見ると、いままでテーブルがあったところに、誰かおっきなヒトが立っていた。

つるつるのスキンヘッドにハチマキ、袖のない格闘用の胴着に包まれた筋肉りゅーりゅーの身体。こんな格好をしてるヒトは、ボクは世界中でひとりしか知らない。

「シュテルン博士！」
「おう！　久しぶりだな、アルルくん！」
ボクの言葉に、さっきとあんまり変わらないおっきな声で博士が応えた。低音がすっごく響いて、ボクまでふるえちゃう。これが、博士のふつーの声なんだよね。
それはサテおき……。
「大変、ってなにがです？」
博士は、いつものように太いまゆとホリの深い顔が自信にみちみちてる。それを見ると、あんまりタイヘンそうには見えないんだケド……。
「え〜と……」
博士は、腕を組んで考えはじめた。……なぁんか、イヤな予感がするなぁ。
「なんだっけ？」
だあああああっ！　やっぱりぃ！
「博士がいま言ったんでしょーがっ！　イキナリ上から落っこちてきて、タイヘンだぁ——っ！　って」
ボクらの晩ゴハンまでしっちゃかめっちゃかにして！
まったくもう。そのおかげで、せっかくのコロッケカレーがひとくちしか食べられなかったんだから！

博士は、ときどきこういう大ボケをかましてくれる。ものすごぉーく大事なコトを、空のかなたにフッ飛ばしちゃうのだ。
ワザとやってるのか、ホンキなのか……。まあ、博士の親友の――で、ボクのお師匠――のルシファー先生も、おんなじコトやるからなぁ。
「おっ！　そうだそうだ」
何か思い出したみたいで、博士はバンと手を打った。そして、大マジメな顔になる。
「大変なのだよ、アルルくん」
「で、ナニが大変なんですか？」
ボクは、ちょっぴりイジワルに言った。もう、ちょっとくらいじゃ、驚かないもんね。
「実は、ルシファーが行方不明になったようなのだ」
「へぇ～、そうなんですか？」
「お？　驚かんな」
キョトンとした顔で、シュテルン博士が言う。へへぇん、残念でした。
「そぉんなコトくらいで、ボクは驚きませんよぉ。だって、ルシファー先生が……」
って、ちょっと待て。
「行方不明――――――っ？」

ボクは、あやうく天井を突き抜けてお月サマにぶつかるくらい、ブッ飛びそうになった。つまり、それほど驚いたってコト★

いやいや、そんなホシまでつけて、れーせーにブンセキしてるバアイじゃなくて。……あわわわ、カンジでモノがカンガえられなくなってるぅ。

「るるる、ルシファーせんせが、ゆくっ、ゆくっ……！」

ああああっ、コトバもちゃんと出てこないぃぃぃぃぃぃぃ！　手足もドモったリズムにあわせてわたわたわたわたわたわた……。

「落ち着け、アルルくん」

『あうう……』

よくわかんないケド、シュテルン博士がなんか言ってるぅ。サタンのうめき声もどっかから聞こえるよぅ。……こ、これはもしかして夢？　夢なら醒(さ)めて！

「あのな、アルルくん……」

あわわわわわわわわわわわわ……。

わたわたわたわたわたわたわたわたわたわたわたわたわたわた……。

「気をつけ――――いっ！」

「ぅはぁいっ！」

ビシッ！

突風のような迫力に押されて、ボクは即座に言われた通りにした。もちろん、怒鳴ったのはシュテルン博士。

博士は、ものすごぉーくマジメな顔で続ける。

「よく聞け、アルルくん。ルシファーが消えた。これはまぎれもない事実だ。わかるな？」

「は、はい」

さっきよりはちょっと落ち着いたケド、まだ信じられない。いまのサタン――いや、前の魔力満々のときもそうかも――ならともかく、先生に限って、行方不明だとかなんだとかっていうコトはありえないと思ってた。

逆に考えると、なにかとてつもない事件が起きてるっていうコトに……。

ざわざわざわざわざわざわざわ……。

ボクの胸の中で、小さなボクの分身たちが騒ぎ始めた。「なぁんか、とってもイヤな予感がするぞぉ……」って。

「は、早く助けに行かなくちゃ！」

「うむ。我々の力でどうこうできるかはわからんが、最善はつくさんとな。それに、妙な胸騒ぎがしてならん」

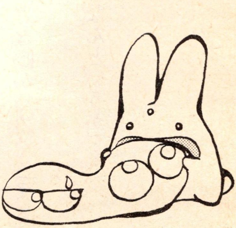
うんうん。

『そ、それはいいんスけど……』
「おりょ？」
いきなり、ナサケナイ声がシュテルン博士の足元から聞こえてきた。
『とりあえず、どいてもらえませんか……？』
見ると……、
「ああっ、サタン！」
博士の足の下で、サタンが馬車にひかれたカエルみたいにつぶれてる。
「おおっ、すまんすまん」
『すまん、ではない！　魔力さえあれば、キサマなど灰にしているところだ！』
ブーたれながら立ち上がったサタンの下を見て、ボクはさらに驚いた。
「カーくん！」
そこにいたのは、おせんべみたいになってるカーバンクルが！　ちっさな眼がぐるぐるまきになって気絶してる。
だけど、そんな状況でもカレー皿を離してないのは、さすがというかなんというか……。

二　緊急対策会議っ!

……先生は、いったいドコに?

「ねぇねぇ博士」
「なんだ?」
「先生、ボクたちには調べものをしてくるとしか言ってないんだケド、博士はほかになにか聞いてないですか?」
「そうだなぁ……」
ボクの正面に座るシュテルン博士は、ふっとい腕を組んで考えこんだ。
博士の屋根ブチ抜き乱入事件、それからルシファー先生の行方不明騒ぎからひとまず落ち着いたボクらは、お茶をかこんで〝キンキュータイサクカイギ〟なるものを開いていた。ボクら、といってもカーくんをあわせて、ボクとサタンと博士の4人なんだケド。
「ぐ〜ぅ、ぐ〜ぅ……」
カーバンクルは、元どおりになったテーブルのド真ん中で寝ちゃってる。まあ、カレーをた



っくさん食べて、それからお茶菓子までぜぇんぶ食べちゃったもんだから、マンプクなんだね。
ちなみに元どおりになったのはテーブルだけじゃなくて、屋根もちゃぁんとふさがってる。
シュテルン博士が、気合でなんとかしたのだ。
そう、文字どおり〝気合〟。これは結構すごかった。だって博士が、
「はあっ！」
って気合を入れただけで、まるで崩れた積み木がひとりでに組みあがってくみたいに、壊れたところが治っていくんだもの。
これは魔法と、格闘術の〝気〟の使い方をミックスした術だって博士は言ってた。今度、やりかただけでも教えてもらおうっと。きっとルシファー先生もおんなじような魔法が使えるはずだから、実際にはそっちを覚えるとしても、ね★　ナニかと役に立ちそうだし。両方をミックスしたら、ボクだけのオリジナル魔法が作れちゃったりなんかして……。
でもでも、そんな夢もルシファー先生がいなくっちゃ、ぜぇんぜんオハナシにならない。
「…………」
ボクは頬杖(ほおづえ)をついて、目をつむって黙ったままのシュテルン博士から早く答えが返ってくるのを待った。
「ぐ〜ぅ、ぐ〜ぅ……」
しばらくのあいだ、音といえばカーくんの気持ちよさそうな寝息だけになる。

ボクのとなりのサタンも、シュテルン博士と同じように腕を組んでうつむいたまま、なぁんにもしゃべらない。自分なりに、ルシファー先生を助ける方法を考えてるのかな?

「ぐ〜ぅ、ぐ〜ぅ……」

カーくんの寝息。

「…………」

シュテルン博士も、サタンもぜぇんぜん動かない。

「ねぇ、はか……」

せ。

と待ちきれなくなって声をかけようとした途端、

ぷ〜〜ぅ。

博士の鼻から、おっきな鼻チョウチンが! それに続く、地響きみたいな寝息。

「ぐ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……」

「だあああ……」

ゴン。

身体中から力が抜けて、ボクはおでこをテーブルにぶつけた。……ちょっちイタイ。

「博士、はかせぇ、起きてよぉ!」

ゆさゆさ。
肩をゆらすと、博士はパチンとチョウチンがはじけると同時に目を覚ました。
「お？　おお、すまんすまん」
「まったくもう。寝てるバアイじゃないでしょ？」
「いや〜……」
博士は、まだ寝ボケた眼をして、毛のない後ろあたまをポリポリかいた。
「私の研究所からここまで、ずっと走りづめだったからなぁ。3日以上も寝てないのだ」
「3日？……ああ、馬車かなんかで？」
ボクは以前——魔導学校にいた頃、ルシファー先生に言われて、シュテルン博士の研究所へおつかいに行ったことがある。途中、いろいろあったケド、歩きでだいたい1年かかった。だから、馬車を使ったとしても、たったの3日でここまでは来れない。
きっと、普段はどっかで寝て、最後の3日でラストスパートしたんだろうね。
「がぁっはっはっは！」
だけど博士は、そんなボクの考えをブチ壊すように、家全体をゆらす、おっきな声で笑った。
「私がそんなもの使うワケないだろう。この……」
ボクの腰とおんなじくらいの太股(ふともも)を持ちあげてポンと叩(たた)く。
「2本の足で来たのだ。だいたい、ルシファーが消えたなどという一大事を、1年も放ってお

くわけないだろう」
いやまぁ、それはそーなんデスけど。
「よ、よーするに、普通なら1年かかるところを、3日にタンシュクした、と……」
「おう！」
博士は、いともあっさりうなずいた。
くらくらっ。
ああ、めまいが……。いったいなんなの？　このヒトは。
「人間、体力と気力を鍛えれば、不可能なことなどないのだ」
「はあ」
そですか……。
ときどき、真剣に考えちゃうことがあるんだ。それは、どーしてボクのまわりって、こんなヘンなヒトたちばっかりなんだろう？　ってコト。
サタンはボクを妃にしようとうるさいし、ルルーはそのサタンを追っかけて、ボクをライバル視してる。そういえば、シェゾっていうヘンタイ魔導師もいたっけ。このシェゾってば、「おまえが欲しい」って、シツコイったらありゃしない。
ルシファー先生だって、優しいしカッコイイんだけど、やっぱりヘン。なんでもできすぎち

ゃうってだけでも不思議なのに、そのワリにはボクより派手な大ボケをかましたりするし……。

って、そうそう。

「博士、ルシファー先生のコトを……」

ボクは、先生からなにか聞いてないか、また博士に聞いた。……まわりのヒトがどうとか言ってるバアイじゃないよ。

「私も、すべて聞いたわけではないが、東方がどうとか言ってたなぁ」

「東方って……あのニンジャとかサムライとかがいる？」

ボクも、ちょっとだけ知ってる。魔導学校にいた頃、同級生のムラサメくんっていうニンジャに教えてもらったのだ。

まあ、ボクらがいるところとは、文化とか魔法の考え方とかがゼンゼン違うってコトくらいだけどね。

「その東方に、先生は、いったいなにしに行ったんだろ……？」

シュテルン博士は、「お手上げ」っていうカンジで肩をすくめた。

「そこまでは、私もわからん。……ただひとつだけ言えるのは、ルシファーが、旅先でなにか厄介事に巻き込まれた可能性が非常に高い、というコトだな」

「うんうん」

ボクはうなずく。先生がいなくなっちゃうくらいだから、厄介事のレベルが尋常じゃないよ

うな気はするケド……。
「そういえば……」
ふと、ボクは思い立った。
「どうした？」
「いま考えたんですケド、先生がワザといなくなっちゃったってコトは？」
「う〜ん……。その可能性も否定はできんが、そうだとしてもヤツにメリットがあるようには思えんが」
「そうかなぁ……」
ルシファー先生は、みょーにイジワルなところがあって、ボクらを困らせるためだけによくイタズラとかするからなぁ……。
「サタンはどう思う？」
と彼のほうを向くと、返ってきたのは……、
「ぐ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……」
サタンの安らかな寝息。
だ――――――っ！　どうりで静かだと思ったら！
ルシファー先生が行方不明になっちゃったっていうのに、どうしてサタンも博士もこんなに不真面目(ふまじめ)なのぉ？

って、いま「イタズラかもしんない」って疑ってたボクが言ってもしょうがないか……。

＊　＊　＊

『う……』

闇という〝無〟の象徴が支配する洞窟(どうくつ)。天井、壁といった、領域(フィールド)の境界を示すものの存在が、まったく感じられない。あるのは、下向きの重力と、土があらわになった床のみ。

磔台(はりつけだい)の魔導師が、うめき声をあげた。

『気がついたか』

グォッ！

悪魔の輪郭を持った炎が、振り返る。

『ここは……？』

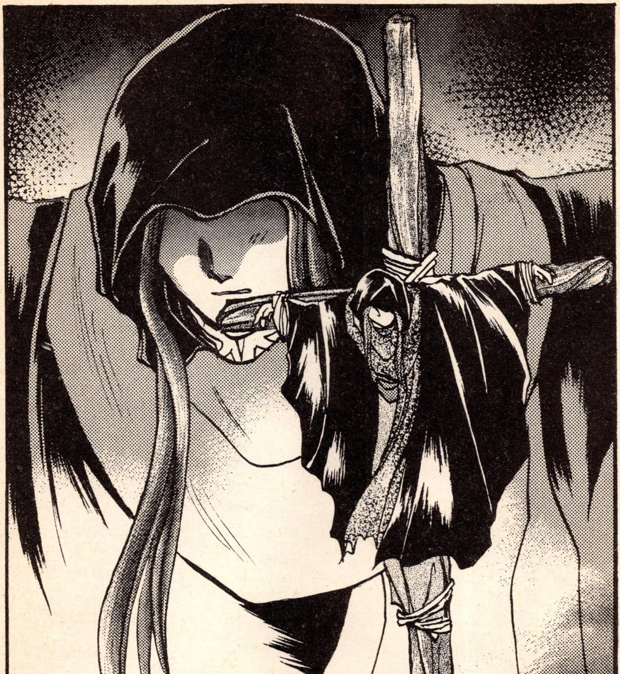
ルシファーの問いには答えず、炎はまるで肩を揺らすようにうごめいた。

『クックック……。キサマが知る必要はない。キサマは、我が復活を遂げるための、単なる〝魔力の種〟だ』

『ほう……』

動じるふうをまったく見せず、ルシファーはローブの奥から炎を見据える。

『そのような野望を持つまでに成長していたとはな……』
『なに？』
戸惑ったのは、炎のほうだった。
『どういうコトだ？』
『私は、おまえを封じるために、この〝日出る国〟まで赴いたのだ』
『ふふん……、戯れ言もたいがいにせよ。だいたいそのザマで、いかにこの〝ぷよぷよ大明神〟を封じるつもりか』
『ぷよぷよ大明神？　はっはっは……、これは傑作だ』
『なんだと？』
　グオオオオッ！
　炎が勢いよく膨れあがる。
『我を愚弄するか！』
怒る炎に対し、ルシファーはあくまでも冷静沈着。
『まあ、私が無理でも、いずれそうなる。大明神どのも、せめて私の占いだけは信じたほうがいいぞ』
『ええい！　しゃべりすぎたわ！』



バシッ！

突然、十字架にプラズマが走った。

『ぐはっ！』

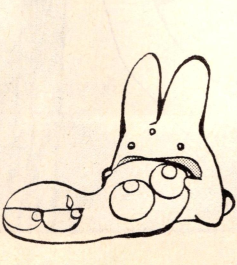
そのショックに、ルシファーはびくんとのたうち、そして……、再びがっくりとうなだれる。

『愚か者め……』

炎は落ち着きを取り戻し、地響きのような低さでつぶやいた……。

三　東に向けてしゅっぱ――っ！

……はいいんだケド



むむむっ……！

ボク――と、肩に乗ったカーバンクル――は、身を乗りだして目の前のサタンとシュテルン博士を睨(にら)んだ。

「ぬぅ……」

『………』
ふたりも、ボク、そしてお互いを睨みかえす。
バチバチッ！
3人と1匹の、視線がぶつかって、火花を散らした。
キンチョーの一瞬……。
「よぉ〜し……！」
ボクは、ぐぐっと上半身をひいて、力を込めた。思いっきり、パンチを繰り出すみたいに。
サタンと博士のふたりも、おんなじようにする。むむむ……、このふたりに、果たしてボクは勝てるのか……？
「ジャンケンポン！」
3人の大合唱といっしょに、ボクらは手を出した。
サタンはグー！
シュテルン博士もグー！
そしてボクは……、
「やったぁ！」
パーでボクの勝ちっ！

『クソッ！』
「負けたかぁ」
「わーい、いっただきまーす！」
悔しがるサタンと博士を尻目に、ボクはテーブルの上のお皿の上にぽつんと残った手巻き寿司を取った。
「じゃあカーくん、半分こね」
「ぐー！」
手巻き寿司をふたつに割って、ボクはカーバンクルの口に放りこんだ。
〝キンキュータイサクカイギ〟の途中でオナカのすいたボクらは、サタンに手巻き寿司を作ってもらった。その残りの1個を、ジャンケンで取り合ってた、というワケ。
「ほれにひても……」
それにしても……。
「ろーひてはかへは、へんへーがうくへふえーになっらってわはったんれすか？」
どうして博士は、先生が行方不明になったってわかったんですか？
『アルル、ちゃんと食ってからしゃべれ』
「あう」
サタンのするどいツッコミ。

もぐもぐ……ごっくん！
ボクは、ちゃんと飲み込んでから、シュテルン博士にもういちど同じ質問をした。
「私は、ルシファーを〝魔導レーダー〟でずっとモニターしていたのだ」
「あ、そうか」
「そして、ルシファーの反応がいきなり消えた。このような現象は、目標が死にでもしない限り、起こり得ないことだ」

「！」

先生が、死んじゃった……？
シュテルン博士は、そんなボクの驚きをなだめるように続ける。
「まあ、ヤツのことだから、死んだということはないだろう」
「そ、そうですよね……」
少なくとも、ボクはそう信じたい。
「だが、それに類する事態が発生したのは間違いないだろう。というワケで、私はひとまずキミたちのところに来たのだ」
「なるほど……」
『ところでなんだ？　その〝魔導レーダー〟とかいうのは？』

　サタンの質問に、ボクが答えた。
「あのね、ほら占い師がよく水晶玉を持ってるでしょ？　いろんなコトやモノを映すやつ。カンタンにいうと、それを機械にしたものなんだよ」
『ふぅん』
「まあ正確には……」
　博士が、ボクのあとをついで補足。
「現段階では、いわゆる水晶玉のような映像が出るわけではない。目標の、だいたいの位置がわかるだけだがな」
　シュテルン博士は、まわりのヒトたちから〝格闘機械魔導師〟って呼ばれてる。なんでかっていうと、格闘家で、機械技師で、魔導師だから。……ミもフタもないなぁ。
　博士が目指してるのは、格闘技と機械技術と魔法のミックス。その前のステップとして、魔法機械をい～っぱい造ってるのだ。いまハナシに出た〝魔導レーダー〟もそのひとつで、呪文(じゅもん)を倍加する〝メタドライヴ〟なんてのもある。
　あ、魔法機械で思い出した。
「博士はかせ」
「なんだ？」
「えーと〝物質転送機〟……でしたっけ？　あれ使わなかったんですか？」

〝物質転送機〟もシュテルン博士の作品で、ワープの魔法を機械でできるようにしたヤツ。それを使えば、3日もムダにしないで一瞬で来れたのに……。
「いや～、実はなぁ……」
博士は急に、申し訳なさそうな顔をした。
「いつか、キミとルルーくんたちがアレを使っただろう」
「うんうん」
ルシファー先生のおつかいで、博士の研究所に行ったとき、〝物質転送機〟を使って魔導学校に帰ってきたのだ。
「あのあと、チェックしてみたところ、致命的な欠陥が発見されたのだ。だから、いまは封印してある」
「はあ」
「いや～、よくアレで無事に帰れたな。私は、キミたちの強運に感謝しているよ」
と、博士は巨体を揺らして笑った。……って、ちょっと待ってよぉ。
がっはっは！
「博士ぇ、そんな笑ってるバアイじゃないですよぉ」
「いや、すまんすまん。……だが、無事に着いたんだから、それでいいじゃないか」
「う～……」

それはそうなんだケドさ……。
ボクがいつまでもぶちぶちしてると、博士はキリッとした顔になって言った。
「いまは、そんなコトを論じている場合ではない。ルシファーをなんとかせねば」
「あ、そうか！　みんなで助けに……」
『オレは行かんからな』
いままで黙ってたサタンが、ボクのコトバをさえぎる。
「どーして？　あんたお兄さんでしょぉ？」
『フン！　あんなクソ生意気な弟など、いなくてせいせいするわ。……それよりアルル、お前も行くな』
キリッ！
すんごぉ～くマジメな顔で、サタンは言った。……こうやってると、かなりカッコイイんだよね。ルルーが好きになるのも、なんとなくわかる気がする。
『オレは悟ったのだ』
ガタンとイスから立ち上がって、サタンはオペラ歌手みたいなポーズを取った。遠くのほうを見て、左手は胸に、右のてのひらをかざしてってカンジ。どこからともなく、スポットライトがサタンを照らす。
『お前の修業の帰りを、オレが心尽くしの料理を作って待つ。ああ、かくも幸せな新婚家庭。

……オレは感じた。〝これもまたよし！〟と……』
「だぁーれが、新婚だって？　ヘンなコト言ってると、また投げちゃうよ！」
だいたい、普通の新婚家庭って、お嫁さんがお婿さんの帰りを待つんじゃないの？
最近、サタンはボクに対して、みょーな小ワザを使うようになってきた。以前、特に魔力をルシファー先生に封印される前は、いきなりボクの目の前にやってきて、
『オレの妃になれ！』
って、ゴーインに迫ってきてたんだよね。そのたびに、ボクは魔法や〝ぷよぷよ勝負〟でおっぱらってたんだケド……。こうやって小ワザを使われると、こっちもファイヤーとかを使うワケにもいかなくて、ちょっとタチが悪い。
そりゃぁ、ボクを好きだって言ってくれるのはウレシイんだケド、あいにくボクは、一流の魔導師になるための修業中。愛だとか恋だとかっていうのは、まだ早いよ。それに、サタンのお嫁さんとなると、魔界に行かなきゃなんない。それもちょっとねぇ……。
まあ、それはおいといて。
「でもさ、先生が帰ってこなかったら、ずぅ〜っと魔力がないままになっちゃうんじゃないの？」
『うっ……！』
ボクのツッコミに、サタンはピキッ！　とかたまった。

『し、しかし、ヤツのことだ、素直にオレの魔力を返すとは限らん』
「そうだなぁ、ルシファーも、結構厳しいところがあるからな。救出とは別の次元のハナシだと言うかもしれんな」
シュテルン博士が、サタンに助け船を出す。
「そんなことないよぉ、ルシファー先生って、あんなに優しいんだもん」
ボクのコトバに、サタンはずずいっと顔を寄せて応えた。
『お前は、ヤツの表の顔しか見ておらんからそう言えるのだ。あの野郎は、ホトケの面をかぶった悪魔だ！』
「そりゃあ、あんたの弟だからねぇ」
『そうじゃなくてだな！　ヤツは、ヤツは……！』
ギリリリ……！
サタンは、ぐぐっと拳(こぶし)を握って歯ぎしりをした。サタンって、そんなにルシファー先生のコトが嫌いなのかなぁ？
『とにかくっ！』
バサッ！　とサタンはマントをひるがえした。
『オレは行かんといったら行かん！　ヤツのことだ、どうせすぐ帰ってくる！』
そう言い残して、キッチンの横の階段を上ろうとする。寝室は2階なのだ。

「そうだ！　ねぇ博士」
　ボクは、ちょっぴりイジワルな気分になって、博士に聞いた。
「なんだ？」
「例えばのハナシだけど、師匠になんかあったときに、弟子がそれを助けたら、師匠はどう思うかなぁ」
「師匠にもよるが、普通はまず喜ぶだろう」
「御褒美かなんかくれるかなぁ？」
「その可能性は高いな」
　博士はボクの考えがわかったみたいで、ニヤリとして言った。
「特に、キミがルシファーを助けたとすれば、な」
「そっかぁ……。でも、サタンがいっしょに来ないんじゃしょうがないよね」
　と言いながら、ボクは横目でサタンを見てみる。ギシギシと階段を登るサタンの姿が、ピタッと止まった。
「せっかく、サタンの魔力をもとに戻してもらおうと思ってたのに……。別の御褒美にしてもらおっと」
　ボクは、サタンから眼を離して言う。その瞬間、誰かがボクの肩をポン！
『アルル……』

サタンが、ボクの後ろに立っていた。
「わぁ！　サ、サタン、いつのまに……」
おどかさないでよ、まったくもう！
『なにをしている。さっさとルシファーのヤツを助けに行くぞ！』
「………」
あのー、さっきと言ってるコトがゼンゼン違うんですケド……。
『そして、オレの魔力が戻ったあかつきには、お前の望み通り、魔界で新婚旅行だっ！』
「誰もンなこと言ってないっ！」

スパア――――ンッ！

ボクは、どつき漫才みたいに、サタンの頭をどこからともなく取り出したハリセンでひっぱたいた。
サタンはいきなり、オカマさんみたいに、なよなよしだす。
『アルルさん、最近キツゥイ……』
「あんたがヘンなこと言うからでしょ！」
ちょっとでも同情して、なにかしてあげようかなぁ……って思うとコレなんだから。
まったくもう。プンプン！

そんなこんなで次の日の朝、ボク、サタン、シュテルン博士、そしてカーくんの4人は、旅支度を整えた。

ちなみにボクのリュックには、先生からもらったお守り袋がぶらさがってる。先生が、

『なにか緊急事態が発生したとき、この袋を開けるといい。それを解決する、ヒントが入っている……』

ってくれたものだ。

荷作りしてるときに、コレを見つけたボクは、

「ぜぇ〜ったいに、コレを使うときが来る！」

と直感！　リュックに結び付けたってワケ。

「みんな、用意はいい？」

ボクは、玄関の前にみんなが集まったのをカクニンしてから、大きく腕を振り上げた。

「じゃあ、しゅっぱ――つっ！」

『はいいんだが……』

急に入る、サタンのツッコミ。

んもう、せっかくの気合に水ささないでよ。

『ひとつ、重大なコトを思い出した』

「なによ、サタン」

ボクは、ちょっとムッとしながら聞いた。
『東に行くのはいいんだが、ドコを目指せばいいのだ？』
「あ！」
「そういえば、忘れてた」
シュテルン博士が、おっきな拳でポンと手を打つ。
ボクもすっかり忘れてた。確かに、ずぅ〜っと東に歩いてくワケにはいかないもんねぇ……。
というワケで始まったルシファー先生救出の旅は、スタートした瞬間につまずいて、盛大にズッコケたのでした。
トホホ……。先が思いやられるなぁ。

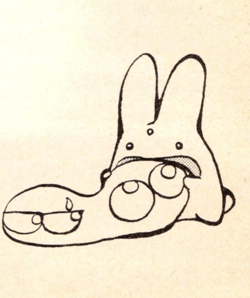
＊　＊　＊

ぺたし。
長い航海を終え、東方からの者は、はるばる赴いた土地を踏んだ。
雪だるまのような体格に、蠍(さそり)の尾、太目の手足。その手には長く細い槍が握られ、さらにその先端には真紅の瓢箪(ひょうたん)がひっかけてある。

悪魔の姿の炎〝ぷよぷよ大明神〟の部下、さそりまんであった。
「はあ〜〜、サスガにワテらんとことは随分違いまんなぁ」
決してくずれることない人なつこい笑みが、眼前に広がる港町を見回す。
船、港、街の構造がまったくさそりまんの住む地とは異なっていた。おかげで、自分の乗ってきた船がひと目でわかる。他の船は、台形や三角などさまざまな形の帆をはっているのに対し、さそりまんの国の帆は、四角だけだ。
「ほな、さっそく行きまひょか」
さそりまんは露店街を見つけると、自分も多数の商人たちに混じって、首に下げた大風呂敷を広げた。そして、
「はいはーい！　超珍しい、東方は〝日出る国〟の品が山ほどありまっせぇ〜っ！　よってらっしゃいみてらっしゃい！」
声高に行商を始めた……。

四　とりあえず着いたぞ港町!

……炸裂(さくれつ)! 四神降臨究極拳(ししんこうりんきゅうきょくけん)っ!



ブゥウウウン……!

「ふぅ……」

空間がゆがむ、ハエみたいな音がやんだとき、ボクは意識の集中をといた。

目の前に広がっているのは、ボクらの家からずぅ〜〜っと北にある港町。

「う〜ん、久しぶりだなぁ」

ボクは、潮風を胸いっぱいに吸い込んだ。

またルシファー先生のおつかいのハナシになるケド、そのときに通ったのが、この港町ってワケ。シュテルン博士の研究所は、ここから北行きの船に乗るんだけど、今度は東だ。

「ドレイクのやつは、まだ生きてるかな?」

町を歩きながら、シュテルン博士も懐かしそうに言う。

ドレイクさんっていうのは、シュテルン博士の知り合いの船長さんで、偶然にも、ボクが北

に行くときにお世話になったヒト。
今回もこの船長さんにお願いして、東に行ける船を用意してもらおうというワケなのだ。
肩のうえのカーバンクルが、いきなりボクのほっぺたをポンポンとたたいた。
「ぐーぐー」
「なぁに？　カーくん」
ボクが応えると、ちっちゃな手足をピョコピョコ動かして話す。
「ぐっぐっぐー？」
「え？　こないだのアレはやってないのかって？」
こないだのアレ？
っていうくらい、カーくんの頭に残ってそうなものというと……。
「ああ、お祭りのコト？」
「ぐー！」
『なんだ？　お祭りってのは？』
後ろを歩いてるサタンが、ボクたちの会話に割ってはいってきた。
「こないだココに来たとき、ちょうど夏祭りやってたんだ。カーくんは、今日もそれをやってないのかって」
『ふぅん』

ピョンピョンはねる。

「でもね、カーくん。お祭りはそう毎日やってるワケじゃないんだよ」

「ぐー」

「え――っ！」ってカンジで、カーくんは口をへの字に曲げた。

「今年は、もう少したってから。そしたら、また来ようね」

「ぐー！」

とカーバンクルが、また元気に踊り出す。

よきかなよきかな。

楽しそうに肩のうえで踊るカーくんをながめながら歩いてると……、

ドン！

「きゃっ！」

ボクはなにかにぶつかって、思いっきりしりもちをついた。

「いった―――い！」

なんなのぉ？

ぶつかったところを見上げると、そこにはブ厚い壁みたいなシュテルン博士の背中が。
「博士ぇ、イキナリ止まんないでよぉ」
ボクは、おしりをさすりながら言った。ちょっとヒリヒリ……。
「すまん」
と、ある一点をジッと見つめながら、博士は言う。
「どうしたんですか？」
ボクも、博士の見てるほうを眼でおった。ボクらがいま歩いてるのは、行商のヒトたちのお店が並ぶ、露店街。そのイッカクで、なにやらお兄さんたちが集まって、ワイワイやってる。よくよく見ると、そのお兄さんたち、ずいぶんガラが悪そう。
『なんだ、ケンカか？』
サタンが言った。
ああん、ボクがいま言おうと思ってたのにぃ。
「せっかくだから、準備運動でもしていくか」
ふっとい指をポキポキ鳴らしながら、シュテルン博士はそっちに向かって歩き出す。顔が、すっごく楽しそうにウキウキしてる。
「は、博士ぇ」
「ちょっと寄り道するぞ」

って言うが早いか、博士はダッシュした。
「オラオラァ！　私もまぜろぉ！」
「ちょ、ちょっと待ってよぉ！」
ボクとサタンは、あわてて博士を追いかける。
博士ったら、ケンカなんかにまざってるバアイじゃないよぉ！

* * *

洞窟（どうくつ）の壁にしつらえた、無数のかがり火が、こうべをたれる魔導師を照らしていた。このかがり火が、洞窟の広さを示めしている。おおよそ、ちょっとした城の謁見の間ていど。しかしかがり火は、天井までは照らすことはできていなかった。
中央の業火、〝ぷよぷよ大明神〟の姿はない。
ザッ……！
ふと、磔（はりつけ）にされたルシファーの前に、人影が立った。純白の着物に漆黒の袴（はかま）、後ろで無造作にひっつめただけの長い髪、手に握られた鍔（つば）のない刀……。
マサムネであった。
彼の姿を気配で察したルシファーは、形のよい口を小さく動かして尋ねる。

『見回りかね？』
「さよう」
『ご覧の通り、私は身動きがままならん。わざわざ見回りなどせずともよい、と大明神どのに伝えてはいかがかな？』
「…………」
しばし、マサムネは無言で魔導師を見つめた。
『どうした？』
「なぜ、そのように落ち着いていられるのか？　それで勘繰るな、と申されても無理な注文でござる」
『はっはっは、確かに。これも性分、許されよ。……それに、私の占いでは、大明神の望みは適わぬ、と出ている……いや、マサムネどのの望みには結果的になるか……』
少々憮然(ぶぜん)とし、マサムネは問う。
「どういうことでござるか？」
『いずれわかるでござるよ』
「フッ……戯(ざ)れ言もたいがいになされよ。最悪、そなたの首を落とさねばならぬ」
『それは困る』
「ならば口を慎まれよ。されば、大明神様もそなたの命までは取りますまい」

言い残し、サムライは洞窟の暗闇(くらやみ)へと消えていった……。

＊　＊　＊

「だぁ──れに断って、ここで商売してんだ？　あぁ？」
ガスガスッ！
「ひぃぃぃっ！　カンニンしてぇな、もう」
「るせぇ！　ッ殺すぞオラアッ！」
げしげしっ！
「イタタタタ……。やめておくんなはれ」
ボクたちが近づくにつれ、ガラの悪いお兄さんたちがナニをしてるのかがはっきりしてきた。みんなでよってたかって、誰かをイジメてるんだ。
相手は、雪だるまみたいにぽちゃっとしてて、サソリのしっぽがついてるモンスター、その名もさそりまん！
「オラオラッ、出すもん出さんかい！」
ゴンゴン！
「ンなこと言われたかて、ワテ聞いてまへんがなぁ」

「っせぇってんだコラァッ！　ン殴るぞテメェ！」
ドカバキッ！
「あたたたたた……。もう殴っとりますがなぁ」
ルシファー先生よりも徹底したニコニコ顔が、ほんのちょっとイヤそうにゆがんでる。
ナニがあったか知らないケド、大勢でひとりをイジメるなんて、ちょぉっとヒドイんじゃない？
シュテルン博士がケンカなんかしたら、相手がかわいそうだから、止めようと思ってたケドやめた。ボクもケンカしちゃうもんね。
「コラ――――ッ！　やめなさぁ――いっ！」
ボクが叫ぶと、ヤクザなお兄さんたちは、ジロッといっせいに睨(にら)んだ。
「う……」
ちょっとハクリョク。
ボクは思わず足を止める。
「ンだ嬢ちゃん、オレたちに用かよ？」
リーダー格らしいお兄さんが、ガンを飛ばしながら言った。
ううっ、そんなコワイ顔したって、負けないもんね。
「ひとりで大勢……じゃなかった、大勢でひとりをイジメるなんて、許せない！　ボクが相手

になるよ！」
「るせぇっ！　ガキがでしゃばんじゃねぇっ！」
イキナリ、ヤクザのパンチ！
しまった！　早すぎてよけられない！
ボクは反射的に、手でかばいながら眼をぎゅっとつぶった。

バシッ！

「！」
イタッ！……くないぞ。
「あり？」
確かに、どっかに当たった音がしたんだケド、ボクの身体はどっこも痛くない。
眼を開けて一番最初に飛び込んできたのは、見たことある真っ黒なマント。
「サタン！」
パンチが当たった、と思った音は、サタンが手のひらで受け止めたものだったのだ！
サタンはヤクザの拳をぎゅっと握って、ちょー威圧的に見下ろしながら言った。
『オレの妃に手を出すとは、いーい度胸だ……』
おおっ、コトバは引っ掛かるけど、なんかカッコイイぞ。ちょっと見直しちゃった。

『このサタン様が相手になってやる。かかってこい！』
「がんばれサタン！」
なぁんて、ボクが思わず言っちゃったもんだから、サタンの自信が百倍にふくれあがった。
『ふはははは……！　どうしたチンピラ！　オレがこわいか！』
「ンのやろぉ〜……。メンドくせぇ！　てめぇらやっちまえ！」
おんどりゃぁ〜〜っ！
と、リーダーの声とともに、ヤクザさんたちがいっせいにとびかかる！
一方のサタンは……、
『わっ！　ちょっと待ておまえら！　全員で来るなんてヒキョウだぞ！』
「ンだけカッコつけといて、卑怯（ひきょう）もクソもあるかっ！」
バキッ！
『げはっ！』
右のほっぺたにモロにヒットしたパンチを皮切りに、
どかばきどかばきどかばきどかばきどかばき……！
『でぇぇぇぇえっ！』
あわれ、サタンは袋叩き（ふくろだた）きにされた。
『ばたんきゅ〜……』

「あ～あ……」
思わず、ボクの口からため息がもれる。ちゃぁんと魔力があったら、よかったんだケドねぇ。ボクなんかのためにカッコつけようとするから……。
なぁんて考えてるあいだに、ヤクザさんたちの眼が、じろっとボクを向いた。
「次は、テメェの番だぜ」
「う……」
いや、そんなリチギに順番守らなくても。サタンをノバしたんだから、それでいいじゃん。ンなコトを言おうもんなら、ソッコーでかかってきそうなほど、ヤクザさんたちの眼がギラギラしてる。さすがのボクも、いっぺんに大勢を相手にするのはちょっと……。
「さぁ～て、そろそろわたしの出番かなぁ？」
ずずいっ！
ボクの肩をポンとたたいて、シュテルン博士が一歩前に出た。顔が、ものすごぉ～くウキウキしてる。
「ンだテメェはっ！」
「タダのケンカ好きのお兄さんだ」
どうどうと言っちゃうところを見ると、ホントに博士はケンカが大好きみたい。サタンもボロボロになっちゃったし、こういうトキは、ものすごい心強い味方だね。

「オッサン、ケガしねぇうちに引っ込んだほうがいいんじゃねぇの？」
「大丈夫、あのオッサンはケガしねぇ」
「なんでだよ」
「だってあのオッサン、毛がねぇじゃん」
「あ、そうか！」
げらげらげら！
「…………」
く、くだらない……。
ボクは、めまいがした。
だけど……、サタンを袋叩きにして、ズイブン自信ついちゃったみたいだけど、シュテルン博士をあまく見ないほうがいいんじゃないのぉ？
と、心の中でヤクザさんたちに警告しながら、ボクはシュテルン博士を見上げた。
あっ！
思わずでっかい声をあげそうになる。
「…………」
シュテルン博士は、だまってニコニコしてるケド、口許がピクピクしてて、コメカミには青

スジがたっていた。
お、怒ってる……。ハゲって言われたのにそーとーキてるみたい。
オッサンとか。
ボク、しーらないっと。
「すぅぅっ……！」
やがてシュテルン博士は、大きく息を吸いこんで、両手を広げて前にかざした。ヤクザさんたちは、冗談の言いあいに忙しくて、博士のしぐさに気づかない。
「四神降臨(ししんこうりん)……」
そう言いながら、博士は右手を下に、左手を上にゆぅっくりとスライドさせた。手から発したオーラが、博士の目の前にひし形を造る。
シュォォォォォォッ！
そのひし形の中に、怪獣みたいな黒いカメ、真っ白なトラ、水晶みたいな青い龍、真っ赤にキラキラした不死鳥の幻が吸いこまれていった。
「おっ、なんだオッサン、やるんかい？」
ようやくヤクザさんたちは気がつく。もう遅いよん、とボクは直感。
「究極け――――んっ！」

気合一閃！　博士はオーラのひし形に、思いっきりパンチ！

グオッ！

「ひぇ……」

光の波が、悲鳴をあげるヒマもないヤクザさんたちを飲みこむ。

ドゴバ────ンッ！

大爆発！

「うわぁ！」

ボクはカーバンクルを抱きしめて、爆風に吹き飛ばされないようにふんばった。

ヒュウウウウウウ……。

砂煙りがおさまってから眼を開けると、ヤクザさんたちの姿は、カゲもカタチもない。だけど、あれだけの大バクハツだっていうのに、地面や周りの家にはキズひとつついてないよ。

「し、死んじゃったんですかぁ……？」

ボクの言葉に、博士は手をバンバンとたたきながら言った。

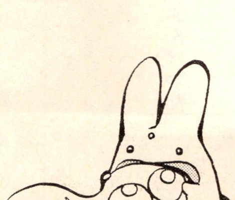
「大丈夫、どこか遠くにふっとんだだけだ。……しかしあのぶんだと、魔導学校あたりまで行ったかもしれんな」

「な、なにもそこまで……」

この港町から魔導学校まで、歩いて半年くらいの距離がある。
「さすがに、私も少々反省している」
博士は、チッと舌打ちしながら言った。
「四神降臨究極拳（ししんこうりんきゅうきょくけん）なんて使わなきゃ、もっと楽しめたんだけどなぁ……」
ガクッ★
ボクは、首だけカックンとずっこけた。
博士ってば、ホントにケンカ好きなのね。……やっぱり、最初に止めておけばよかった。

五　ついに出てきたさそりまん！

……して、その正体は！



「いや～すんまへんなぁ、助けてもろて」
おっきなニコ眼と、おっきな口でヘラヘラして、後ろアタマをぽりぽりかきながら、さそりまんは言った。
「いやぁ、どういたしまして」

ボクもつられてヘラヘラ。

『しかし、なんだってチンピラどもに囲まれていたのだ？』

ボクとさそりまんとのあいだの雰囲気をブチ壊すように、サタンがぶすっとした顔で言った。機嫌が悪いのは、カッコつけたのはいいケド、すぐやられちゃって、オマケに気絶してるあいだに全部終わっちゃってたから。

「へぇ、実はワテ、東から行商に来てましてん。ほしたらアノ兄さんがたが、よそもんが、誰にことわって商売してんのや！　って、インネンふっかけてきましたんや」

「東？」

ボクらはちょっと驚いた。

「東の、どのへん？」

ボクが質問。

「〝日出る国〟ですがな」

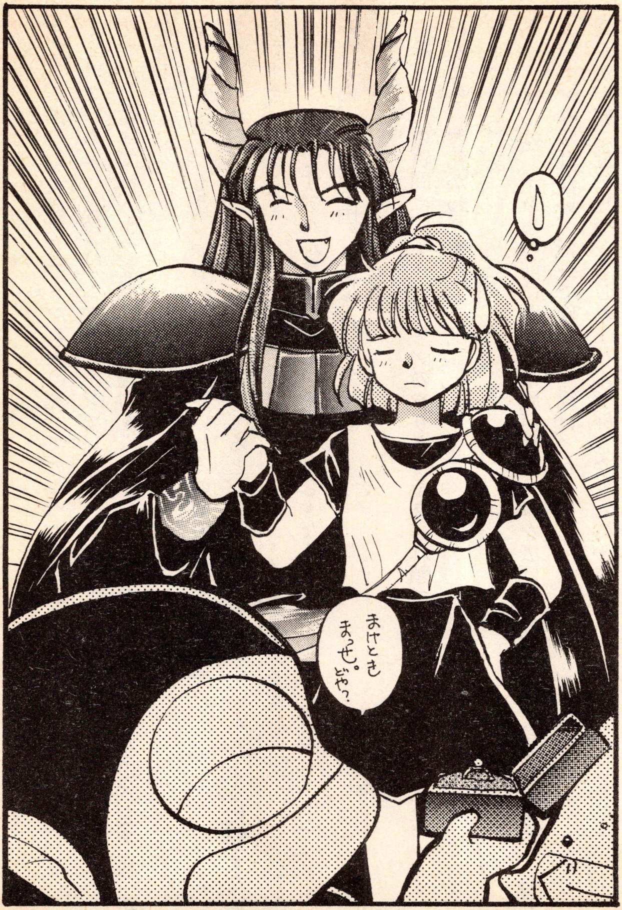
「それは好都合」

シュテルン博士は、ペンッと自分のふとももを叩いた。……ちょっと、親父クサイ。

出発前、ボクらは〝魔導レーダー〟でルシファー先生の反応が消えたあたりを、地図で確認した。そのおおよその位置が、〝日出る国〟ってワケ。

「あのね、あのね」

ボクはさそりまんに言う。
「なんでっか？」
「真っ黒なローブ着てて、フードで顔の下半分しか見えへん魔法使い知りまへんか？」
「……なんで、ワテとおんなじ口調になりますねん」
「あ。……いやぁ、ついつられちゃって」
それはともかく！
「いま話したような魔法使いって、見たことないですか？」
「ありまっせ」
「え！　ど、どこで！」
ボクは、思わず身を乗り出した。
そんなボクの期待に対して、さそりまんはちょっとすまなそうにアタマをかく。
「さぁ～、ちょっと忘れてしまいましてん……」
「そっかぁ……」
『大丈夫』
後ろから、サタンがボクの肩に手をおいた。
『ヤツが〝日出る国〟にいることは、これではっきりした。オレたちは、まずそこを目指せばいい。すべてはそれからだ』


まけときまっせ。どやっ。
!

「サタン……」
うう っ、ちょっと感動。サタンがそうやって元気づけてくれるなんて。
……って、ちょっと待て。このパターンでいくと、次のセリフは……。
『そう！　すべては、ヤツを見つけ、魔力をもどさせ、お前と魔界で盛大な結婚式をあげてからだっ！』
やっぱり……。もう、いちいちツッコミいれるのも疲れてきたなぁ。
「サタンったら、いつまでもンなこと言ってると、先生に魔力もどしてもらうように頼まないからね！」
『ああっ、ウソですアルルさん。……いや、ウソじゃなくて、ホンキなんだケド……』
「みなさん、〝日出る国〟に行きはるんで？」
「うむ」
さそりまんの質問に、ボクとサタンのやりとりをあきれ顔で見てた、博士が答えた。
「ほんなら、お礼がわりや」
ドサッ！
さそりまんは、ボクらの前におっきな風呂敷づつみを広げる。その中にあるのは、こっちじゃゼンゼンみかけない、奇妙で珍しい品物ばっかり。
「なんか、旅の役に立つかもしれまへん。好きなもん持ってってよろしで」

「ホントに？」
「ホントホント。ワテも浪花（なにわ）のさそりまんや、ウソはよう言いまへん」
「じゃあサッソク……」
ボクはかがんで、品物をひとつひとつ手に取って見た。
……といっても、ナニがどんなものか、さぁっぱりわかんない。
豪華な装飾をした鏡とか、それとおんなじ模様のカタナとか、数字の〝9〟みたいなカタチをした奇麗な宝石のネックレスとか……。
「ねぇねぇ、これなぁに？」
ボクはさそりまんに聞いた。
「そっちの鏡は〝ヤタノカガミ〟。刀は〝クサナギノツルギ〟。んで、最後が〝ヤサカニノマガタマ〟でっせ」
「ふぅん」
なんだかタイソーな名前だけど、まだちょっとピンとこない。ああっ、こんなコトになるんなら、もっと世界史あたりを勉強しとくんだった！
と悩むボクを、カーバンクルが呼んだ。
「ぐーぐー」
「なぁに？　カーくん」

「ぐー」
手に、自分とおんなじくらいの、カエデみたいなカタチをしたうちわを持ってる。
「なにこれ。欲しいの？」
「ぐー！」
「それは、〝芭蕉扇(ばしょうせん)〟っちゅーやつでっせ」
さそりまんが、名前を教えてくれた。……まぁ、カーバンクルが欲しいって言ってるんなら、もらっておきましょ。
「おりょ？」
ふと、ボクはカーバンクルのそばにある真っ赤なひょうたんを見つけた。豪華そうなものばかりなのに、これだけなぁんか安っぽい。
「なにこれ？」
ブンブンブン。
ふっても、なんか入ってる様子はない。
「それはやな、まずフタを開けますねん」
「ふんふん」
ボクは、言われるままに、キュッポン！　とフタを開けた。
「で、誰かの名前を呼びますねん」

「なるほど。……ねぇねぇ、サタン」
『なんだ？』
って、サタンが返事をした瞬間！
ヒュゴォオオオオオオッ！
『うわあああああああああっ！』
ものすごい勢いで、サタンはヒョウタンの中に吸いこまれた！
「ああっ！　サタン！」
「ほいさ」
ボクが驚いてるあいだに、さそりまんはヒョウタンをボクから奪い取る。
「さ、さそりまんさん……」
「まあ、こうして使うワケですねん」
ひょうひょうとした顔でいいながら、さそりまんはヒョウタンのフタをきゅっと閉めた。いつものニコニコ顔に、ちょっとだけ邪悪そうな影がついてる。
「貴様、いったい何者！」
猛獣みたいな顔と声で、シュテルン博士が言った。もうすでに、戦う準備はできてる。
「ワテは、七ぷよ神がひとり。〝大黒〟のさそりまんや。……残念ながら兄さん、あんさんと

ここでやる気はありまへん」
「そっちがなくても、こっちには理由がある！」
ザッと博士がかまえると、さそりまんはちょっと引いた。
「おっと、四神ナンタラっちゅーのはやめといたほうがよろしで。ヒョウタンごと中のお人もぐちゃぐちゃでっせ」
「くっ……」
「サタンをどうするつもり？」
「このお人を助けたければ、〝日出る国〟まで来なはれや。あんさんらの探してるお人も、見つかりまっせ」
「え？」
ルシファー先生も、この〝七ぷよ神〟とかいうのと関係があるの……？
「ほな、さいなら」

ドロン！

ニンジャみたいな煙を出して、さそりまんの姿はあとかたもなく消えた。
「ああっ、待って！……ワープ！」
「よせ、アルルくん！」

呪文（じゅもん）を唱えようとするボクを、シュテルン博士はあわてて止める。
「いまのキミの魔力では、〝日出る国〟までは届かん」
「あ、そうか……」
だから、港町まではワープで来て、船を使おうとしたんだっけ……。
「これは、ますます早急に、東へ向かわねばならなくなったな」
「うん！」
だけど、まさかサタンまでさらわれちゃうなんて。もしかして、ルシファー先生と双子の兄弟だから……？
「しかし、七ぷよ神とはいったい……」
博士は、腕を組んで、遠くの海をながめた。ボクも真似して、ちょっとカッコつけようと思った瞬間！

「あ――――っ！　カーくん！」

カーバンクルが、べろぉ～んと長いベロを出して、さっきの芭蕉扇を食べようとしてる！
ボクは、あわててそれを取り上げた。
「だめでしょ、カーくん。これは食べ物じゃないの」
「ぐー！」

わっかりましたぁ！　ってカンジで、カーバンクルは右手をあげた。……ホントにわかってんのかなぁ、このコは……。

それよりもなによりも、早く〝日出る国〟に行かなきゃ！　助けるのがふたりになっちゃったよぉ！

＊　　＊　　＊

洞窟の一角。光りといえばぷよぷよ大明神のみずから発するものしかなく、まわりは地獄のような暗闇におおわれていた。はりつけにされたルシファーの姿がないことから、どうやらそこは別の部屋らしい。

横たわるサタンを挟んで、ぷよぷよ大明神と〝大黒〟さそりまんが対峙していた。

『ちっが――――う！　こやつではない』

先に声を発したのは、大明神。

「せやけど、大明神はん」

『なんだ』

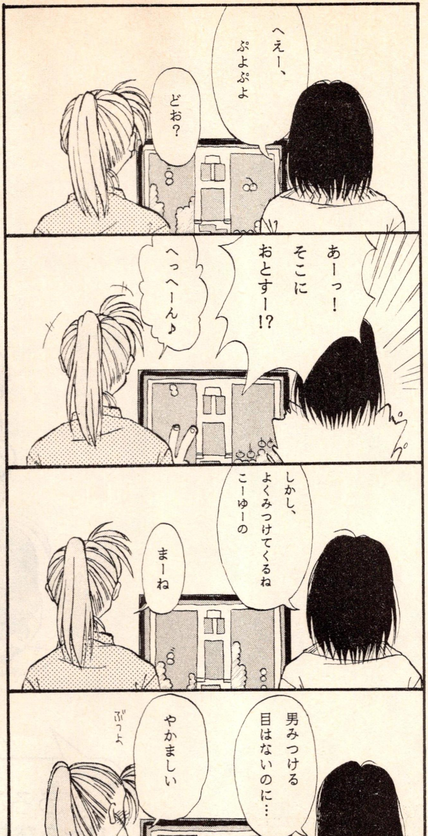
「ワテが出る時、誰をつかまえてこいって言いまへんでしたで」

『え？　そーだっけ？』

「そうでんがな」
うんうん。
と、大黒の後ろに控える他の七ぷよ神たちもうなずく。
『ぬぅ……。まぁ、こやつは魔力の媒介として使えそうだ。……それより、先ほど申した一行の件、間違いないな？』
「へぇ、ぜぇったいに、この〝日出る国〟に向かってます。ワテも浪花のさそりまん、ウソはよう言いまへん」
『よし、七ぷよ神どもよ、彼奴(きゃつ)らを迎え撃て。我の復活を、いかなる者にも妨げられることがあってはならん！』
「ははっ！」
大黒も含め、7人すべてが消えた。
『さてマサムネ……』
「ここに」
ぼうと、サムライの姿が炎の傍らに浮かび上がる。
『お主は別動し、大黒の申しておった少女、ここにひっとらえてまいれ。彼奴は使える』
「かしこまりました」
マサムネは一礼し、炎に背を向けて闇(やみ)の中へと消えていった……。

第二章〝アルル、日出る国に到着のこと〟

彼女と私





うろこさかなびと

ぴ～ちぴちの、かわいい人魚モンスター。ちょっと気が弱いのが玉にキズ。

一　着いた——っ！

……ぷよぷよ大明神って、ナニ？

ザザザァ——ッ……。

波間をすべる船の音。ポカポカしてあったかい、お日サマの光。それから、ほどよく涼しい海の風……。

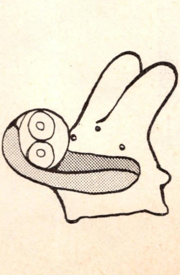
「ん～～っ、気持ちイイねぇ」

「ぐぅ～～っ」

金属であちこちが補強されたゴツゴツした甲板の上、深呼吸しながらボクが言うと、カーバンクルもマネをしながら応える。

サタンがヘンなヒョウタンに吸いこまれて、さそりまんに連れていかれちゃったあと、ボクらはすぐに船を用意した。ずぅっと前にもお世話になった、ドレイク船長の魔法機械船だ。

「どうだ？　今日は天気もいいし、サイコーだろ？」



そのドレイク船長が、帆のてっぺんの見張り台からするすると降りてきながら、ボクに言った。ボクは素直にうなずく。

「うんうん！」

ルシファー先生がいなくなっちゃったとか、サタンがつかまっちゃったとか、イヤ〜なことがフッ飛んじゃうくらい。

「ぐー！」

カーくんも、「もーサイコー！」ってカンジで、ボクの頭のうえでぴょこぴょこ踊ってる。

「それはなにより」

片目の船長は、イカニモ海の男っ！　ってカンジのおっきな身体をゆらしてガハハと笑った。

船に乗ってるのが、心から楽しくてしょうがないんだね。

実はこの船、シュテルン博士の発明品だったりする。あちこちに機械を使ってて、風がなくても、操縦する人がいなくても動いちゃう。だけど今回は、

「日出る国だと？　ずいぶん遠いとこに行くんだな。……よっしゃ！　途中でなんかあったら大変だ。オレが送ってやるよ」

って、わざわざ時間を空けてついてきてくれたのだ。

ドレイク船長って、顔も身体もゴツイけど、すっごく優しいんだよね。感謝感謝！

「そーいやぁ、博士はまだ中にいるのか？」

「たぶん」
親指で船室を指しながらの船長の言葉に、ボクは肩をすくめて答えた。
なんだかんだでボクらの旅は、もう何日も過ぎちゃってる。
で、シュテルン博士は、船が動き出してからずぅ〜っと、部屋に閉じこもったまんま。ボクらが寝てるときとかに出てきて、ゴハンを食べたりしてるみたいだけど……。
バタン！
いきなり船室のドアが開いて、甲板におっきな人影が出てきた。
「博士！」
「そ、そろそろ……着く頃じゃ……ないのか？」
と話すシュテルン博士の顔は青白くて、脂汗がいっぱいで、息も荒い。
「ああ、もう少しだ。……ケドよぉ」
「は、博士、大丈夫ぅ？」
「大丈夫だ……。心配いら……おぶっ！」
ドタタタタタタタ……！
博士は突然、いっぱいに膨らませた口を押さえながら、慌てて甲板のすみっこに走っていった。それから海に向かって……、

「おうええええええええっ……！」

「あーあー、しょうがねぇなぁ」

ドレイク船長が、船べりでケロケロやってる博士を見ながら、ホントにどうしようもなさそうに肩をすくめる。うんうん、まったくだよね。

今回の船旅でわかった衝撃の事実！　シュテルン博士は、思いっきり船に弱かったのだ。船に乗った途端に酔っちゃって、いままで何日も何日もこの調子だったりする。やぁっぱ、何でもできるカンペキな人間って、いないもんなのねぇ……。

なぁんてコトを考えながら、ボクはふと前を見た。

「およ……？」

とぉ〜〜くのほうに、うっすらと見えるあの影は……？　横にだだ――っと長くて、真ん中がキレイに盛り上がってる。あれはお山かな？

「ねぇねぇ船長、あれってもしかして……」

「どれどれ」

ボクの言葉に、船長も前を向いて眼をこらす。

「おお、あれぞまさしくフジヤマ！　日出る国のトレードマークだぜ」

「へぇ〜」

う〜〜ん、なんだかドキドキしてきたぞ。あそこにサタンと、それからルシファー先生がいるんだ。

「着いた——っ！」ってカンジと、「さぁ——て、これからだ！」ってカンジが、ごちゃまぜになってボクの心から吹き出してくる。

がんばるぞぃ！

＊　　＊　　＊

かがり火が、ふたつに増えた十字架をおぼろげに照らす……。

一方は先客、魔導師ルシファー、もう一方に、新たに囚われたサタンが張りつけられていた。

『おい！』

サタンが、吠えるように隣に向かって声を発する。しかし、魔導師は答えない。

『おい！　起きてるのはわかっているのだ、返事をしたらどうだ！』

『なにかな？』

ようやく、魔導師が顔をあげた。だが、フードのおかげで表情までは読み取れない。

『なにかな？　ではない。……貴様、どういうつもりだ？』

『あのマサムネというサムライ、真に強い男だ。このわたしが、遅れを取るとは……』

『そういうことを論じているのではない！　なぜさっさと脱出しないのだ！　貴様ならできるはずだろう』
『簡単にできるのなら、そうしている』
『どういうことだ？』
『あの、ぷよぷよ大明神という存在、理由はわからぬが、わたしたちとまったく同じ性質の力を持っている。しかも、極めて強い』
『なんだとぉ……！』
自由を奪われながらも、サタンは怒りに身体を震わせた。
『では、アルルはどうなる！　それほどの相手だとすれば、いまのヤツでは太刀打ちできん！　しかも、そんな敵の存在すら知らずに、ヤツは、オレと、貴様のために向かっているはずだ！』
『………』
魔導師は応えない。
『アルルにもしものことがあったら……オレは貴様を絶対に生かしてはおかんぞ！』
『ひとつ、賭けをしないか？』
『な、なに？』
唐突な弟の問いに、兄は眼を丸くした。

『アルルくんがわたしたちの目の前にきたとき、どちらの名を先に呼ぶか……？』
『オレだったら？』
『アルルくんはキミのものだ。そして、魔力も戻してやろう。キミなら、状況を打破するに足るだけの力があるだろう』
『……もし、貴様だったら？』
『わたしが責任を持って、すべてを解決しよう。ただし、アルルくんはいただく』
『き、貴様……やはりアルルのことを……』
『フ……。やはり、兄弟だということか。しかも互いに、欲しいものは必ず手に入れる主義と来ている。もっとも、いまのところはわたしに分がありそうだな……』
『クッ……』
いまにも襲いかからんばかりの形相で、サタンはルシファーを睨む。しかし、両手両足の戒めが、それ以上の行動を許さなかった……。

*　　*　　*

ズン！
ドン！

バァ――ンッ！

って効果音が聞こえてきそうなカンジで、ボクは目の前の3人――匹？――をひとりひとりニラんだ。

日出る国の、〃ミヤジマグチ〃っていう港にようやく着いたボクらの行く手をイキナリ阻むのは、そろいもそろった、超巨大モンスターたち！　この壁は、そーカンタンには越えられそうにないぞ。

「ここは通さないゾウ」

真ん中のぞう大魔王が、ボクらの前に立って、初めてしゃべった。

「どーして？」

「ぷよぷよ大明神サマの御命令である」

ボクの言葉には、カラスとコウモリと悪魔を足したような〃まもの〃が応えた。

「ぷよぷよ大明神？」

ナニソレ？　ぷよぷよ大魔王みたいなヤツなのかな？

「キシャ――――ッ！」

イキナリ、3人の中でイチバンおっきい、ドラゴンが雄叫(おたけ)びをあげた。

「うわぁ！　な、なに……？」

「ぷよぷよ大明神サマとは、この日出る国を治める最高の神だ！　と言っているのである」
「あ、ああ……」
雄叫びじゃなくって、セリフだったのね。
「そして、我々は七ぷよ神。大明神サマにお仕えする神なんだゾウ。ちなみに俺様（おれさま）は〝布袋（ほてい）〟のぞう大魔王なんだゾウ」
「ワシは〝寿老人（じゅろうじん）〟のまものである」
「シャギャ――ッ！」
「今度はなんて言ってるの？」
「〝福禄寿（ふくろくじゅ）〟のドラゴンだ、と言ってるんだゾウ」
そういえば、あのさそりまんは〝大黒〟って言ってたっけ。……てコトは、あと3人は他にいるワケね。
それはいいんだケド……。
「どーして、この国に来ちゃイケナイの？　ボク、なんにもしてないよ」
「ギャオォォォォォォォン！」
「これからするのだ！　と言っているのである」
疲れるなぁ、この会話。
でもでも、これからするって、どういうコト……？

「ボクらは、単にルシファー先生を探しにきただけなんだよ。それからサタンも……」
って、ちょっと待って。

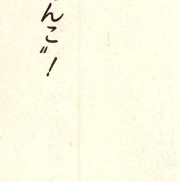
「あ――――っ！」

思い出した！
港町で、さそりまんが消える前に言ってたっけ。ボクたちの探してる人が、ここで見つかるって。……いやいや。それよりもなによりも、サタンを連れてったのがさそりまん本人、つまり七ぷよ神なんだ！
きっとルシファー先生も、ぷよぷよ大明神に関係があるに違いない。だったら、ぜぇ――ったいに引かないぞ。テッテー抗戦しちゃうもんね！
ザッ！
ボクは身構えた。
「およ？」
のはいいんだケド、ぞう大魔王、まもの、ドラゴンは耳をおさえてひっくり返ってる。ボクの足元では、カーバンクルまでが……。
「ぐぅ～……」
「カ、カーくん！　大丈夫？」

「おのれぇ、驚いたである……」
ボクがカーバンクルを抱き上げると、３人ものそのそっと起き上がった。
「イキナリ、でかい声を出すんじゃないゾウ」
「えへへ、ごめぇ～ん」
なぁんて素直にあやまってるバアイじゃない。みんながひっくり返ってるあいだに、さっさと先に進めばよかったような気がする。
「グルルルルルルルル……」
「最後通告だ。おとなしく自分の国に帰れば、命だけは助けてやる、と言っているである」
「やぁーだよ」
先生とサタンを助けるまでは、ぜぇ――――ったいに、誰にも負けないもんね！
「そうであるか……」
「では、インド人も驚きの、俺様たちの怒りを受けるがいいゾウ！」
ギラン！
ぞう大魔王、まもの、そしてドラゴンの眼が、凶悪に光る。
「う……」
ちょっと、圧倒されそうなハクリョク……。でもでも、こっちにだってつよぉい味方がいるんだから！

「シュテルン博士！」
って振り返った先に、博士の姿はなかった。
「あり？」
その代わり道の脇(わき)の松林から、船のうえで何度も聞いたあの声が……。
「おぉえええええっ……！」
「だぁぁぁあっ！　博士ぇ！」
まだ船酔いが治ってなかったのね。だからって、なにもこんなキンパクした場面でケロケロやんなくても……。
ボクらの旅は、日出る国に着いた瞬間に、いきなりピ——ンチ！

二　ルルー登場！
……そして必殺！〝るいぱんこ〟！



「激怒ぉ〜〜っ！」
そう大魔王の激怒パンチ！　ボクの顔よりおっきな手が、ぐわっと迫る！

「ひょい、っと」

ボクはそれを、ギリギリの間合いでよけた。だけど、間髪入れずにまものの爪が！

「死ぬである！」

「おととと……」

なんとかそれをかわした……ところへ、今度はドラゴンのファイヤーブレス！

「キシャ――――ッ！」

「うひゃあっ！」

ゴォォォォォッ！

慌ててかがんだボクのうえを、モノスゴイ炎が通過する。

七ぷよ神の重量級トリオとの戦いが始まってからというもの、ボクはひたすら防戦一方。だってだって、博士が船酔いでいないんだもん。3対1じゃあ、ぜんぜん勝ち目ないよぉ。

「は、博士ぇ、なんとかしてよぉ！」

「す、すまん……船酔いがひどくて……」

と言ってみても、林の中から聞こえて来るのは、博士のナサケナイ声。

「おぅえぇぇぇっ……！」

「だぁ――っ、もう！」

「よそ見してるバアイじゃないゾウ！」

またまた激怒パンチ！

「おっと」
ボクはそれを、なんとかよける。
3人の攻撃はパワーはあるけど、そんなにすばやいワケじゃないから、よけるのはムツカシクない。だけど、こうスキなくこられちゃあ、呪文(じゅもん)を唱えるヒマなんかないよぉ。
「ど、どうすれば……」
スタミナ的に、ボクのほうが先に疲れちゃう。
早くなんとかしないと……。
って思ってるのは、相手もおんなじみたい。
「おのれぇ、チョロチョロ小うるさいヤツである」
「こうなったら、全員で同時に攻撃するゾウ」
「げげげ!」
そ、そんなコトしたら、ボクはぐっちゃんぐっちゃんに……!
なぁんて考えてる間に、3人が一気に迫る!
「行くである!」
グォッ!
だぁぁぁっ! 3方からじゃ、避けられないよぉ! 助けて、ルシファー先生っ!
「アルル! ドラゴンに集中なさい!」

ふと聞こえる、なつかしい女の人の声。
「キシャ――――ッ！」
ゴォォォォォッ！
「それっ！」
ボクは言われるまま、ドラゴンの炎をジャンプでかわした。だけど、まもののかぎ爪とぞう大魔王の激怒パンチは……？
「女王様キィ――ック！」
「ぶも――っ！」
ドゴォン！
「ぐわっ！　である」
「痛いゾウ！」
着地してすぐ、ボクの眼に飛び込んできたのは、ぞう大魔王にパンチするウシ頭のモンスターと、まものに飛び蹴(げ)りをかます――スカートのまくれ具合がちょっちアブナイ――見たことある美女……！
「ルルー！　ミノちゃん！」
モンスターのほうがルルーで、美女のほうがミノタウロス！
ウソウソ。

サラサラで長い水晶色の髪、ちょっちキツイけどよく整ったキレイな顔、水色の露出度の高いドレスに包まれたナイスバディ——ちょっと、うらやましい——、こぉんなオネェさん、ボクはぜったいに忘れない。

サタンのお嫁さんを目指す格闘家、ルルーだ！

それからそれから、シュテルン博士に負けないくらいのカラダで、ウシ頭のモンスター、これがルルーの下僕のミノタウロス！

……はいいんだケド。

「どどど、どうしてここに……？」

「話はあとあと！　いまのうちに呪文でなんとかしなさい！」

「う、うん……！」

と言ってみたものの……。

ぞう大魔王、まもの、ドラゴン。こぉんなおっきなのを3人も相手にして、はたして魔導力が足りるかなぁ……。

「ぐー！」

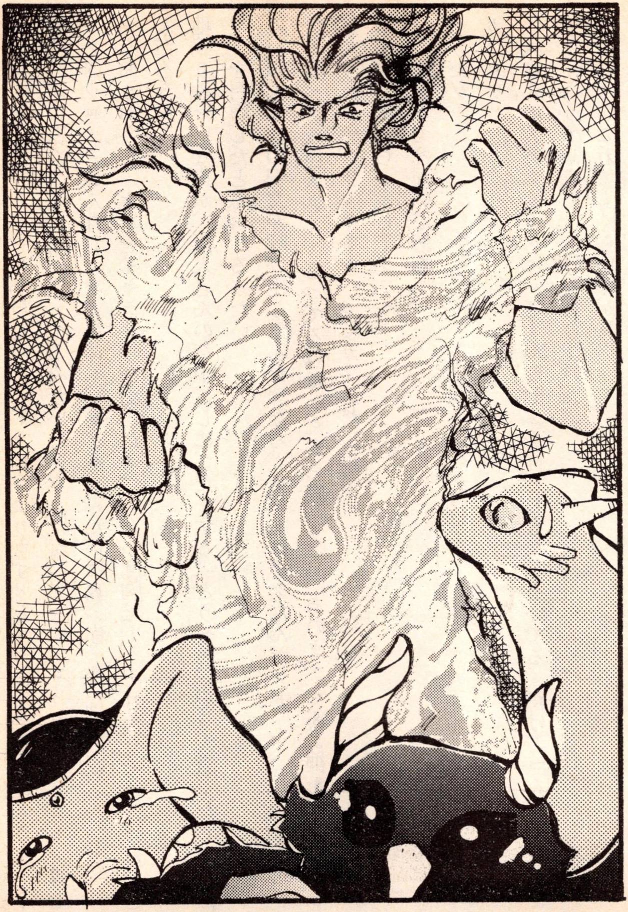
突然、肩のカーバンクルがボクのほっぺをツンツンした。

「なぁに？　カーくん」

「ぐぅー！」

見ると、右手でちっちゃな紙切れをピラピラさせてる。左手には、ルシファー先生にもらったお守り袋が。旅に出る前、リュックにくくりつけたヤツだ。
「も、もしかして、それ開けちゃったのぉ？」
「ぐー！」
まあ、困ったときに使えってもらったヤツだからいいケド……。
「どれどれ」
ボクは、カーバンクルから紙切れを受け取って見た。それに書いてあるのは……、
〝るいぱんこ〟と唱えるべし
って、先生の達筆なメモ。
「〝るいぱんこ〟？　なんの呪文だろう？」
「ぐぅ〜」
さぁ〜そこまでは、ってカンジで、カーくんはちっちゃな肩をすくめる。
「アルル！　なにやってんの！」
「あ！」
ルルーの怒鳴り声で、ボクは我に返った。そういえば、戦闘中だったっけ。
ルルーとミノちゃんが、いくらパンチやキックをかましたからって、ぞう大魔王もまものもばたんきゅ〜したワケじゃない。ドラゴンだっているし。

でボクに代わって、ルルーとミノタウロスが応戦してるってワケ。だけど、3対2にはなったものの、体重の差で押されつつある。
……って、冷静にブンセキしてる場合じゃない。
「ルルー！　ミノちゃん！　呪文唱えるよ、どいて！」
「遅いわよ！　まったく」
「ぶもー」
ふたりが飛びすさったところで、ボクは手のひらを七ぷよ神たちにかざして意識を集中！
フォォォォォッ！
魔導力が吹き出して、ボクの髪や服をはためかせる。そして……、
「るいぱんこ！」
ボクは声の限りに呪文を唱えた！
瞬間！
ドゴォンッ！
ボクらと、七ぷよ神のあいだの地面が大爆発！
「うわぁ！」
「なんなのぉ！」



爆風をこらえながらボクらが見たのは、ドラゴンよりもずっとずっとおっきな巨人さん……の背中。炎の衣をまとって、怒ってるみたいに逆立った真っ赤な髪、それからシュテルン博士やミノタウロスとおんなじゴツイ身体も、ユデダコみたいに真っ赤っかだ。

「おうおうおう！　オレをイキナリ呼び出すたぁ、い～い度胸だ！　それなりのカクゴはできてんだろうな！」

地鳴りみたいな声が、巨人さんの背中ごしにこだまする。どうやら、ぞう大魔王たちが自分のコトを召喚したと思ってるみたい。

〝るいぱんこ〟の呪文が呼び出したんだったら、ホントはボクなんだケド……。でも真っ赤な巨人さん、怒ってるみたいだから黙っとこ。あのまま七ぷよ神をばたんきゅ～してくれれば、ラッキー★　ってカンジだしね。

ボクってば、ちょっちイジワル。

「ワ、ワシらではないである」

「そうだゾウ」

「ガウガウ」

巨人さんの大ハクリョクに、さすがの七ぷよ神たちもたじろいでる。だけど巨人さんは、そんなコトおかまいなしで右手を振り上げた。

「るせぇ！　これでもくらいやがれ！」

ブゥン！　と手を振り降ろした瞬間に、ドラゴンたちの足元が大爆発！

ドゴバ――――ンッ！

あわれな重量級トリオは、真っ黒コゲになって、青い空に向かって飛んでった。
「ばたんきゅ～っ！」
キラ――ン！
フジヤマの脇で、３人はみっつの星になる。
「やったぁ！　すごいすごぉい！」
ボクとルルーは、巨人さんに向かって力いっぱい拍手した。
「ん？」
その音に気づいて振り返った巨人さんの顔は……、
「う……」
思わず凍りついちゃうほどのイカツ～～イ顔。鬼よりコワイとは、まさにこのこと！
ハクリョクにたじろいでた、ぞう大魔王たちの気持ちがよぉくわかった。ちっちゃなコだったら、この瞬間に泣いちゃってるよ。
「なぁ～んだ、こっちにもいたんか」
舌なめずりする猛獣みたいな声が、ボクらに襲いかかる。

「あうあう……」
ダメだ。ボクも涙が出てきた。
「ア、アルル！　なんとかしなさいよぉ！」
小声で言いながら、ルルーがボクをヒジでつっつく。
……そ、そんなコト言われても、どうやったら帰ってくれるのかわかんないよぉ。
だけどボクは、なんとか勇気をふるい起こして巨人さんに言った。
「助けてくれて、どうもありがとう」
「ナニィ？　助けるだぁ？」
「そうそう。ぞう大魔王たちをやっつけてくれたでしょ？　もう敵はいないから、もとの世界に帰っていいよ」
「フフン」
ボクの言葉に、真っ赤な巨人さんは丸太よりふっとい腕を組んで、鼻で笑う。
「いやだね」
「どーしてよ！」
反射的に、ルルーがくってかかった。
「るせぇ！　ヒトがせぇっかく気持ちよく寝てたのを、ムリヤリ起こしやがって！　オレは怒ってんでぇ！」

「そんなの知らないわよ！」
「やかましい！　テメェらもふっ飛びやがれ！」
そう言いながら、巨人さんは腕を振り上げた。
来るぞ！　大爆発攻撃！
ブォン！
ドゴバ――――ン！
「うわぁ！」
カン一髪でよけたものの、爆風の勢いがモノスゴイ。あやうくズッコケそうになった。
「ちっ、外しゃぁがったか！」
もう一発、とばかりに巨人さんはまた腕を振り上げる。
「ストォ――ップ！　そこまでだ、火の精よ」
とデッカイ声でボクらのあいだに割り込んできたのは、スッキリ顔で林から出てきたシュテルン博士！
「博士！　もう大丈夫なの？」
「おう、迷惑かけたな」
「オレを知ってるたぁ、テメェ、なにもんでぇっ！」
カミナリみたいな巨人さんの声に、博士はちっともひるまない。逆に、ギッと巨人さんをに

らみつけた。
「ほう……。お前さん、わたしを忘れたのか？」
「博士、御存じなんですの？」
ルルーが、博士に問いかける。
「ああ、よぉ～く知ってるぞ」
「そっちが知ってても、こっちゃ忘れるどころか知りもしねぇぜ、テメェなんざ」
あっ！
「いつから、このわたしにそんな口をきけるようになったのだ？　火の精よ……」
博士のアタマに、怒りマークが！
怒ってるよぉ。サクレツするよぉ、四神降臨究極拳（ししんこうりんきゅうきょくけん）……。
ボク知ーらないっと。
「アルルくん、アイスストームだ」
「はえ？」
いきなり、博士がボクにふった。おかげで返事が、首シメられたニワトリみたいになっちゃったよ。
「なに、おマヌケな声だしてるのよ、アルル」
「あう……」

よーしゃないルルーのツッコミ。……ルルーってば、しばらく会わないあいだに、イジワルに磨きがかかってるんじゃない？

ってまぁ、それはおいといて。

「いいんですか？　シュテルン博士」

というより、アイスストームなんか効くのかしら？　火の精さん、まわりの木よりおっきいから、ジュゲムでも1発じゃばたんきゅ～しそうにないよ。

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

突然、火の精さんは真っ青になっておびえだした。ボクまだ呪文唱えてないよ。

「アイスストームなんかくらったら、オレの火が消えちまう。オレは氷にはからきし弱いんだ！――って思い出したぞ」

「オレの弱点まで知ってるあんたは……、もしかしてケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテルン博士……？」

「ようやく思い出したか」

「ケーニヒス……なんですって？」

ルルーが、ムツカシイ顔でボクに聞く。

「ケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテ……」

がちっ！

「イタッ！」

舌かんじゃったぁ。

「オーホホホホホ……！　そんなコトで舌かむなんて、あいかわらずおボケねぇ、アルルって」

「ぶぅ〜〜っ」

自分はマトモに覚えらんなかったクセに。

なぁんて、ボクらの情けないやりとりをよそに、火の精さんはいきなりペコペコし始めた。

「い、いやぁ……まさか、あんたもこっちにいるなんて……」

ペコペコっていうよりは、なぁんか脅えてるみたい。

「猪突猛進（ちょとつ）もいいが、その場の状況を判断するだけの余裕も、常に持っておかんとな」

「そ、そうっスね。では、さいなら」

ドッカ――――ン！

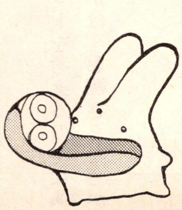
火の精さんは、出てきたときと同じく、大爆発とともに消えちゃった。ボクとルルーは、あまりの慌ただしさにアングリと口を開けて爆発を見つめるだけ。

「あらららら……」

「行っちゃった……」
なんだかなぁ……。

三　銘菓〝ぷよまん〟でひと休み

……ルルーと博士とおサムライと……、あー忙しいっ！



「実は、わたしも魔界の住人なのだよ」
「え――――っ！」
ボクとルルーは、思いっきり飛び上がって驚いた。
ひさしぶりの大ショ――ック！
サタンとルシファー先生が、実は双子だったって聞いたとき以来だ。
「だから言ったろう。ルシファーとは長いつきあいだとな」
「長い……って、どれくらい？」
「そうだなぁ……、かれこれ数百年くらいになるか」
「…………」

もはや、ボクらはコトバもない。
普通、っていうか、人間界のカンカクで考えると、〝長いつきあい〟ってだいだい5年とか10年くらいだよねぇ。それが、なんとなんと数百年！　魔界のヒトたちって、スゴイというかナンというか……。ボクなんかじゃ想像もつかないよ。
逆に、魔界の住人だからこそ、四神降臨究極拳みたいなモノスゴイ技が使えたり、火の精さんがペコペコしたりするんだ、っていうのはわかるケド……。
「どうして、博士はこっちの世界に？」
しみじみ考えるボクに代わって、ルルーが博士に質問した。……だいたい、返ってくる答えは想像つくケドね。
「簡単に言えば、こっちのほうがおもしろそうだったからかな」
やっぱり。
魔界の住人で、特に実力がシャレになんないヒトたちって、おんなじコトを考えるのかなぁ……？　ルシファー先生も、似たようなコト言ってたしね。サタンなんかは、お嫁さんをさがす——相手はともかく——っていうリッパな目的があるみたいだケド。
「わたしのことより……」
バン！　とおっきな手を叩(たた)きながら、シュテルン博士は言った。
「ルシファーをなんとかするのが先決だ」

そーだ！　思いっきり大事なコトを忘れるとこ。

「ヤツの反応が消えた地点は、いまいる街道をもっと内陸のほうに進んだところにある。行くぞ！」

「うん！」

「ぐー！」

ボクとカーバンクルの返事を合図に、ボクら4人と1匹は林に囲まれた街道を歩きはじめた。

ドレイク船長の待つ港を背にして……。

あり？　なんかおかしいな。

＊　＊　＊

ザッ……。

竹林を歩くサムライの足が、ふと止まる。

目の前に、小ぢんまりとした茶屋がたたずんでいた。それを見て、サムライは改めて自分の位置を確認する。もうすぐ、日出る国の表玄関〝ミヤジマグチ〟の港が見えてくるはず。この茶屋は、それを示す道標になっている。この茶屋の名物とともに。

「休んでいくか……」

「いらっしゃいませだにゃー」

長椅子に腰をおろしたマサムネを迎えたのは、幼い3人の少女たち。赤、緑、黄と髪の色こそ違うが、顔立ちはほとんど差がない。

「御注文は、なんにしますみゃー?」

「濃い目の抹茶と……、そうだな、アレをふたつばかりもらおうか」

「はぁい、抹茶いっちょーにアレにちょーですぎゃー?」

にゃーみゃーぎゃーと騒ぎながら、少女たちは奥へと消えていった。

「…………」

サムライはそんな姿を穏やかな眼で見守る。しかし……、

「む……?」

街道を向かってくる一団を視界の角に認めた瞬間、形相が一変した。仕事人のそれに……。

*　*　*

ザザザァッ……。

風にゆらぐ竹のハッパが、ざわざわとうるさい。

ザザザァッ……。

ンもう、ジャマしないでよ。こっちは考え事してるんだから。
七ぷよ神の3人――布袋と福禄寿と寿老人、それから火の精さんとの大騒ぎのあとから、ミョーな感覚がボクの頭から離れない。
なんだっけなぁ……。なぁんか忘れてるような気がするんだケド……。
「その、ルシファー先生が消えたっていう場所はまだなんですの？」
ボクの前で、ルルーがシュテルン博士に問いかける。ミノタウロスはボクの後ろ。彼の頭の上で、カーバンクルが気持ちよさそうに眠ってる……。
「だいたいこのあたりだ。なにか手掛かりになりそうなものがないか、注意してくれ」
「わかりましたわ」
ルルーと博士の、なにげないやりとり……。
って、ちょっと待って。

「あ――――――――っ！」

思い出した！
「どーしてルルーがここにいるのぉ？」
戦いのドサクサで、すっかり忘れてたよ。
「どーして、ですってぇ……？」

ゴゴゴゴゴゴゴ……！
って効果音が聞こえてきそうな、モノスゴイ怒りのオーラをまといながら、ルルーが振り向いた。
……ううっ、ヤだなぁ。
「あなたにこれ以上好き勝手させないよう、監視に来たのよ！」
「え？　ナニソレ？」

「ムッキ――――ッ！」

どっかんと怒りをバクハツさせたルルーが、いきなりボクの首をひっつかんだ！
「あなた！　ルシファー先生がいないのをいいことに、サタン様とふたりっきりで暮らしてたでしょ！　あたくし知ってるのよ！　あまつさえ、お手製のカレーまで食べて！　おまけにさっき助けたのも忘れて、ナニソレですってぇ？　キ――ッ！　くやしいくやしいくやしいくやしいくやしいぃ――っ！」
がっくんがっくんがっくんがっくんがっくん……！
「ちょ……ちょっと、やめ……く、苦し……」
こ、声が出ない。このまんまじゃ死んじゃうよぉ……。
「ルルーくん、ドクターストップだ。このままでは、アルルくんが死んでしまう」
シュテルン博士の声で、ようやくルルーは手を放した。

「ぷはぁっ！　ぜぇ〜、ぜぇ〜……」
息を整えるボクに、ルルーも肩で息をしながら、ビシィッ！　と指をさす。
「とにかくっ！　サタン様とルシファー先生を助けるまで、いいえ、それからもずっと、あなたと一緒にいますからね！」
「え〜〜〜〜〜〜っ！」
「ナニよ、そのイヤそーな顔は！」
「まあまあ、ふたりとも」
ちょっちあきれ顔の博士が、ボクとルルーのあいだに割って入った。
「このままじゃラチがあかん。どうだ？　そこの茶屋で休んでいかんか？　これからどうするか、細かいことも決めねばならんだろうし」
博士が親指でさした先にあるのは、ワラぶきの小屋というか納屋みたいな一軒の家。入り口に立てかけたノボリに、〝ばんしぃ茶屋〟って書いてある。
「ああっ！」
そのノボリを見た瞬間、ルルーが大声をあげた。
「どうしたの？　ルルー」
「あの茶屋には、アレがあるのね！」
「ナニソレ？」

「よく見なさい！　あのノボリを！」
「ん～……」
目をこらしてみると、〝ばんしぃ茶屋〟って文字のとなりに、ちっちゃく〝銘菓ぷよまん、あります〟と書いてある。
「ああっ！」
ぷよまん！
幻のお菓子とまで言われた、あの〝ぷよぷよ〟をかたどったおまんじゅう！
「さっそく行きましょう！」
「うん！」
ボクとルルーは、お茶屋さんに向かって、一目散にダッシュした！
「いらっしゃいませだにゃー」
ばんしぃ茶屋に転がり込んだボクらを迎えたのは、ちっちゃな女の子の3人組モンスター。
「あ、トリオ・ザ・バンシー」
そうか、だからばんしぃ茶屋だったのね。納得納得。
だけど、3人はボクの言葉に、ちっちっちと指をふった。
「普通のバンシーと、一緒にしてほしくないみゃー」
「どーして？」

「あちしらは、生まれがちぎゃうんだぎゃー」
「生まれ？」
「ナゴヤ生まれのトリオ・ザ・バンシーとは、あちしらのコトだにゃー」
「呼ぶなら、ちゃんと〝にゃーみゃーぎゃー〟って呼んでほしいみゃー」
「そんなのどうでもいいから、さっさとアレを持ってきてちょうだい」
「ど、どうでもいいだぎゃー……？」
じわわっ。
ルルーの威圧的な言葉に、バンシーたちの眼がうるうるしてくる。
「あああっ！　そんなのウソウソ。だから〝にゃーみゃーぎゃー〟さんたち、ぷよまんをい〜っぱい持ってきて」
「はぁい、わかりましたにゃー！」
元気を取り戻したバンシーたちは、ぱたぱたと奥に消えていった。
まったくもう、どうしてボクがルルーのフォローをしなきゃなんないの？　まあ、トリオ・ザ・バンシーのキンキン泣き声を聞いてコマクを破るよりはマシだけど……。
「キミたち、ぷよまんを食べたことがなかったのか？」
先に運ばれてきたお茶でボクらがひといきついたところで、ようやく博士とミノタウロス、それからカーバンクルが到着。

「うん。ウワサでしか聞いたコトなかったもんね」

「そうですわ。博士は長く生きていらっしゃるから、何度もお食べになったことがあるんでしょうケド」

「そうだな。ずいぶん前はこの国も平和だったから、ぷよまんも世界中に出まわっていたのだが。しかし戦乱の世に突入してからは、日出る国の職人すらも激減したと聞いている」

「ふぅん。……でも、ずいぶん平和なように見えますけど?」

少なくとも、港に着いてからこっち、戦を見たことはなかった。

「それは我々が、たまたま戦場でないところを通っているからにすぎない。ウワサでしかないが、戦場は、それはそれはスプラッタな状況らしいぞ。血湧(わ)き肉踊るとは、このことだ!」

「………」

それって、もしかしてギャグ……?

「いや、ウワサではないでござる」

「え?」

いきなり聞きなれない声。ボクらは、いっせいにそっちを向いた。

声の主は、店のすみっこに立っているおサムライさん。サタンみたいにちょっちキツイけど、どちらかといえばシュテルン博士みたいなシブめの顔。長い黒髪を、後ろで無造作にくくって、手にはつばのないカタナを持ってる。

「おじさん、誰？」

「！」

ボクの言葉に、おサムライさんはちょっと驚いたように眼をむいた。……ボクがおじさんって言ったから、怒ったのかなぁ？

「……いや、すまん。拙者はマサムネ。アルル殿、とお見受けしたが……？」

「うん、そうだケド。でも、どーしてボクのことを？」

「ぷよぷよ大明神様の命により、そなたに御同行いただきたい」

「ええっ！」

このおじさんも、大明神の手先なのぉ？

信じらんない……。

「ずっと気になっていたのだが、ぷよぷよ大明神など、わたしは聞いたことがないぞ」

シュテルン博士のするどいツッコミ。

魔界の住人なうえに、ボクらが想像もつかないくらい長く生きてるから、ものすごいセットクリョクがある。

「異国の方々なら、御存じないのもいたしかたあるまい。つい最近まで、邪悪なるものに封じられていたそうでござるからな。いまようやく、意識が復活なされた。しかし、完全に封印を

解くには、大量の魔力が必要なのでござる」
「で、ボクぅ？」
なぁんか、またかってカンジ。シェゾって魔法使いも、ボクの魔力を吸収して、世界一の大魔導師になろうってしてたしね。
「ちょ、ちょぉっと待ちなさいよ」
イキナリ、ルルーが割り込んできた。
「どうして、あたくしの魔力じゃなくて、アルルなのよ！」
「理由はわからぬ。しかし、大明神様はアルル殿を所望しているでござる」
「キ――ッ！　どうしてみんなアルルなのよ！　こぉんなチンチクリン娘のどこがいいワケぇ！」
性格の差じゃないかな？　とボクは思う。まあ、ボクも人のことは言えないケド、ルルーよりはマシって自信はあるよ。……だけど、これを口にだすとまたルルーがヒステリー起こしそうだから、やめとこ。
「でもさ、なぁんかヘンじゃない？」
ボクは、おサムライさんに問いかけた。
「悪者に封印された善の神って、あんまり聞いたコトないよ。逆ならよくあるけど……」
「しかし、この戦乱の世を平和に導くと聞かされれば、信じてみたくもなろう。異国の方々に

はわかるまい。この日出る国の凄惨(せいさん)さが……」

　ジッ、とマサムネさんの眼を見てみる。その奥にあるのは、自分の国を平和にしたい！　っていう固い固い意志。少なくとも、悪いヒトじゃあないみたいだけど……。

「だけど、ボクたちにはやんなきゃいけないコトがあるんだ。魔力を吸い取られちゃ、それもできないよ。……お力になれなくてゴメンナサイ」

　とボクが言うと、おじさんの眼がすぅっと細くなった。……すんごいハクリョク。

「そのような返答は、すでに百も承知。こちらも時がないゆえ、力ずくでもお連れする覚悟でござる」

　キンチョーの一瞬……。

「ちょ、ちょっと待って！」

「臆(おく)したか！　女人とはいえ、情けないぞ」

「いやそうじゃなくて……。戦うのはいいんだケド、せっかくだから、ぷよまん食べたあとにしてくれません？」

　ずるぅっ。

「あり？」

　マサムネさんはおろか、博士やルルー、ミノちゃんまでがズッコケた……。

＊　＊　＊

港に程近い街道。船出を告げる船頭の声が、潮風に乗って聞こえてくる。
ブォンッ！
出し抜けに黒い竜巻が発生し、その中から人影が現れた。
「ここか……」
白銀の髪に、邪悪な色をたたえた切れ長の眼、黒を基調とした服とマント、腰には凶々しい装飾の剣……。
「ふん……、邪悪な匂いがプンプンするな」
人影は、あたりを見回しながら、そうひとりごちた。
「ひとつ、それも利用させてもらおう……」
ブォンッ！
再び竜巻が現れ、人影——魔導師シェゾ・ウィグィィは姿を消した……。

＊　＊　＊

「お待たせしましたにゃー！」

「いっただっきまーすっ！」

運ばれてきたお盆いっぱいのぷよまんを、ボクはひとつつまんでかじった。

「ん～……」

ふんわりした中に、ジンワリとあんこの甘さが広がってくる。

「おーいしっ★」

「オーホホホホホ……！　甘いわね、アルル」

出たぞ、ルルーのタカビー笑い。久々に聞いて、ナツカシイというか、すっごくムカつくというか……。

「それは素人の食べかたよ！」

おまんじゅうを食べるのに、シロートもクロートもないと思うんですケド……。

「あたくしが、究極の〝六連鎖食い〟を見せてあげるわ！……ちょっと、抹茶を持ってきて。う～んとシブイやつね」

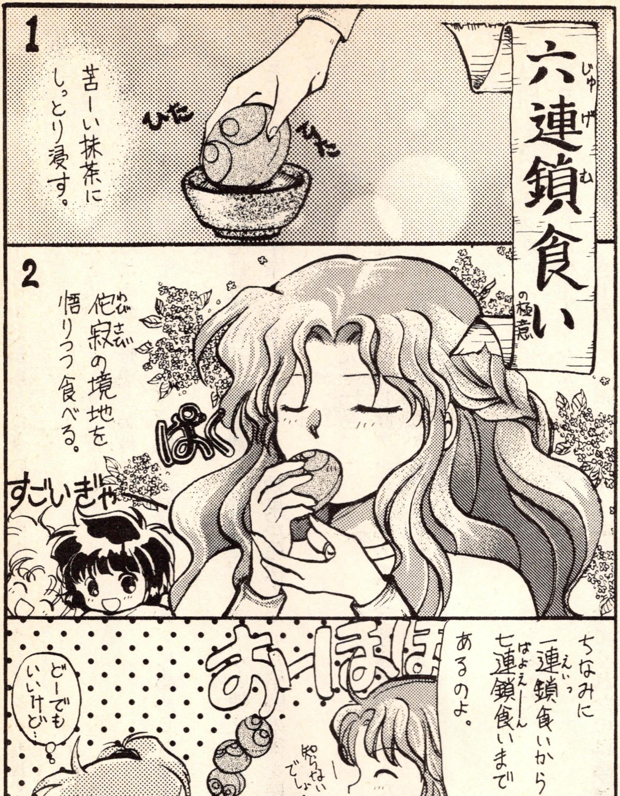
「はぁい、抹茶いっちょーだみゃー！」

ルルーは、ぷよまんをいれたての抹茶にひたした。それからパクッ。

「ん～……」

恍惚の色が、ルルーの顔いっぱいに広がっていく。

「これよ！　このワビサビの境地を味わうことが、真のぷよまんの食べかたよ！」
「はぁ……」
そですか。なんだかなぁ……。
「あ！　そういえば、すっかり忘れてた。ルルー」
「なぁに？」
「どーして、ボクがルシファー先生やサタンと一緒に暮らしてるって知ってるの？」
「オ——ホホホホホ……！　あたくしの、サタン様に対する〝愛の力〟に、できないコトはないのよ！」
「いや実はな、魔導レーダーの最新バージョンを、私があげたのだ。映像も出るヤツだぞ」
シュテルン博士が、口をモゴモゴさせながら言った。
「なぁ〜〜んだ」
「そ、そんな！　博士、ヒドイですわ！」
「はっはっは。しかし、バレて困るものでもなかろう」
「でもさ、だったらなんで、スグにボクのところに来なかったの？」
「う……」
ルルーって、いっつもタカビーだけど、こういうふうにツッコミを入れると、すぐシドロモドロになっちゃう。こんなトコが、ルルーのいいとこでもあるんだケドね。


六連鎖食いの極意
1
苦ーい抹茶にしっとり浸す。
ひたひた
2
侘寂の境地を悟りつつ食べる。
ぱく
すごいぎゃー
ちなみに一連鎖食いから七連鎖食いまであるのよ。
おーほほ
知らないでしょう～
ぐ
どーでもいいけど…

でも、ボクもちょっちイジワルだから、こういうトキに、いっつもイジメられてるお返しをしちゃうのだ！

「あ、あたくしは、あなたと違ってナニかと忙しいのよ！」

「魔法が使えるようになるための、修業とかね」

ルルーはボクより2歳年上だけど、魔導学校では同級生。サタンに認められるような魔法使いになるために、彼女は入学したのだ。

だけど実際には、学校では魔法の基礎を勉強しただけで、ちゃぁんと使えるようにはなってない。それでどうやって卒業したのかというと、効果が魔法みたいな格闘の術を使って、なんとかしてたってワケ。

「どぉ？　少しは使えるようになった？」

「あ、あったりまえじゃない！　あたくしはアルルと違って、学習速度が違うんだから！」

だったら、学校でとっくに魔法が使えるようになってるはずだケド……。

「ホント？　ミノちゃん」

「ぶも～……」

ボクが聞くと、ミノタウロスは「ぜ～んぜん」ってカンジで首をふった。

「ミノタウロス！　あなたは主人をなんだと思ってるの？」

「まあまあ。……でもはっきり言って、ボク、ルルーがかけつけてくれたのは感謝してるよ。

みんなでルシファー先生とサタンを助けに行こ」
「オーホホホホ……！　サタン様を助けるのはあたくしよ！　アルルなんかに譲らないからね！」
「はいはい」
「ぐー！」
ふと、ボクらのやりとりを尻目(しりめ)に、カーバンクルがなにか注文した。
「え？　アレですぎゃー？　お客さん、通ですぎゃー」
「なに頼んだの？　カーくん」
ニヤリ。
ボクの問いに、カーバンクルの口がぐぐぐっと歪んだ。
「う……」
ものすごぉ〜〜くブキミ……。いったい、ナニを考えてるの……？
「お待たせだにゃー！」
にゃーみゃーぎゃーが持ってきたのは、カーバンクル印の〝お好みソース〟。
「ナニコレ？」
「ぐー！」
カーくんは、ソースを受け取るが早いか、残ったぷよまんの上にだだ——っとかけちゃっ

た！

「あ――――っ！　カーくん！　そんなコトしたら、食べれなくなっちゃうよぉ！」

って止めるより早く、カーバンクルはガバッとおっきな口を開けて、ぷよまん全部をごっくしと飲み込んだ。

「ぐぅ～～」

でりぃしゃす！　って、そりゃぁ、キミは満足なんだろうケド……。

あ～あ、ボクはまだひとつふたつしか食べてないのにぃ。

「さ、さすがカーバンクル……。すでに〝七連鎖食い（ばよえ～ん）〟をマスターしてるなんて……」

ルルーが、大マジメな顔でつぶやく。そ、そういうモンダイかなぁ……。

「あの～……」

突然今度は、すがるような男のヒトの声。

「ほえ？」

振り返ると、そこには心底疲れきった、というかあきれ返ったような顔のおサムライ、マサムネさんが立っていた。

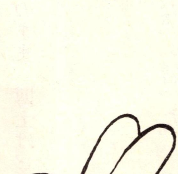
「拙者、先程からずっと待っておるのだが……」

「あっ！」

そーいえば、大明神がどうのこうので、このマサムネさんと戦う約束になってたんだっけ。

すっかり忘れてた……。

四　竹林の対決っ！
……で、あっけない幕切れ。



ボク、シュテルン博士、ルルー、ミノタウロスは、〝ばんしぃ茶屋〟からちょっと離れた竹林の中でマサムネさんと対峙していた。カーバンクルは、オナカいっぱいになったので、お茶屋さんでお昼寝中。
「さあ、どこからでもかかってまいられよ」
にらめっこの中、イチバン最初に口を開いたのはおサムライさん。
「4対1で、かまわんのか？」
シュテルン博士が、ふっとい指をポキポキ鳴らしながら問いかける。
「ひとりずつであろうが、一度に来ようが、拙者はいっこうに構わぬ。我が奥義にて、全力でお相手するのみ！」
「ほほう、たいした自信だ。もっとも、技量も相当のようだが……」

「お主こそ」

ううっ、シブイ！　シブすぎる！　ボクやルルーなんかに、口をはさむ余裕なんてないよぉ。

「わたしは、ケーニヒス・ティーゲル・フォン・シュテルン。では、まいる！……はぁっ！」

ドンッ！

いきなり、博士が地面を思いきり蹴（け）った。その反動で、空高くジャンプ！

「玄武剛脚（げんぶごうきゃく）！」

「甘い！」

ゆらり……。

博士の飛びげりがキマる！　と思った瞬間、おサムライさんの影がゆらめく。

ドサッ！

そして博士は、奇妙な体勢のまま、地面に叩（たた）きつけられた。そのまま、博士はピクリとも動かない。

「は、博士！」

「峰打ちだ。死にはせん……」

ボクらの心配をよそに、マサムネさんは鋭い眼でボクらを睨（にら）みながら言った。

「アルル、いまの見えた？」

「ううん……」
ボ、ボクなんかに聞かないでよ、ルルー。カタナを抜いたかどうかはおろか、動いた瞬間すら見えなかったんだから！
「鬼斬一刀流(きざんいっとうりゅう)が究極奥義、〝無双影刃(むそうかげやいば)〟。誰にもかわすことはできぬ」
カタナを鞘(さや)におさめたまま、マサムネさんはゆぅっくりとボクらに近づいてくる。
あわわわわ……。どうしよう。博士が簡単にやられちゃったのに、ボクらが勝てるワケないよぉ！
「アルル、こうなったら3人で行くわよ！」
「え……？」
「なにもしないよりマシでしょ！」
「う、うん！」
こういうとき、ルルーってなんとなく頼もしい。やっぱ、ボクよりお姉さんだからかなぁ？
「いやぁぁぁぁぁぁっ！」
ルルーとミノタウロスは、いっせいにマサムネさんに向かって突進した！
「破岩掌(はがんしょう)！」
「ぶもーっ！」
右からルルーが、左からミノタウロスが攻撃！　そしてボクは真ん中から……、

「ファイヤーッ！」
「小細工を……」
ゆらり……。
また影が動く！
「あっ！」
っと影がボクの目の前に来た瞬間には、もうルルーたちは倒れていた。
「御免」
そんなマサムネさんの声とともに、ボクの意識は真っ暗闇(くらやみ)に包まれる。痛みもなぁんにも感じずに。
ごめんなさい、ルシファー先生、サタン、助けに行けないかも……。

＊　＊　＊

「…………」
わずか数瞬の戦いののち、サムライはある一点を、飽くことなくじっと見下ろしていた。
その先にあるのは、気を失った幼き魔導師、アルル・ナジャ。
「……フッ」

マサムネはやがて、自嘲的な笑みとともに、ゆっくりとかぶりをふった。心中の邪念を追い払うがごとく……。

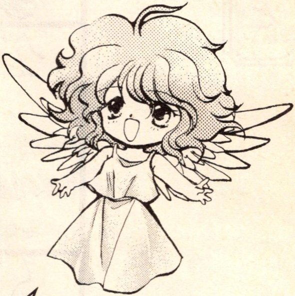
「これも日出る国のため。許せ……」

そうひとりごち、サムライは力なく眠る少女を肩にかついで竹林をあとにした……。

第三章〝アルル、真実を知るのこと〟

彼女の強さ

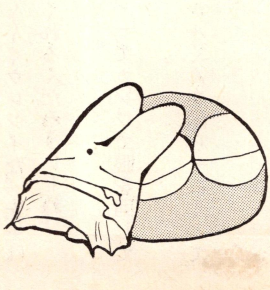




ハーピー
のべつまくなしに歌いまくって超音波をまきちらす迷惑モンスター。人妻だというウワサがある……。

一　御対面！　ぷよぷよ大明神！

……あ〜〜っ！　っと驚く意外な事実！



ぐぐっ！　とコブシを握って、ボクはつぶやいた。真っ赤な夕日に向かって……。まわりには、ボロボロにくずれた遺跡……。

「か……勝ったわ！」

こうして、深い理由など全くない〝ぷよぷよ地獄〟は終わった。

『おめでとう、アルルくん』

突然、頭上から声が響く。

「ほよ？」

見ると、文字どおり山のようにつまれた透明な〝おじゃまぷよ〟たちの上に、真っ黒なローブの魔法使いが立っていた。

目深にかぶったフードの奥の、ニコやかで優しそうな口もと……。ボクはぜぇ〜〜ったいに

地した。

「どうしてここに……？」

『いやなに、〝ぷよぷよ勝負〟とはいえ、やはりサタンは強敵。キミが無事かどうか、魔法の水晶玉で観察していたのだ。そしてキミが勝ったの見て、即座にワープしてきた、というワケだな』

「そうだったんですか」

えへ★　ルシファー先生に心配してもらえるなんて、ものすごぉ～～くウレシイな。先生は優しいから、たとえ相手がボクでなくても、こうやって駆けつけてくれるんだろうケドね。

『さて、問題はこのサタンだな……』

そう言いながら先生は、おじゃまぷよの下で、「ばたんきゅぅ～っ」てカンジで眼を回してるサタンのところにかがみ込んだ。

『さすがのサタンも、これで少々コリたろう。しかし、いつまたアルルくんを困らせにやってくるか、わからんからな……』

うんうん。ボクもそう思う。
その昔、ボクが魔導学校に入る前に一度会ってから、やっつけてもやっつけても『オレの妃になれ！』とか言ってやってくるもんね。好いてくれるのは、それはそれでいいんだケド、方法がちょっとねぇ……。サタンってば、ものすごぉくゴーインなんだもん。
『この際だから、少々キツイお仕置きをくらってもらおう』
ニヤリ。と先生の口が、ちょっとイジワルに曲がった。……サタンほどじゃないケド、先生ってば、あいかわらずヒトが困りそうなイタズラが好きなのね。
「どうするんですか？」
『魔力を封印するのさ。そうすれば、サタンは普通の人間と変わりがなくなる。アルルくんにちょっかいを出すのも、そうそう簡単にはいかなくなるだろう』
「へぇ〜」
魔力の封印って、どうやるんだろう？
後々のために、しっかりやり方を見ておかなくっちゃ。
ルシファー先生は、まだ気絶してるサタンを、起こさないようにそぉっと抱き起こした。
『………』
そして、指先でサタンのあごを軽く持ち上げる。
男のヒトが、女のヒトにキスするみたいに……。

あり？　なんだか様子が変だぞ？
いつのまにか、先生の顔からいつもの優しいニコニコ笑いが消えてるし……。
『………』
やがて先生は、口をホンの少しとがらせて、サタンの顔に向かって……。
ぐぐ〜〜〜っ！

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」

せせせ、先生！　そそそんな、男同士でキキキキキ……！
いや！
でもでも、ルシファー先生はサタンの魔力を封印するためにこうしてるワケで、それを考えるとジャマしちゃいけないし、止めるワケにもいかないし、ホントに封印の術ならボクも見てたいし……。
あああっ！
ンなコト考えてるまに、ルシファー先生の唇とサタンの唇との距離があと1センチにぃ！
ダメ！　やっぱりダメ！
いくら魔力の封印とはいえ、男同士が、キキキ、キスするなんて！
そんなアブノーマルなぁっ！

だけど、そんなボクの心の大騒ぎもむなしく、ふたりの唇は……。

＊　＊　＊

「だわ————————っ！」

がばっ！

ボクはいきなり目が覚めた。

「はぁ～～……」

夢かぁ。あーよかった。

「いやいやいや……」

ぶんぶんぶん、とボクは頭を振った。

ちっともよくないよ。だって、ルシファー先生とサタンの〝魔力封印の儀式〟って、ホントにあったコトなんだもの。ずっと前に。

あんなにキョーレツな思い出、忘れるわけないよ。

「う～～っ！」

ああっ、また思い出しそうになってきた。

理性的に考えると、アレは魔力封印の術なんだから、ボクがいつまでも大騒ぎすることなんてないんだけど……。でもほら、男のヒト同士がキスするなんて、やっぱアブノーマルなんじゃないかなぁ～って……。ボクも、いちおーノーマルな年頃の女の子なワケだし、先生とサタンっていう、カッコイイ男同士のラブシーンも悪くない……ってナニを考えてるんだボクは！
それにしても……どうしてあんな夢なんかみたんだろう、今さら……。
なんかの暗示なのかなぁ？
「ん～～……」
ボクは、腕を組んで考えこんだ。そこへ……、
「落ち着いたでござるか？」
「ほえ？」
声のしたほうを見ると、鉄格子の向こうに、あのマサムネさんが立っていた。ルルーやミノちゃん、シュテルン博士を一瞬にして倒したおサムライさんだ！
……鉄格子？
マサムネさんって、誰かにつかまっちゃったの？
でもよく見ると、マサムネさんが立っているのは地下牢（ちかろう）の廊下みたい。彼の後ろで、いくつかのかがり火がボクらの影をゆらゆらさせてる。
で、ボクがいるのは、窓もなくて広くもない牢屋の、野宿よりはちょっちマシってくらいの

かたぁいベッドの上……。
「だぁ――――っ！」
思い出した！
捕まっちゃったのはボクだよ！
ぷよぷよ大明神がどうとか、復活のための魔力がこうとかって……。
どうしよう。このまんまじゃ、ルシファー先生もサタンも助けらんないよ……。
「はぁ〜あ……」
ボクがタメ息をつくと、マサムネさんがほんの少しあきれたような、お父さんとかお兄さんとかみたいな優しいような、ちょっとフクザツな顔で言った。
「まったく、見ていて飽きのこないお子でござるな」
「どういうコト？」
「難しい顔をして眠っていたと思えば、突然に起き出して、考え込んだり。拙者が声をかければ、思い出したように叫んでみたり、落ち込んでみたり……。表情豊かで、非常によろしいでござる」
「ずっと、そこでボクを見てたワケ……？」
「うむ。正確に言えば、そのベッドに寝かせてからずっと、キミを見張っていたでござる」
「ずぅ〜〜っと？」

「いかにも」

かぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！

は、恥ずかしい……。

どうしてだかわかんないケド、顔が真っ赤になってポッポポッポポするのを、ボクは感じた。

前までは、誰に寝姿を見られてもなんともなかったのに……。

なんでだろう？

……とボクが考え込んでいると、また別の声が聞こえてきた。

『気がついたようだな……』

ボォォォォォッ……！

突然、ボクの目の前の床から炎が吹き出して、ヒトの形を作った。炎の中の眼が、これ以上ないってくらいキョーアクにぎらぎらしてて、サタンやドラコケンタウロスみたいな角と翼も持ってる——もちろん、それも炎なんだけど。

ヒトっていうよりは、全身に火をつけた悪魔ってカンジ。

まあ、とにもかくにも、こんだけオーギョーに出てきたってコトは、このヒトが誰だかははっきりしてる。

「キミが、ぷよぷよ大明神だね」

『いかにも』

炎の悪魔は、ぼうぼう燃える腕を組んでふんぞりかえった。
神サマなのに悪魔みたいなカタチなんて、なんだか説得力がないなぁ。やっぱり、なんかがおかしいよ、この事件……。
それにしても、誰かに似てるなぁ。大明神の声。サタンが、シェゾみたいに根っからの悪者になったってカンジかな？
「ルシファー先生やサタン、それにボクまで捕まえて、いったいどうするつもり？」
『知れたこと！　我を完全復活させるためよ』
「復活してるじゃない」
ボクは、目の前の炎を指差した。
『ちっが――――う！　この姿は、かろうじて意識体の魔力で作り出した、仮のものにすぎん。完全に肉体を作り出すためには、大量の魔力を必要とするのだ』
「で、先生やサタンやボクをいけにえにしようと……」
『いけにえとはヒトぎきの悪い。少々、魔力を拝借するだけよ。まあ、魔力はイコール生命の気。それを失った者がどうなるかは、おのずと想像つくだろうがな……』
うんうん、わかるわかる。魔導力がなくなっちゃうと、フニャフニャでなんにもできなくなっちゃうもんね。それに、学校でも習った。自分で魔法を使うぶんには、自然にセーブしてるから疲れる程度ですむんだけど、もし、なんかの理由で魔力が一瞬にしてなくなっちゃったと

したら、そのヒトに待ってるのは死……。

「どっちにしても死んじゃうんじゃ、いけにえと変わんないじゃない！」

って、ちょっと待ってよ！

『ふむ……。そうとも言えるかもしれんが、ようは気持ちの問題だな』

「結果がおんなじじゃ、こっちは気持ちもなにもないよ！」

言いながら、ふと、ボクは大明神の肩越しに鉄格子の向こうをちらっと見た。マサムネさんは、辛そうな顔をしてうつむいてる。「これも〝日出る国〟のためでござる。すまぬ……」ってコトバが、いまにも出てきそうなカンジ。

気持ちはわからないでもないケド、でもでも、ボクだって死ぬワケにはいかないよ。

ボクは、またぷよぷよ大明神をジッと見た。

「でもさ、どーしてイケニエがボクやルシファー先生やサタンじゃないといけないワケ？ 世界中を探せば、いくらでも大きな魔力を持ってるヒトが見つかるんじゃない？」

ルルーなんか、うまくおだててダマせば、喜んで何も知らずにイケニエになっちゃうかもしんない。……なぁんて、ちょっちイジワルなことを考えてみたりなんかして。

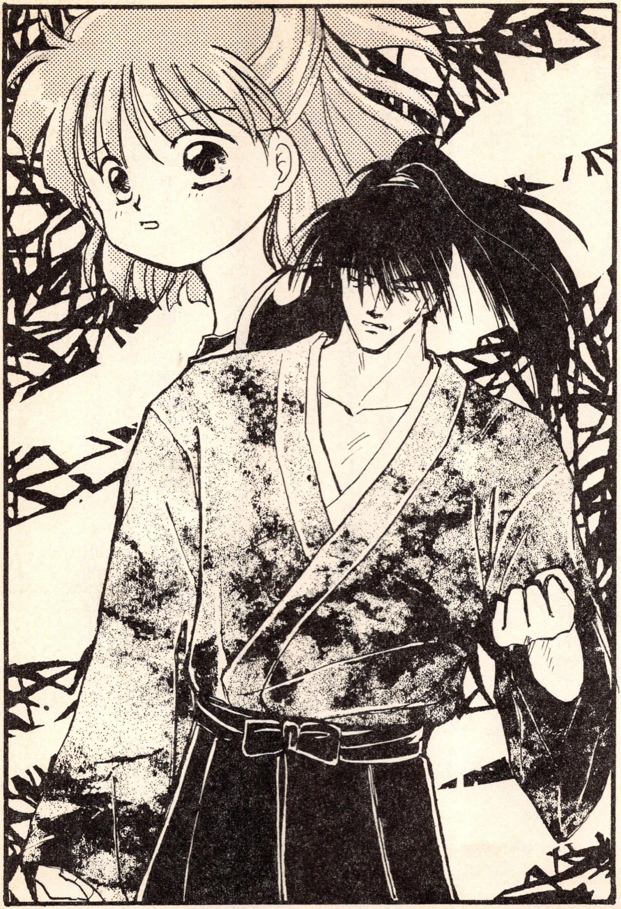
『先にとらえたふたりは、我と魔力の質が非常に酷似していたのでな……。魔力の吸収がスムーズに行くと考えたのだ。本来なら、あのふたりだけで復活に足る魔力を充分得られるのだが、少々、お前に興を覚えてな……』

「どういうコト?」
ニヤリ。ってカンジで、大明神の眼がイジワルそうにゆがんだ。
『その、チンチクリンな身体に、いかなる魔力が秘められているのか?　と思ったのだ……』
ムカ!
すっげ〜〜ヤなヤツ……。
サタンとルルーとシェゾの悪いところを集めて、一気にふくらましたみたい。シェゾから悪いところを取ったら、ヘンタイとおマヌケなところしか残んないケドね……。
「チンチクリンで悪かったわね!」
鉄格子の向こうのマサムネさんみたいに、「許せ、こちらも辛いのだ」みたいな顔をすれば、ちょっとは考えたんだけど、もうぜぇ〜ったいにイケニエになんかならないからね!　さっさとここから脱出して、先生とサタンを助けてやるんだから!
そのまえに……、
「ところで大明神さん、自分が復活してどうするの?」
このニクニクしい大明神のバケの皮をはがしちゃうもんね。こぉんなイジワルで邪悪なカッコした神サマなんて、聞いたことないよ。
『知れたこと!　この〝日出る国〟を支配するのよ!　いずれは全世界もな!』
「平和のために?」

『平和？』
がっはっは！　と大明神は炎をゆらめかせて笑った。シメシメ、うまいこと大明神からホントのコトが聞けそう……。
『くだらん！　それはマサムネや七ぷよ神どもを騙すための方便よ！　完全復活してしまえば、誰も我に逆らうことはできんのだ！　我はぷよぷよ大明神！　この世の覇王だぁっ！』

わ——っはっはっはっは！

まるで、お調子に乗ったサタンみたいに、胸をそらせて大明神は笑った。
「やっぱりね」
シュテルン博士も言ってたケド、ボクもずぅっとおかしいと思ってたんだ。だいたい、悪者に封印された神サマなんてあんまり聞いたコトないし、そうだとするなら、いまごろ〝日出る国〟はもっとシッチャカメッチャカだっただろうしね。
「大明神さま……」
『は……！』
ピキッ！
鉄格子の向こうから聞こえる悲痛な声に、ぷよぷよ大明神は固まった。
「いまのお言葉、真でござるか……？」

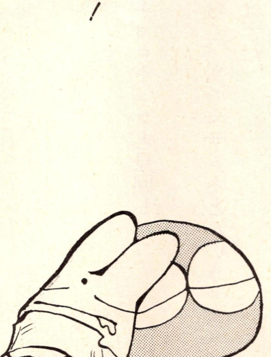


マサムネさんは、心から悲しそうに、眼を伏せながら話す。
ちょっと、悪いことしたかなぁ……。
ずぅっとマサムネさんは、この国のためを思って、大明神に仕えてたんだもんね。だけど、このまま騙されつづけて、大明神にいいように操られるよりは、ずっとずっとマシだ……とボクは思う。マサムネさんは、心底から悪いヒトじゃなさそうだし。
『い、いやぁ～……』
大明神は、マサムネさんのほうを向きながら、ポリポリと後ろアタマをかくみたいなしぐさをした。
『そこにいたのか、マサムネ。……安心しろ、いまのはこの女子を騙すための方便よ』
「これまでも、そなたはそうやって方便をおっしゃり続けていたのでござろうな……」
マサムネさんの口調は、もはや悲しさと怒りがごっちゃになってる。それでも敬語をやめないで、表面的には落ち着いてるところが、さすがおサムライさんだね。
ボクだったら、たとえばルシファー先生がボクを裏切ったとしたら、アタマがぐちゃぐちゃになって泣いちゃうところだよ。
だけど、マサムネさんより先に、大明神のほうが怒り出した。
『貴様！　それでもサムライか！　こんな小娘の戯言に惑わされおって！』
「小娘で悪かったわね」

思いっきり惑わされて、ホンネを言っちゃったクセに……。
『ええい、しゃべりすぎたわ！　マサムネ！　この娘の監視を怠るな！　アルル！　このぷよぷよ大明神に対する暴言、必ずや後悔させてやるぞ！』
ボッ！
ガスのきれたランタンの火みたいに、大明神はいきなり消えた。
残ったのは、鉄格子をはさんで対峙（たいじ）する、ボクとマサムネさん。
パチパチと、かがり火の音がする……。

二　それゆけ大脱出！
……そして、マサムネさんの爆弾発言！

〝ミヤジマグチ〟の港にほど近い街道。
ザザザァッ……！
竹林がざわめく。眼下に倒れふす者たちを起こすかのように。
「むぅ……」



最初に目覚めたのはシュテルンだった。
「あれほどの手練れがいるとは……。ルシファーのやつも囚われるはずだ」
パッパッと泥を落とし、シュテルンは残りのふたりをゆり起こす。
「起きろ、ルルーくん、ミノタウロス」
「ぶも……」
「あら博士、おはようございます」
「寝ぼけてる場合じゃないぞ、ルルーくん」
ゆっくりと眼をこすりつつ起き上がったルルーは、キョロキョロと見回した。
「そういえば、アルルはどこへ行ったんですの?」
「わたしが気づいたときには、もういなかった。おそらく、あのマサムネとかいうサムライに連れ去られたのだろう。確か、茶屋でそう言っていたはずだ」
「まぁ〜ったく、あのボゲボゲ娘にも困ったものですわね」
「そう言うな。マサムネは、キミやミノタウロスはおろか、わたしや、恐らくはルシファーでさえ一瞬で倒したほどの男。アルルくんひとりでどうにかできるとは思えん」
「オ――ッホホホホ! 確かにそうですわね」
ルルーは、手を口にあてて高笑いをした。
「まあ、あの子のことだから、死んでるってコトはないでしょ。アルルはほっといて、早くサ

タン様やルシファー先生を助けに行きましょう」
「ほっとくもなにも、アルルくんも同じところに囚われていると思うぞ。この件の黒幕は、あのぷよぷよ大明神とかいう輩らしいからな」
「そういえば、そのぷよぷよ大明神って、何者なんですの？」
「知らん」
格闘機械魔導師は、肩をすくめてかぶりをふる。
「わたしも、ルシファーらとともに魔界と現界を行き来して数百年になるが、ぷよぷよ大明神など聞いたことがない。……おそらく、邪悪な魂か何かが凝縮して具現化したものだろう」
「ぷよぷよ大魔王に近いものなのかしら……？」
「かもしれんな。とにかく、そいつを探せばはっきりすることだ。行くぞ」
と歩き出すシュテルンの裾を、何者かが引っ張った。
「ぐー、ぐー」
「あら、カーバンクル。いままでドコに行ってたの？」
「ぐー！」
ルルーの問いが聞こえているのかいないのか、カーバンクルは真っ赤なヒョウタンを抱えてクルクルと踊る。
「なんですの？　このヒョウタン？」

「それは、七ぷよ神のひとり、〝大黒〟のさそりまんが持っていたヤツだな」
シュテルンが、カーバンクルを拾い上げながら言った。
「ここに来る前、まんまとさそりまんに騙されて、サタンがこれに吸いこまれてしまった」
「ええっ！」
言うがはやいか、ルルーはカーバンクルの手からヒョウタンをひったくり、フタを開けて中を覗（のぞ）きこむ。
「この中にサタン様が……！」
「いや、おそらくはもういるまい。ヒョウタンから出されて、どこかの牢にでもブチ込まれているだろう」
「なぁ〜んだ」
興味を失ったルルーが投げ棄てたヒョウタンを、シュテルンはうまくキャッチ。
「でも、どうしてそんなものがここに？」
「マサムネが、アルルくんを捕らえるために用意しておいたのだろう。もっとも、ヤツの腕の前には、このようなものは必要なかったようだが。で、先程の戦いで、我々の攻撃がヤツをかすめ、ヒョウタンを落としてしまったに違いない。これを見たまえ」
シュテルンは、ヒョウタンにくくりつけられたひもをつまんだ。先端が、明らかにひきちぎられたような形状をしている。

「ふぅ～ん……」

「なにかの役に立つかもしれん。せっかくだから、持っていくとしよう」

３人と１匹は、竹林に囲まれた街道を進みはじめた……。

＊　＊　＊

どれくらい、ボクらは見つめあってただろう……？

ボクは、悲しくて、それでいてなんだかカタイ意志を持ったマサムネさんの視線を、そらすことができなかった。

「すまぬ、アルル殿……」

先に口を開いたのはマサムネさん。この一言に、マサムネさんの気持ちのすべてがつまってるような気がする。

「そんな……。悪いのはボクのほうだよ。マサムネさんを、こんな悲しいめにあわせちゃって」

だけどボクは、これでよかったんだとカクシンしてる。イチバン悪いのは、マジメなマサムネさんを騙（だま）してた、あのぷよぷよ大明神だもんね！

「しばし、じっとしていてくれ」

と言って、マサムネさんはチャキッと刀を構えた。
「へ？」
ちょ、ちょっと待って！　まさか、牢屋ごとボクを斬ろうっていうんじゃぁ……。
「はっ！」
シャキ――ンッ！
気合とともに、光が〝Z〟のかたちにきらめいた。だけど光がやんでも、マサムネさんの構えは変わらない。
次の瞬間！
ガランガラァンッ……！
鉄格子のいくつかが斬れて落ち、真ん中に四角い穴があいたようなカタチになった。
「す、すごぉい……！　こんなコトもできるの？」
「我が奥義〝斬鉄〟は、岩をも斬るでござる」
そう言いながら、マサムネさんは牢屋に入ってきて、ボクの手をそっとつかむ。
「しかし、今はそんなことを話している場合ではない。ひとまず、ここから逃げるでござる」
「え？　で、でも、ルシファー先生やサタンが……」
「彼らは、拙者が命にかえても助け出すでござる。しかし、今はそなたの身の安全を確保する

ほうが先決でござる」
「う、うん……」
ボクは、マサムネさんに引っ張られるようにして、地下牢をあとにした……。

＊　＊　＊

水晶球に映る、一組の男女。
サムライが洞窟の入り口から慎重に外をうかがい、魔導師の少女を伴って鬱蒼とした竹林の中を走り去っていく。
『おのれ……。やはり逃げおったか……』
ぷよぷよ大明神は、宙に浮かべた水晶球を凝視しながら、そうつぶやいた。自身を形作る炎が、背後に並んだふたつの十字架を果てしない闇の中に浮かび上がらせる。
サタンとルシファーは、磔にされたまま、こうべをたれていた。
大明神は、背後のふたりに一瞥をくれると、ふたたび水晶をみつめる。
『七ぷよ神どもは、いったいナニをやっているのだ！　役立たずどもめが！』
「お困りのようだな……」
ブォンッ！

突然、大明神の眼前で小さな竜巻が起こった。その黒い風とともに現れたのは、漆黒のマントを羽織った銀髪の魔導師。

「オレを雇え。憂いを解決してやる」

仰々しくも邪悪な装飾の杖をカッッとつき、魔導師は言った。そのとき、腰に佩いた長剣も軽く音を立てる。

『何者だ？ 貴様……』

ギロリ。

大明神は水晶から眼を離し、魔導師を睨んだ。

「そんなことはどうだっていいだろう。強いて言うなら、あんたの味方だ」

『報酬は？ 雇え、というからには相応の見返りを望んでのことだろう？』

ニヤリ、と魔導師は口を邪悪にゆがめる。

「娘の魔導力。残りカスはあんたにくれてやる」

『なに？ 彼奴は我が先に眼をつけたのだ。そう簡単に譲るわけにはいかん』

「いや、眼をつけたのはオレが先だ。……何年も前からな。この条件が飲めなければ、交渉は決裂だ。で、あんたはそのふたりを逃がしてしまうと……」

『おのれ……このぷよぷよ大明神を愚弄するか……！』

グォッ！

にわかに、大明神の炎が吹きあがった。

「怒るな。オレは知っているのだぞ。あんたの復活に必要な魔力は、うしろの2匹で充分なはずだ」

『ほほう、下調べはすでに済んでいるようだな』

「伊達に、裏街道を歩いているわけではない」

炎の勢いが、またもとに戻る。

『気に入った。条件を飲もう。……ただし！』

「ただし？」

『我のぶんも、少しは娘の魔力を残しておいてくれよ』

「フッ、そこまで頼まれてはしょうがないな……。わかったよ」

ブォンッ！

再びの黒い竜巻とともに、魔導師シェゾ・ウィグィィは消えた……。

＊　　＊　　＊

ザザザザザッ……！

ボクとマサムネさんは、地下牢、そして洞窟を抜けて、鬱蒼とした森の中を走っていた。う

しろには、あの〝フジヤマ〟がモノスゴク近くに見える。ぷよぷよ大明神の洞窟は、〝フジヤマ〟のふもとの森にあったのだ。
さっきマサムネさんと戦った、街道沿いの竹林とは、深さからしてゼンゼン違う。道、なんて言えるのは、タヌキやキツネなんかが通った獣道くらいだ。
こんなトコを思いきり走るなんて初めてだから、もうくたびれちゃってしょうがないよ。
「ね、ねぇ……、まだ走るのぉ……？」
ゼェゼェ言いながら、ボクはマサムネさんに向かって言った。
「まだでござる。大明神の洞窟は思った以上に広い。まだ我々の足の下にも広がっているはずでござる」
さすがにマサムネさんは、息ひとつ乱れてない。
「洞窟には特殊な結界が張ってあり、大明神はその中なら自由に動けるでござる」
「そ、それだったら、外に出ちゃえば大丈夫なんじゃないのぉ……？」
「外に出るのは不可能でも、地下からなにか手段を講じることはできるでござる」
「で、でも、もう走れないよぉ……」
もうダメ、倒れそう……。
「しょうがないでござるな……」
マサムネさんは足を止めた。ボクもそれにならう。

「小休止を入れるでござるか」
「はぁ～～……」
ボクはため息をついて、しりもちをつくようにその場に座り込んだ。
しばらく休んでると、じわじわと元気が回復してくる。
そのあいだにもずっと、マサムネさんはぷよぷよ大明神の追っ手が来てないかどうか、まわりをチェックしていた。さすが、おサムライさんは違うね。
「ねぇねぇ……」
ようやく息が落ち着いたところで、ボクはマサムネさんに問いかけた。
「どうやってルシファー先生やサタンを助けるの？」
「そうでござるな……」
しばらくマサムネさんは考え込んで、
「大明神が復活してしまわないよう、まず〝引き金〟を手に入れておくでござる」
「〝引き金〟？」
「これでござるよ」
と言いながら、マサムネさんは巻き物を取り出して、ビラビラッと広げる。
そこに書かれているのは、「復活の儀式」という文字と、その儀式用らしい図。
「ん～？」

よくみると、その図は六芒星（ろくぼうせい）になってて、その頂点に赤、青、黄、緑、紫、透明のぷよぷよが描かれている。透明っていうのは、たぶんおじゃまぷよのコトだろうね。

で、その六芒星の真ん中にいるのは……。

「カーくん！」

「左様。アルル殿らとともに旅をしている、カーバンクルなる黄色の生物。それが〝引き金〟なのでござる」

「ど、どういうコトぉ？」

ボクは、さらに巻き物を広げて、続きを見た。

儀式の図から先は絵巻きになってて、ふたつのツノとおっきな翼を持った悪魔が〝日出る国〟を焼いて、さそりまん、ドラゴン、ぞう大魔王、まもの、それからドラコケンタウロス、すけとうだら、ハーピーみたいなカンジの7人が、その悪魔と戦おうとしてる。

「この7人っていうのが、七ぷよ神ってワケ？」

「いかにも」

「ふぅ～ん……」

でも、どっちかっていうと、悪魔のほうがボクは気になってしょうがない。だって、サタンにそっくりなんだもの。

なんだか、イヤな予感がするなぁ……。

これから、ものすごぉ～く辛くて激しい、ぷよぷよ大明神との戦いが待ってるんだろうケド、そのあとがろくなオチにならないような気がする……。
「どうしたでござるか？」
驚いたように、マサムネさんはボクの顔を覗きこんだ。
「え？　いやいや……なんでもないよ」
この絵巻きに描かれてる悪魔がサタンかもしれないって言ったら、マサムネさんはいったいどんな顔するだろう……？
「アルル殿……」
「は、はいっ！」
マサムネさんがボクの考えを読んだかと思って、一瞬ボクはドキッとした。
見ると、マサムネさんはものすごぉ～くマジメな顔で、ボクを見つめてる。心なしか、思い詰めたようなカンジ。
「なぁに？　マサムネさん」
「ひとつだけお伺いしたい。なにゆえ、ぷよぷよ大明神が世界征服を企む輩だとわかったのでござるか？」
「ホントはね、そうなんじゃないかなぁ～って思ってただけ。それでヒッカケてみて、やっぱり悪者だってわかったワケ」

「なぜ、そのような疑いを抱くに至ったのでござるか？」
「だって、アヤシイじゃん。ボクの国のほうだって、悪者に封印された神サマなんていないよ。だったらさ、悪者はドコに行っちゃったの？　それに、シュテルン博士もぷよぷよ大明神なんて聞いたコトないって言ってたし……」
「シュテルン博士？……ああ、あの武闘家どのでござるな」
「博士って、あったまいいんだよ。あんなにゴッイ身体してるケド」
アタマのよさだけだったら、ルシファー先生のほうが上だろうケドね。
「いま気がついたんだけど、この巻き物にはぷよぷよ大明神のコトなんて書いてないよ」
描いてあるのは、復活の儀式のコトと、七ぷよ神と、サタンみたいな悪魔のコトだけ。まあ、この悪魔が、ぷよぷよ大明神に見えなくもないケド……。
「この復活の儀式で、大明神をよみがえらせるのでござろう？」
「う～ん……、それってヘシじゃない？　復活ってコトはさ、前にもいたってコトだよね？なのに、この巻き物に大明神のコトが書いてないって、おかしいよ」
なんだか、ハナシの展開のしかたがルシファー先生とかシュテルン博士みたいになってきたなぁ。師匠のクセって、やっぱり弟子に移るものなのね。
ってまぁ、それはおいといて……。
「なかなかに、聡明な意見でござるが……」

　マサムネさんは言った。
「あのぷよぷよ大明神が歴史上にも存在しないものだとするならば、我々の前に現れたあれは、いったいなんなのでござろう？　それに、儀式によって復活するものとはいったい……？」
「あっ！　そーか」
　ポン。
　とボクは手を打つ。
「と、いうコトは……」
　ちょっと待てよぉ。だんだんゴチャゴチャになってきたぞ。
　ぷよぷよ大明神が、悪者に封印された神サマじゃないってコトはもうわかってるんだケド、だとすると、カーくんを〝引き金〟にした儀式で復活するのはいったい誰？
　ボクらに対して、大明神はいまのところ手を出してくる様子はない。ってコトは、大明神は、いまはまだボクらに手を出せる状態じゃないってことで、それは完全復活してないから……？
　牢屋（ろうや）で聞いた、『完全復活して世界を征服するのだぁ！』ってセリフにウソはないだろうし、だとすると儀式で復活するのは、やっぱりぷよぷよ大明神ってコトになるよねぇ……。
「う～ん……」
「いずれにせよ……」
　考え込むボクの肩を、マサムネさんは膝（ひざ）をついてポンと触れた。

ざろう」
「カーバンクルとやらを押さえ、今いちど大明神のもとへ行けば、すべてがはっきりするでご
「そうだね。……カーくんのコトならまかせて！　ボクとカーくんは友達だから」
「それは好都合でござる」
「あとはカーくんを探すだけだね。きっと一緒に、ルルーとかシュテルン博士もみつかるだろうし。みんな、心強い味方だよ」
やっぱ、アレコレ考えるのはボクの性にあわない。
もう、ずずいっと行動するのみ！　だもんね。
それに、マサムネさん、シュテルン博士、ルルーやミノちゃんなんて強い味方がいっぱいいることがわかってるんだから、これでうまくいかないはずがない！
よしよし、元気が出てきたぞ。待っててね、ルシファー先生、サタン。
「フ……」
マサムネさんは、心からウレシイような、ホッとしたような微笑(ほほえ)みを一瞬だけうかべて、そしてまた真顔にもどった。
「迷惑をかけるでござるな……」
「そんな……。マサムネさんがあやまる必要ないよ。悪いのは、あのぷよぷよ大明神だもん。こぉんなマジメなマサムネさんを、ずっとダマしてたんだから」

「しかし拙者の盲目的な諸行が、このような結果を招いた原因でもあるでござる。いかな〝日出る国〟のためとはいえ……。やはり、ここは切腹して……！」
「セップク！……ってあのハラキーリってヤツ？」
ミスをおかしたおサムライさんが、お腹を切って死んで詫びるっていう……。
「うむ」
「そんな、死んじゃダメだよ！　大丈夫！　ぷよぷよ大明神をなんとかすれば、この国も平和になるよ！」
ジッ、とマサムネさんはボクを見つめる。
「そ、そりゃぁ、そうなるっていう証拠はないケド……。それに、約束したじゃない！　ルシファー先生とサタンを助けてくれるって！」
せっかく、お友達になれると思ったのに、そうなる前に死んじゃうなんて……、ボクはイヤだよ！
「そうか……。そうでござったな……」
フッとまたマサムネさんは微笑んだ。ちょっち元気がないように思えるケド、ボクの知ってる他の男のヒトたち、サタンやシェゾにはぜぇ〜ったいにマネできないサワヤカな笑みだ。
「アルル殿……」
マサムネさんは、肩に置いた手を動かして、ボクの手を握った。

「この愚か者の願いを、ひとつ聞いてはくれまいか？」
「なぁに？」
「この件が落ち着いたら……、拙者と一緒になって欲しい」
「へ？」
しばしの沈黙。
ザザザァッ……！
森の木々がざわめく。
「一緒って、あの……」
「左様。夫婦になる、ということでござる」
「ええ――――っ！」
これは大ショ――ック！　まさか、マサムネさんに告白されるなんて……！
「拙者は、ひと目見た瞬間から、そなたを愛してしまった。その、年頃の娘とは思えぬ幼児体形、男まさりの勝気さと行動力、あふれんばかりの元気さ……。拙者はそのすべてに惚れたでござる」
ム！
なぁんか引っ掛かるなぁ、その言い方。幼児体形で悪かったわね。

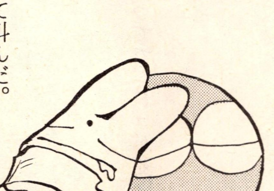
でもどうしよう……。困ったなぁ……。
「無理に、とは言わん。そなたも想い人のひとりくらいはいるでござろう」
「いや、そういうのはいないんですケド……」
無理に言ってくれないから、答えに困っちゃうんだよぉ。いままでのパターンとは、ぜんぜん違うんだもん。
たとえばサタンみたいに、
『オレの妃になれ！』
ってゴーインに来てくれれば、
「やだ！」
って思いきり返せるんだけど……。
どうしよう……。
「やはり、かなわぬ願いでござるか……？」
「いやほら、ボクまだ修業中の身だし、結婚とかなんとかはまだ早いかなぁ〜、なんて……。
あはははは……」
「そうか……」
ちょっと待ってよ。
ボクは、ふとあることが気になって、マサムネさんの年季が入ったシブイ顔をじっと見た。

「マサムネさんて、いくつ？」
「四十を越えたところで、数えるのをやめたでござる」
だあぁっ！
「それじゃ、ボクのお父さんとかっていうレベルじゃない！」
「しかし、愛に年の差は関係ないでござる」
「そりゃぁ、そうなんだケド……」
とボクが言いおわるより早く、
ガバッ！
「わぁ！」
いきなりマサムネさんが抱きついた！
「な、なにを……！」
「どうせかなわぬ願いなら、せめて、しばしこうさせてくれでござる……」
ギュッっと腕に力がこもる。だけど、ぜんぜんボクは苦しくない。
「マサムネさん……」
ダメだ、こんなムードでせまられたら、ボクもマサムネさんを好きになっちゃうよ！
だけど、ボクは一流の魔導師になるまでは、恋だとか愛だとかは考えないって誓ったんだ！
ここで本気になっちゃダメだよ、アルル！

マサムネさんの鼓動を感じながら、ボクは自分に言い聞かせた。
だけど……。どうしよう……。一応、サタンほどの相手も魔法で「ばたんきゅ〜」させることくらいはできるようになったし、ボクだってやっぱり年頃の女の子。普通に恋愛もしてみたい……。相手が、ちょっちお年をめしてるけど……。
「そこのロリコンおやじ！　そいつはオレが先にツバつけたんだ！　その手を放せ！」
いきなり、ボクらの雰囲気をブチ壊すように、怒鳴り声が竹林いっぱいにこだました……。

三　やっぱり出たぞ！　シェゾ・ウィグィィ！
……もう、怒っちゃうぞ！

「何ヤツ！」
声が聞こえた瞬間、マサムネさんはぱっとボクから離れ、刀を構えて叫んだ。
ボクには、声の主はだいたいわかってる。こんな登場のしかたをするのは、アイツのほかには誰もいない。
ブォンッ！



突然、ボクらの目の前に黒い竜巻が発生した。そして、その中心から何度も見た姿が現れる。夜みたいな真っ黒いマントを羽織って、マガマガしくてオーギョーな杖を持った銀髪の魔導師、シェゾ・ウィグィィ！

「出たぁ――――っ！　変態っ！」

ボクは、思いきりワザと叫んだ。

「バカモノ！　オレは変態ではない！」

「いーや、変態ですぅ！　いっつもいっつも〝お前が欲しい〟とか言ってて、ドコが変態じゃないというの？」

「それは、お前の魔力が……！」

「はい決定――！　あんた変態～っ！」

わーぱちぱちぱち……！

ウムを言わせず、ボクはシェゾを挑発するように拍手した。

「おのれぇ～っ……！」

「変態と言われて怒るは、もとよりそうである証拠でござる」

バチバチッと火花を散らすボクとシェゾのあいだに、すすっとマサムネさんが割って入った。

「お主、アルル殿に仇をなす輩とあらば、このマサムネ、容赦せぬぞ」

刀を構えるマサムネさんに対して、シェゾは腰の剣を抜く。刃が真っ黒で、ものすごくブキミな剣だ。
あり？　シェゾってもともとそんなの持ってたっけ？
「フッ、ロリコンがかっこつけるんじゃない」
ピキッ！
シェゾの一言で、マサムネさんの身体が凍りついた。
「貴様、言うてはならぬことを……！」
「フン！　ロリコンをロリコンと言ってなにが悪い！」
「へ？　マサムネさんって、ロリコンなの？」
ずるぅっ！
ボクのセリフに、ふたりともズッコケる。
……いまボク、なんかヘンなこと言ったかなぁ。
「あのなぁ、お前……」
シェゾが、黒い剣を杖代わりにしてヨロヨロと立ち上がりながら言った。
「なによ」
パッパッとほこりを払ってるマサムネさんを、シェゾは指差す。
「あのサムライおやじがお前を好きだってハナシは、お前も聞いたよな？」

「うん」
「お前とサムライおやじの年の差はいくつだ？」
「え〜と……、お父さんと子供くらい。それがどうかした？」
「だぁぁぁぁぁっ！」
いきなり、シェゾはフンガイした。
なんなのよ、まったくぅ……。
「一度、自分の姿をカガミでよく見てみろ！　よーするにだな！　このおやじは、いいトシこいてお前みたいなチンクシャが好みなんだよ！　これをロリコンと言わずしてなんと呼ぶ！　いきなり、暗がりに連れ込んだりしないだけマシって程度のな」
「あー、そうか！」
ポン！
とボクは手を打つ。……ってちょっと待て。
「チンクシャってなによ！　シェゾだって、お前が欲しいとか言って来るクセに」
「フン！」
バサァッ！
シェゾは、大ゲサにマントをひるがえして、剣を構えなおした。
「オレが欲しいのは、お前の魔力。器のかたちなどどうでもいい」


そいつはオレが先にツバつけたんだっ その手を放せ！
出たあ～変態っ
やーい へんたいっ
ちがーうっ
だれがへんたいじゃっ

「ひっど――い！　そんな言い方ないじゃない！」
「とにかく……」
また、マサムネさんがボクとシェゾのあいだに割って入る。しぐさがあくまでも自然で、すごくカッチョイイ。サタンやシェゾなんかにはマネできないよね。
「これまでの、我らに対する数々の無礼。そして、明らかなアルル殿への敵対姿勢……。以って、拙者が貴様を斬るに充分な理由ぞ」
チャキッ！
いままでにないハクリョクで、マサムネさんは刀を構えた。ボクらと戦ったときとはゼンゼン違う。……ちょっと、恐くなってきたよ。
「待って！」
ボクは、その恐さを振り払うように言った。
「どうしたでござるか？　アルル殿」
「シェゾは、ボクがやっつける！」
毎度毎度やってきて、ボクはもう疲れたよ。ここらへんで、きっつ――くコラシメておかないと。ボク自身がね。
「フ……。アルル、お前の呪文(じゅもん)は、この〝闇(やみ)の剣〟の前では役に立たんぞ」
「ボクだって、新しい呪文くらい覚えたんだもんね。シェゾなんかイッパツで吹き飛ばしちゃ

うヤツを」

「ほほう……。ならば、それを見せてみよ！」

「よぉ〜し……！」

はぁぁぁぁぁっ……！

ボクは、大きく息を吸いこんで神経を集中させた。

シュォォォォォォッ……！

全身を、魔導力が駆け巡ってるのがわかる。

魔導力が充分高まったところで、ボクはそれを一気に呪文に乗せた！

「るいぱんこ！」

シィ——ン……。

ザザザァッ……！

いっぱいの木々が、ボクをあざ笑うようにざわめく。

「あり？」

おかしいな？

前に唱えたときは、火の精さんが出てきてくれたんだケド……。

「は——っはっはっは！」

シェゾが、思いっきりおっきな声で笑った。

「それが、お前の新しい呪文か？　すごい威力だな」

「………」

すっげ――ヤなヤツぅ。そんなイヤミ言うことないじゃない。

だけど、どうしてなにも起こらないんだろ……？

「しかし、もはや遊びは終わりだ！」

チャキッ！　と剣を構えて、シェゾはいきなり間合いを詰めた！

「わっ！　ちょ、ちょっと待って！」

「問答無用！」

そして、上から〝闇の剣〟を振りおろす！

「〝闇の剣〟よ、切り裂け！」

グォッ！

真っ黒な刃が、ボクに襲いかかる！

ダメだ！　防御してるヒマなんかない！

「……っ！」

ボクは、死をカクゴしてぎゅっと眼をつぶった。

だけど……。

「あぶない！　アルル殿！」
ガキィンッ！
〝闇の剣〟はボクに届かず、変わりにモノスゴイ金属音が響く。
ゆっくりと眼を開けると、マサムネさんが自分の刀でシェゾの剣を受け止めていた。
「マサムネさん！」
「大丈夫でござるか？　アルル殿」
「う、うん……」
ボクが答えると、マサムネさんはキッとシェゾを睨んだ。
「アルル殿は、拙者が命に変えても殺らせぬでござるよ」
「フン！」
ギリギリギリ……。
マサムネさんとシェゾのあいだで、刃のこすれあうイヤな音がする。
「ならば、貴様から消えろ。……はぁぁっ！」
刃を重ねたまま、シェゾは〝闇の剣〟に気を込めた。
次の瞬間……！

ドドォンッ！

剣から発した真っ黒な火柱が、マサムネさんを包みこんだ！

「わぁっ！」

その火柱の勢いで、ボクは後ろに跳ね飛ばされる。

「マサムネさぁん！」

とボクが駆け寄ったときにはもう遅く、火柱が消えるのと一緒に、マサムネさんの姿もなくなっていた……。

「…………」

マサムネさん……。

結婚とかなんかはムリだけど、せっかくいいお友達になれると思ったのに……。

「は――っはっはっは！　どうだアルル！　この〝闇の剣〟の威力は！　次は、お前がこうなる番だ！」

高笑いするシェゾを、ボクはキッと睨んだ。

「もう許さないぞ！　シェゾ！」

「許さなければどうだというのだ！　もはや、貴様の呪文は効かんぞ。また、あの役立たず呪文でも唱えてみるか？」

「ホントに効かないかどうか、やってみなきゃわかんないよ！」
また、ボクは意識を集中させた。
すると、なんでかわからないケド、いままでに起きた悲しいコトが頭の中を駆け巡り始める。
ルシファー先生は行方不明になっちゃうし、サタンはさそりまんに捕まっちゃうし、カーくんやルルー、シュテルン博士ともはぐれちゃった。それよりもなによりも悲しいのは、マサムネさんが……！
どれもこれも、みぃんなあのぷよぷよ大明神が悪いんだ！　それから、いまボクの目の前にいるシェゾも！
そう思った瞬間……！
グォォォォォォォォォォッ……！
いつもよりモノスゴイ魔導力が、ボクの身体から沸き上がった！　ダイアキュートを何度も何度もかけたときよりも、はるかに強いパワーだ！
これならイケル！
「な、なんだ……？」
シェゾはボクの様子を見て、ほんの少しあとじさった。だけど、ぜぇ〜ったいに逃がさないからね！
「シェゾなんか、消えちゃえ――――っ！」

「くっ……！」

ジュゲム！

ボクは、心の中で呪文を唱えた。

ドッカ―――――ンッ！

大爆発！

「うおぉぉぉぉぉぉぉっ！」

〝闇の剣〟を使うヒマもなく、シェゾは、はるかかなたに吹き飛んでいった……。

「や、やった……！」

マサムネさん、カタキは取ったよ……。

ボクは、モノスゴイ脱力感に襲われて、その場にへたりこんだ。

その途端、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

ボクの足元の地面が、いきなり崩れ出した……！

「わぁぁぁぁぁっ！」

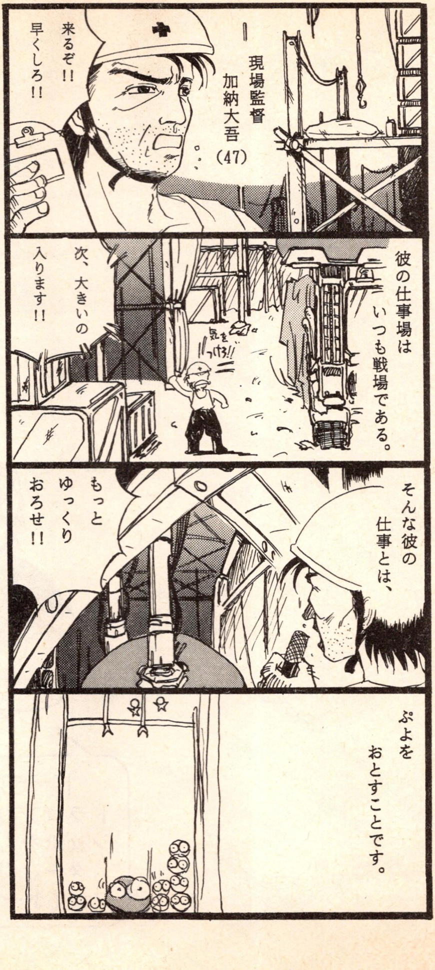
ボクの身体が、崩れた地面と一緒になって、まっさかさまにおっこちる！

ルシファー先生！　マサムネさん！　サタン！　カーくん！　ルルー！　ミノちゃん！　シ

ユテルン博士！
誰か、ボクを助けて……！

第四章 〝アルル、めでたしめでたしのこと〟

働くおじさん

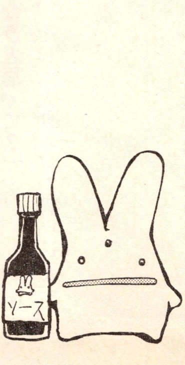




ドラコケンタウロス
ドラゴンの羽とツノ、そして
シッポをもった勇ましいモン
スター。得意技は口から炎の
ファイヤーブレスだ!

一

落ちたところはまた洞窟(どうくつ)！
……やっと会えたよ！　先生とサタン！



戦場跡。

折れた刀、矢、壊れた鎧(よろい)や兜(かぶと)、そして土に染み込んだおびただしい血が、当時の凄惨(せいさん)さを克明に物語っていた。

――こんなとこ、あの娘には見せられんな。ま、死体がないだけマシか。

〝格闘機械魔導師〟シュテルンは、ふとそんなことを考えてみる。しかし、またすぐに目の前の人物たちに意識を戻した。

ルルー、シュテルン一行の前に立ちふさがっているのは、七ぷよ神の、重量級トリオをのぞいた４人。その中に、赤いひょうたんでサタンを捕らえた、あの〝大黒〟のさそりまんもいる。

「お前たち！」

ビシィッ！

と〝毘沙門〟のドラコケンタウロスが、シュテルンたちを指差した。
「こっから先に行きたければ、あたしたちを倒してからにしなさい！」
「もとよりそのつもりだ」
バキッ、ボキッ！
シュテルンは太い指を鳴らしながら答える。
「ルルーくん、ミノタウロス、こいつはわたしが引き受けた。キミたちは残りの連中を頼む」
「わかりましたわ！」
「ぶもー！」
——とその前に。
とでも言っているかのように、ミノタウロスはルルーから少々離れ、頭の上ですやすや眠っているカーバンクルを、安全そうな木陰にそっとおろした。
「ふふん、美貌と強さを兼ね備えたあたしに、ひとりでかなうと思って？」
ドラコケンタウロスは、ルルーのように高飛車に微笑み、そして大きく息を吸い込んだ。
「くらえっ！　ファイヤーブレス！」
ゴォオオオオオオオオッ！
〝毘沙門〟の口から発した紅蓮の炎が、シュテルンに向かって一直線に襲いかかる！

しかしシュテルンは、余裕の表情のまま、すばやく指で印を結んだ。そして、拳を地面に叩きつける！
「凍結白虎陣！」
シュォォォォォォォォッ！
シュテルンを取り囲むように地面から発した真っ白な光が、天に向かって伸びた。ファイヤーブレスがその光に触れた瞬間……！
パキ――ンッ！
炎は凍りつき、くだけちった。
「おおおっ！　これはスゴイ攻防だ！　いかがですか？　解説の〝大黒〟さん」
「そやねぇ……。ま、ご覧の通りの結果、っちゅーコトやね」
「だああっ！　お前たち！　ぼぉっと見てないで、なんとかしなさいよ！」
傍観者ヅラの〝大黒〟さそりまんや〝恵比須〟のすけとうだらに、ドラコケンタウロスはまさに火をはくような勢いで怒鳴る。
「しょうがおまへんなぁ……」
あいかわらず、人のよさそうな笑みをはりつけたまま、さそりまんは槍を構えた。
「ほな行きまっせぇ〜！」
間延びした掛け声とともに突進！

……しかし。
「ぶもーっ！」
バッチィ――ンッ！
「あいたぁっ！」
ミノタウロスの斧にひっぱたかれ、さそりまんはボールのように跳ね飛んだ。
「ったく、なにをやっているん……んっ？」
ふわっ。
一方、すけとうだらの身体が、ひとりでに浮いた。さそりまんへの悪態が終わる前に……。
「背負い投げ！」
ルルーが、持ち上げたすけとうだらを、そのまま地面に思いきり叩きつける！
ドバァンッ！
「げはっ！」
「オー――ッホホホホホホ！　手応えがないわねぇ。あなたたち、それでも七ぷよ神？」
ルルーは、超高飛車に言い放った。
「うぉのれぇ～～っ……！」
ドラコケンタウロスが、拳を握り締めて歯噛みする。
「こうなったら、最後の手段よ！　〝弁天〟！」

「はぁ～い～」
少々間延びした声とともに、〝弁天〟のハーピーが優雅に躍り出た。
「あいつらに、アレをかましてやんなさい！」
耳センをしながら、〝毘沙門〟はハーピーに指示。
「オーホホホホホホホ！　なにをするつもりか知らないけど、あたくしたちにはゼンッゼン効かないわよ」
「ふふん、どーかしらね」
「ほ～ろ～ひ～れ～は～ら～ひ～れぇ～～」
キィィィィィィィィンッ……！
ハーピーが歌い出した途端、猛烈な超音波がルルーたちに襲いかかる！
「おわぁっ！　なんだこの音はぁっ……！」
「あ、頭が……！」
「ぶも～っ……！」
耳を押さえてのたうちまわるシュテルンたちに、ドラコケンタウロスら3人が、一気に飛び掛かった。
「ホホホ！　これがあたしたちの奥の手よ！……ドラコパーンチ！」

ドカッ！
「がはっ！」
「しっぽアタ――ック！」
バチィン！
「や、やったわね……！」
「槍でもくらいなはれ」
チクチク、ブスブス。
「ぶもも～～っ！」
シュテルンたちは、超音波のために身動きがとれず、ただ攻撃を受けつづけるだけ。
「くそっ、これでは手が出せん……！」
そこへ……。
「御免」
ビシッ！
「きゃぁっ！」
突然、ハーピーが叫び、超音波が止んだ。
「なにっ！」
ドラコケンタウロスをはじめ、全員がそっちに視線を向ける。

これまでハーピーが歌っていた場所には、くずおれる彼女と、キズだらけで立っているマサムネの姿があった……。

＊　＊　＊

「ん……」
気がつくと、ボクはゴツゴツした土の上にいた。
「ここは……？」
天国？　それとも地獄……？
上を見ると、天井におっきな穴がポッカリ開いていて、そこからお日サマがキラキラと輝いてる。上のほうに、あのフジヤマも見えるね。
「……………」
ボクの周りに広がってるのは、これまたおっきな部屋。なんかの地下室……？　っていうより、洞窟(どうくつ)みたいなカンジだ。
ここも、あのぷよぷよ大明神の洞窟ってヤツなのかなぁ……？
とにかく、ボクがいるのはまだあの世じゃないってコトは確かだね。
っていうふうに考えたら、ちょっと元気が出てきたぞ。早くルシファー先生やサタンを助け

なくっちゃ！
「ん〜……？」
ふと、洞窟の奥のほうにキミョーな物陰を見つけた。お日サマの光がちょっとしか届かないから、はっきりとはわかんないんだケド、ふたつの柱……？　十字架……？
ボクは、なにげなくそこに近づいた……。

＊　＊　＊

再び戦場跡。
「マサムネ！　お前、裏切ったわね！」
ドラコケンタウロスが、火を吐かんばかりの勢いで、マサムネを指差した。
「裏切った、とは人聞きの悪い。そうしたのは拙者ではなく、大明神のほうでござる」
「どういうことだ……？」
マサムネとドラコケンタウロスのにらみ合いを前に、シュテルンがひとりごちる。
「バカなことを……。我がぷよぷよ大明神さまがそんなコトをするはずないわ！」
「たとえバカなことであっても、これは事実でござる。大明神は、この〝日出る国〟、ひいては世界を我が物にしようとしているのでござるぞ。我々は、それのために操られているにすぎ

んのでござる」
「え〜〜い！　ござるござる言ってんじゃないわよ！　〝大黒〟！　〝恵比須〟！　この裏切り者を始末するわよ！」
「がってんだ！」
「しょうがおまへんなぁ……」
「やれやれ……」
マサムネは、ため息とともに刀を構えた。
「口で言ってもわからんようでござるな……」
「いくわよ！」
と、ドラコケンタウロスたちは飛び掛かる。
「遅い！」
しかし、それよりも早くマサムネが動いた！
シュバババッ……！
閃光(せんこう)がみっつ！
ドドォッ！
光が消えると同時に、ドラコケンタウロスたちは倒れた。

「先手必勝の術〝烈火〟……。安心せい、峰打ちでござる」
「ちょっとあなた！　アルルをドコにやったのよ！」
刀を鞘に収めるマサムネに、いきなりルルーがくってかかる。
「マサムネ殿、とか言ったな。それもあわせて説明してほしいものだな」
シュテルンも、マサムネに問いかけた。
「大丈夫でござる。おそらく、アルル殿は死んではおらぬ。だが、我々が早急に救出せねば、いずれそうなるでござろう」
「どういうコト？」
「理由は、道中にてすべてお話しするでござる。それよりも、早くアルル殿をお助けせねば。
……それから、カーバンクル殿とやらはどこにおわす？」
「カーバンクル？」
「ぶも」
ミノタウロスが木陰を指差す。
「ぐぅ〜、ぐぅ〜……」
カーバンクルは、あれだけの大騒ぎにもかかわらず、思いきり眠りこけていた……。

＊　　＊　　＊

「あ――――っ！」

広くて暗い洞窟の奥でボクがみつけたのは、磔用（はりつけよう）のおっきな十字架だった。それがふたつ並んでる。

そして、そこに張り付けられていたのは……！

「ルシファー先生！　サタン！」

『アルル！』

『やあ、アルルくん。元気だったか？』

こんな状況だっていうのに、いきなり「元気か？」とかってセリフが出てくるあたり、やっぱりルシファー先生だ。

と思った途端……、

ポロポロポロ……。

突然、ボクの眼から涙があふれてきた。あ、あれ？　おかしいな？　ここは泣くシーンじゃないのに……。

先生が旅に出たところから始まって、楽しいこと、辛いこと、いろんな思い出が頭の中をグルグルしてる。ゼンゼン涙が止まらない。
「せ、先生ぇ……。サタン……」
『どうしたアルル！　なにを泣く！　そんなにオレに会えたのがうれしかったのか！』
サタンを無視して、先生はいつもの優しいニコニコ笑いをボクに向けた。
『ここに来るまで、いろいろなことがあったようだな』
「う、うん……」
『だが、これくらいで泣いていてはいかんぞ』
「へ……？」
『まだキミには、わたしたちを救い出すという重大な使命が残っているのだからな』
ルシファー先生らしいセリフだ。だけど、ものすごぉ〜く元気がでてきたぞ！
「はい！　待っててくださいね！」
ボクは、ぐいっと涙をふいて、ふたりに向かって笑った。
『感動の対面は、終わったかね……？』
ボボボボボボ……！
ボクと、先生たちが張り付けられている十字架とのあいだに、人の形をした炎が、威圧的に、ゆっくりと現れた。

ぷよぷよ大明神だ！

二　帰ってきたマサムネさん！
……観念しなさい！　大明神！

ズシィン、ズシィン……。

大明神に続いて、七ぷよ神の重量級トリオ——ぞう大魔王とドラゴンとまもの——が十字架の後ろのほうから出てきた。

だけどみんな、火の精さんの大爆発攻撃のおかげで身体中がボロボロだ。

3人が出てきたところで、ぷよぷよ大明神は、ワザとらしく丁寧におじぎをした。

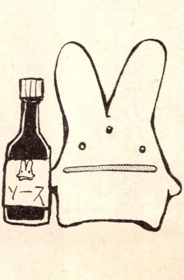
『我が復活儀式の間にようこそ』

「はぁ、こりゃどうも御丁寧に……」

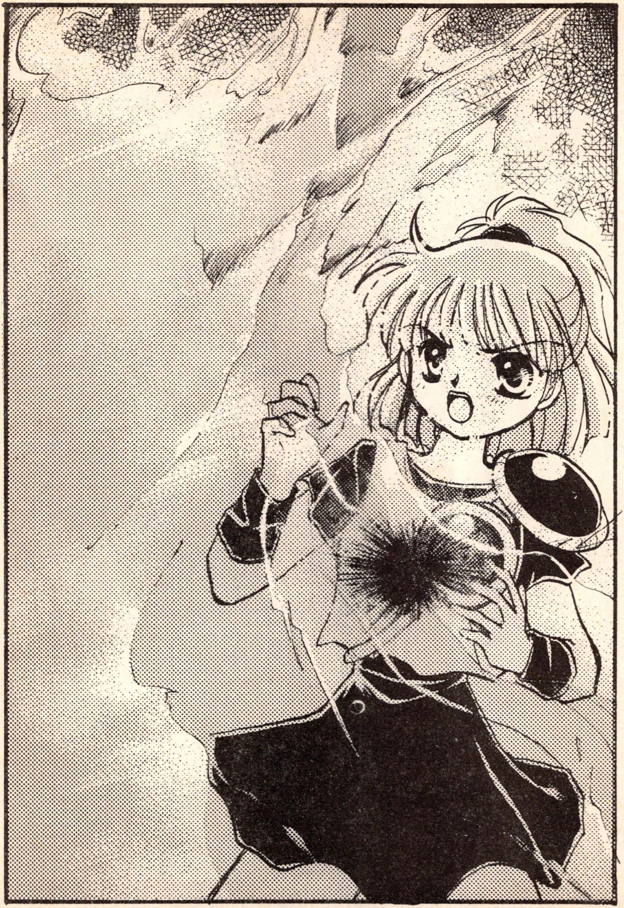
『こらこらアルル！　そいつは敵だろうが！　お前まで挨拶（あいさつ）してどうする！』

するどいサタンのツッコミ。

そういやそうだ。



『しかし、あらためて感心したぞ、アルルよ』
地の底から響くような声で、ぷよぷよ大明神は言った。
「なにが？」
『さきほどの呪文(じゅもん)の威力よ。この、儀式の間の天井まで貫くとは思わなんだ』
「あー、そうか！」
ポン！
とボクは手を打つ。
どうして、いきなり地面が抜けたのかって思ってたんだ。シェゾをフッ飛ばした、あの超ジュゲムのせいだったのね。
『あーそうかって……貴様、自分の能力を把握しとらんのか？』
「よくわかんない。いろんなヒトに、モノスゴイ魔力を持ってるってよく言われるんだケドねえ」
『そこが、アルルくんの秘めた大きな力の原因でもある』
ぷよぷよ大明神が出てきてから、初めてルシファー先生が口を開いた。
『もともと秘めた魔導力が底無しな上、自覚症状がないから、発動したときの威力は無尽蔵』
なんだか、ホメられてるんだか、バカにされてるんだか……。
『どうだ？　大明神よ、この力を吸収するだけの器がお前にあるか？』



『うるさいっ！　貴様には問うておらん！』
大明神が先生を睨むと、十字架にプラズマが走った。
バシバシッ！
『ぐあっ！』
「先生っ！」
くっそぉ……。もう許さないぞ！
「ぷよぷよ大明神！　ルシファー先生とサタンを放しなさい！　でないと……」
『ほほう、でないとどうするというのだ？』
ボクは、火の精さんが現れたときのコトを思い出していた。
火の精さんは、アイスストームの呪文にとても弱い。大明神だってこんなにボウボウ燃えてるんだから、きっとおんなじだ！……と思う。
「いっくぞぉ〜、アイス……！」
とそのとき、天井から声が……！
「やめるのだ！　アルル殿！　そやつには生半可な呪文など効かぬでござる！」
この、ござるコトバは……！
ボクは、呪文発動の構えをしたまま上を見る。
「マサムネさん！」

そこには、もうゼッタイに会えないと思ってたシブイおじさんの顔があった。
「オーホホホホホ！　あたくしもいるわよ！」
「ルルー！」
そして、彼女に続いてシュテルン博士、ミノちゃん、カーバンクルも顔を出す。
さそりまんやハーピー、ドラコケンタウロス、すけとうだらもいるぞ。この4人って、七ぷよ神の残りってヤツ？
みんな、天井からシュタッと飛び降りて、ボクらのところに駆けてきた。
さっそく、ルルーがサタンのところに行く。
「サタン様！　ご無事でしたか！」
『おう、ルルーか』
そして、シュテルン博士はルシファー先生の前に。
「なかなか、見栄えのする格好だな」
『そうだろう？　わたしも満更でもないと思っている』
あいかわらず、疲れるなぁ。こういうヒトたちの会話は……。
それよりもなによりもボクが気になるのは……！
「マサムネさん！　生きてたんだね！」
「うむ。あの黒い火柱が出る直前、〝無双影刃〟の術で逃れようと思ったのだが、それが仇と

なってしまったでござる。そのおかげで、かなり遠くまで吹き飛ばされてしまったのだが……、結果的には良好でござったな。シュテルン殿らと合流できたことだし……」
「もう、死んじゃったかと思ってたよぉ……」
ああ、ダメだ。また涙が出そうになってきた……。
「心配かけたでござる。……しかし、いまは感傷に浸ってるひまはないでござる」
マサムネさんは、ボクの肩に手をポンとおき、ぷよぷよ大明神をキッと睨みつけた。
「〝毘沙門〟どのら4人にはすべて真実をお話ししたでござる。あとは、残りの〝布袋〟どのらにも同様のことを伝えるのみ。観念いたせ、大明神どの！」
『フン！』
マサムネさんのセリフを跳ねのけるように、ぷよぷよ大明神はタカビーに鼻をならした。
『なにを観念せよというのだ？　感謝ならいくらでもしてやるぞ。その〝引き金〟を連れてきてくれて、ありがとうとな……』
ピッ！
と大明神はミノちゃんの頭の上にいるカーバンクルを指す。
当のカーバンクルはというと……？
「ぐぅ〜、ぐぅ〜……」
お腹をいっぱいにふくらませて眠ってる。

また、いったいナニを食べたんだ？　この子は……。

『しかし……。この状態では安全に儀式が執り行えんのも事実ではあるな。さて、どうすべきか……』

ナニをブツブツ言ってるんだ？　このヒトは……。もしかして、アブないんじゃないの？

ま、アブなくなきゃ、こんなコトしてないと思うケド。

『ルルーとやら』

いきなり、大明神はルルーにふった。

「なによ」

『貴様、このサタンのことを思うておるのか？』

「そうよ！　あたくしはサタン様一直線！」

ボクを指差して、

「あんなボゲボゲ小娘なんかに取られるワケにはいかないわ！」

ム！

ボゲボゲで悪かったわね！

……って今回は、みんなにバカにされたりホメられたり。なんだか忙しいなぁ。

『それは好都合……。ルルーよ、アルルを倒せ！』

「ええっ！」

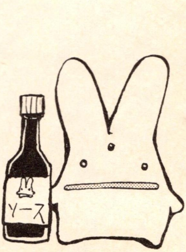
なんてコトいうの！　このヒトは……！
「バカ言ってんじゃないわよ。あなたに命令されるまでもなく、あたくしはアルルを倒しますわよ。ただし、あたくしの気が向いたときにね。……悪いけど、いまはそういう気分じゃないのよ」
ルルーは、ポッと顔を赤らめた。
「だって、サタン様の前なんですもの……★」
なんだかなぁ〜。
『では、戦わなければサタンを殺す！　と言ったら？』
「え―――っ！」
ボクとルルーの声がハモる。
そ、そんなヒレツな……。
『どうする？　ルルー』
「そ、それは……」
『ルルー！　そんなヤツの口車に乗せられるな！　アルルとふたりでさっさとこいつを倒しちまえ！』
ガチャガチャと磔（はりつけ）のクサリを鳴らしながら、サタンが怒鳴る。

『うるさいだまれ！　貴様は人質だ！』
大明神は、ギッとサタンを睨んだ。次の瞬間、さっきルシファー先生に襲いかかったような電撃が十字架を走る！
バシバシッ！
『がぁっ！』
「ああっ！　サタン！」
「サタン様ぁ！」
ルルーは、ぎゅっと拳を握って、意を決したようにボクを見た。
「アルル、悪いけど、サタン様を死なせるワケにはいかないわ」
「それはボクだって同じだよ！　だけど、友達なんかと戦えないよぉ！」
「フン！　あたくしはあなたを友達だとは思ってないわ。サタン様を取った憎い憎い相手なのよ！」
「そ、そんなぁ……」
「いくわよ！」
ウムを言わせず、ルルーはボクにかかって来た……！

三　対決！　ルルー！

……そして意外なる大明神の正体っ！

「破岩掌！」
「うわぁ！」
ボクはルルーの必殺技を、なんとかよけた。
「はっ！」
今度は、突き刺すような蹴り！
「わわわっ！」
髪の毛をかすっただけで、ダメージはない。
そしてまた、
「破岩掌！」
「だぁぁぁっ！」
こんな調子で、ボクとルルーはしばらく戦っていた。



いや、戦いなんかじゃない。ルルーは大明神に脅迫されて攻撃してるだけだし、ボクは単によけてるだけ。
「アルル！　ちょっとは攻撃したらどうなの？」
「そ、そんなことといったって……」
ルルーがそう思ってなくても、ボクにはやっぱり友達だよ。その友達を傷つけることなんて、できるわけないよ！
そんなボクらのまわりのヒトはというと、マサムネさんもシュテルン博士も、どうやって助けようか考えあぐねてるってカンジ。
ヘタに手を出すと、サタンが殺されちゃうかもしれないし……。
「ぐっぐっぐっ、ぐっぐっぐっ」
いつのまにか起き出したカーバンクルが、さそりまんさんから買ったウチワを振りながら、ミノちゃんの頭の上で踊ってる。〝芭蕉扇〟っていったっけ？　アレ。
「ぐっぐっぐっぐっぐっぐっぐっ」
も、もしかして、三三七拍子……？
「アルル！　よそ見してる場合じゃないわよ！」
グォッ！
ルルーの声と同時に、上からルルーのかかとが襲いかかってくる！

「わぁっ！」

ガシイッ！

ボクは両腕をクロスして、なんとかそれを受け止めた！

だけど……。

ジィ～～～～ン……！

すっごぉ――くイタイ……。涙が出てきちゃう。

「やるわね。あたくしのカカト落としを受け止めるなんて」

ボクの腕から足をおろしながら、ルルーは言った。だけど、ボクにはそれに答えてるヒマなんてない。

腕がいたくていたくて……。

『アルルくん！〝芭蕉扇〟を使うんだ！』

遠くのほうで、ルシファー先生の声がする。

〝芭蕉扇〟……？

「ルシファー先生、アルルに助言するなんてずるいですわ！」

『安心したまえ、キミに攻撃をするわけではない』

「カーくん、それ貸して」

「ぐー！」

ルルーがルシファー先生にくってかかってるあいだに、ボクはカーバンクルから〝芭蕉扇〟を受け取った。

ボクが手に取ると、〝芭蕉扇〟はググッと大きくなって、ボクに丁度いいサイズになる。不思議ふしぎ。

『その〝芭蕉扇〟で、大明神をあおぐんだ、アルルくん』

「え〜〜いっ！」

ボクはルシファー先生に言われるまま、ぷよぷよ大明神に向かって〝芭蕉扇〟を思いっきり振った！

ぶわぁ――――――っ！

もんのスゴイ突風が、ぷよぷよ大明神に襲いかかる！

『うぉっ！』

風が、大明神を覆っている炎を吹き飛ばした。

その中から、真っ黒な身体が出てくる。

これが、ぷよぷよ大明神の正体……？

完全に姿をあらわした真っ黒な影みたいなその姿は、立派なツノ、おっきな翼を持ってる。

なんだか、誰かによく似てるぞぉ……。
マスクドなんとかさん！
……じゃなくって、
「サタン！」

『あ――――――――っ！』

「うわぁ！」
いきなりのサタンの声に、ボクらはみんなすっころんだ。
「なんなのよ！　サタン！」
そんなにおっきな声ださないでよ！　ビックリするじゃない！
『すまん。ちょっと思い出したことがあってな……』
「なにを？」
サタンは、ひっくり返ったままの影――大明神をアゴで指しながら言った。
『こいつ、オレの〝影〟なんだよ』
「はぁ～～？」
ナニソレ？
『いやあのな……、オレ昔――何百年くらい前だったかなぁ――この国にきたことあんのよ』

「なにしに？」
『決まってるではないか！　〝日出る国〟を支配するためよ！』
「はぁ……」
なんだかなぁ。
「それで、支配できたのですか？」
ルルーが、うるうるした眼で問いかける。
『うんにゃ』
「あら、どうしてですの？　サタン様でしたら、あっというまに支配できるはずですのにぃ」
『飽きた』
「は？」
ボクとルルーが、またハモった。
『いやオレ、途中でめんどくさくなっちゃってさ、支配しなかったんよ』
がっくし★
会ったときから、ずぅっとワガママなヤツだと思ってたケド、こんなにワガママでいーかげんだとは思わなかったよ。
『でも、オレがここに来たって証しがないのもシャクだから、その〝影〟をおいといたってワケ。また来たときに役に立つかと思ってな』

「はぁ……」
もう、返すコトバもない。
『その先は、わたしが説明しよう』
ルシファー先生が、サタンの説明を引き継いだ。
『で、その後からいまのいままで、サタンはそのことをすっぽり忘れていたワケだ。まあ、かといってわたしが覚えていたわけでもないがな』
『おい貴様、それではオレがタダのマヌケみたいではないか！』
サタンのツッコミを無視して、ルシファー先生はハナシを続ける。
『アルルくんは覚えていると思うが、サタンの魔力を封印したあのときからだ。異変が起きたのは……』
「う……」
あのときの光景が、また頭に浮かびそうになってきた。
ぶんぶんと振ってそれを頭から追い出して、ボクはルシファー先生に問いかける。
「異変って？」
『簡単に言うと、封印したと思ったサタンの魔力が、魔界を介した霊的なつながりを通じて、〝影〟にすべて注ぎこまれてしまったのだ』
「というと、サタン様本体と〝影〟が、入れ代わってしまった状態なんですの？」

「いや、おそらく違うだろう。〝影〟は、あくまでも〝影〟でしかない。実体のない、うつろな意識体だ。そこへ大量の魔力が流れ込み、〝影〟の意識が暴走してしまったのだろう」

ルルーの問いに、シュテルン博士が答えた。

『その通り』

と、ルシファー先生。

「ははぁ……だから〝影〟は、ぷよぷよ大明神だなんだって騒いでたんですね」

『うむ、アルルくんの言う通りだ』

「なぁるほどねぇ……」

ルシファー先生とサタンを除いて、ボクらは全員うんうんとうなずく。マサムネさんや七ぷよ神たちも一緒だ。

と、そのとき……！

『解説は、もう終わりかな？』

ボクらの後ろで声がした。みんないっせいにそっちを注目！

「ああっ！」

そこには、暴れるカーバンクルをつかんだサタンの〝影〟――ぷよぷよ大明神が立っていた。足元に、ミノちゃんが倒れてる。気絶してるみたい。きっと、後ろから〝影〟に不意打ちされたんだ。

「ぐー！　ぐー！」
カーバンクルも、すんごく苦しそう。これはちょっと許せないぞ！
「カーくん！」
「ミノタウロス！」
『貴様たちの仮説はなかなかおもしろく聞かせてもらったが……』
カーバンクルを握る手をゆるめようともせずに、〝影〟は言った。真っ黒だから表情はわかんないケド、きっとシェゾより邪悪なニヤニヤ笑いをしてるんだろう。
『我はぷよぷよ大明神。それ以上でも、それ以下でもない』
『……ダメだこいつ、完全にイッちゃってるよ』
あきれかえって、サタンは言った。うんうん、ボクもそう思う。
だけど大明神は、そんなセリフなんか聞こえてないかのように話しつづける。
『〝引き金〟は手に入れた。あとは、復活の儀式を執り行うのみ！　ついでに、貴様ら全員の魔力を吸収してやる！』
パチン！
と大明神は指を鳴らした。……ように見える。ホントに影みたいに真っ黒だから、細かいしぐさなんかがはっきりしないんだよねぇ。
ブゥゥゥゥ……ン！

　ぷよぷよ大明神の合図で、彼の後ろの壁、つまり磔用(はりつけよう)の十字架の正面に、光の六芒星(ろくぼうせい)が描かれた。その6つの頂点には、マサムネさんに見せてもらった巻き物とおんなじように、赤、青、黄、緑、紫、それから透明のぷよぷよが収められている。

　そして、よくよく見ると、六芒星の真ん中にカーバンクルの形をしたくぼみがある。そこにカーバンクルをはめ込めば、儀式の完成ってワケね。

　……って冷静にブンセキしてる場合じゃない！

　ボクは、ビシッ！　とぷよぷよ大明神を指差した。

「復活なんて、そんなコトはボクが許さないからね！」

『いや、アルル』

　十字架のうえから、サタンがボクを止める。

『ヤツの好きにさせてやれ。どうせヤツが思っている通りの結果にはならん』

「どーしてよ？」

　そんなコトしたら、ぷよぷよ大明神は復活して、ボクらの魔力がゼンブ吸い取られちゃうんだよ！

　あり？　でも、ぷよぷよ大明神ってサタンの〝影〟なんだよねぇ。

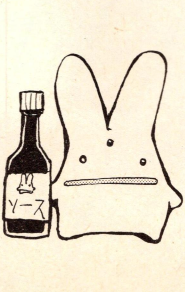
　というコトは、儀式で復活するのって、誰……？

『ふはははははは！　どうしたアルル！　我を止めるのではなかったのか！』

ボクらがぼぉっと見てると、大明神は高笑いとともにカーバンクルをくぼみにはめこんだ！
その瞬間、六芒星の光がいっそう激しくなる。
『わ――っはっはっは！　これで我は世界を支配したも同然！』
カアッ……！
「わっ！」
ぷよぷよ大明神の笑い声が響く中、六芒星の光が爆発的にボクら全体を包みこんだ……。

四　ぷよぷよ大明神の復活っ！

……まぁ、復活といえば復活だねぇ



ボクは、まぶしさのあまり、ぎゅぅっと眼をつぶっていた。
だけどまぶたの上からでも、六芒星からの光が刺すように飛び込んでくる。こんな光の中で眼を開けたら、つぶれて見えなくなっちゃうよ。
それから、どれくらいの時間がたっただろう……。ほんのちょぉっと？　それとも永遠？　ボ

クにはどっちにも感じられる。
シュウウウウウウ……。
光ったときとおんなじように、急に光は弱くなった。
もう、眼を開けてもだいじょぶそうだぞ。
と思ったそのとき……。

『は――――っははははははは！』

また、ぷよぷよ大明神の高笑いが聞こえてきた。
『復活ふっかつぅ！』
あああ、ついに復活しちゃったよ。
……あり？
なんだかおかしいな。
ぷよぷよ大明神の復活のために、ボクらの魔力を吸収するとかって言ってたケド、ゼンゼン吸い取られたようすはない。ボクの身体はピンピンしてる。
それに、笑い声が、いままで聞いてたぷよぷよ大明神の声とはちょっと違うような気がするぞ。もっと、邪悪で地の底から沸き上がってくるような声じゃなかったっけ？
よく聞くとルシファー先生に似てるような気もするケド、先生の声はもっと優しくて、あっ

たかだ。
と、い、う、コ、ト、は……？
パッ！
ボクは、思い切って眼を開けてみた。
その瞬間、眼に飛び込んできたのは……、
『わ――っはははははは！』
手を腰にあてて、思いきり胸をそらして高笑いをしてるサタンの姿！
「サタン様ぁ！」
ボクより先に、ルルーが声をかけた。
「どど、どーいうコトなの？　サタン？」
ボクはルルーよりひと呼吸おくれて、サタンに問いかける。ちょっち、慌ててドモっちゃってるケド。
『よぉくぞ聞いてくれた！』
ビシィッ！
サタンは、左手は腰にあてたまま、右手を伸ばして人差し指をつきたてた。
なんだか、元気がありあまってしょうがないってカンジ。十時間とか十二時間とかぐぅ～っすり眠って起きたあとみたいな、さわやかなパワフルさだ。

『よーするにだな……。あの〝影〟がやったのは、〝影〟がオレの身体に戻る、融合の儀式だったのだ！』

『そして……』

ふわり。

と、ルシファー先生がボクの横に優雅に着地しながら言った。

……いつのまに、十字架から脱出したの？　まあ、このヒトの場合、なにが起きても不思議じゃないケドね……。

「そして？」

ボクは聞いた。

『自身の魔力を保有していた〝影〟と融合してしまったいまのサタンは、もはや封印を解いたも同然』

「というコトはつまり……」

「もとのサタン様に戻ったのね★」

いきなり、ルルーがうるうるした眼で割り込んだ。

ああん、邪魔しないでよぉ。

「あれ？　でもさ、あの巻き物には〝復活の儀式〟って書いてあったよ？」

『巻き物？』

サタンが、怪訝(けげん)そうな顔でボクを見る。
「これのことでござるか？」
あまりの成り行きに、ちょっと茫然(ぼうぜん)とした顔のマサムネさんが、懐から例の巻き物を取り出して広げた。
『ああ、これかぁ！　なっつかしいなぁ』
「はぁ？」
今度は、ボクらのほうが怪訝な顔をするばんだ。
「なつかしい？」
『実はこれ、オレが作ったのだ』
「え――――っ！」
サタンが作った巻き物ぉ？
「どーしてこんなもの作ったのよ？」
『魔界に帰るとき、〝影〟を残しただけじゃつまらんと思ったからだ。巻き物のひとつでも残しておけば、いつか誰かが見つけて、儀式をやってくれるかなと思ってな』
「〝復活の儀式〟って書いたのは？」
『それはほら、〝融合の儀式〟より〝復活の儀式〟と書いてあったほうが、大仰でソレらしい

だろ？　ハッタリもききそうだし』
だぁぁぁぁっ……！
ボクは、急な脱力感に襲われた。
初めて巻き物をみたときに感じたイヤな予感って、コレのことだったんだぁ……。
やっぱり、ロクな結果じゃなかった。

「あ――――っ！　思い出したぁっ！」

いきなり、誰かがおっきな声で叫んだ。
「こんどはなによぉ！」
ボクが声のしたほうを向くと、七ぷよ神たちがコワイ顔でサタンをにらんでいた。
声の主は、たぶんドラコケンタウロスだ。
「お前っ！」
ビシッ！
といつもの調子で、ドラコケンタウロスはサタンを指差す。
「以前、この国に襲いかかってきた悪魔だね！」
『そうだが……。お前たち、今まで気づかなかったのか？』
確かに。

七ぷよ神たちってば、ちょっちおマヌケさん。

サタンのツッコミに、ドラコケンタウロスはテレかくしするように地団駄をふんだ。

「ええ――ぃ！　そんなことはどうだっていい！　勝負だ！　あのときの決着をつけてやるわよ！」

『おもしろい……。いまのオレは、心身ともに充実しきっている。あのときですら苦戦したお前たちに、このオレが倒せるか……？』

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

サタンと七ぷよ神たちは、ソーゼツなにらみ合いを始める。

「ちょ、ちょっと待ってよ」

ボクは、その中にムリヤリ割り込んだ。

「こんなとこでケンカなんかしちゃダメだよぉ。せっかく、ぷよぷよ大明神がいなくなってバンバンザイってときなのに」

「だけど、そいつは悪いヤツだ」

ドラコケンタウロスの言葉に、他の七ぷよ神たちはそーだそーだと相槌(あいづち)をうつ。

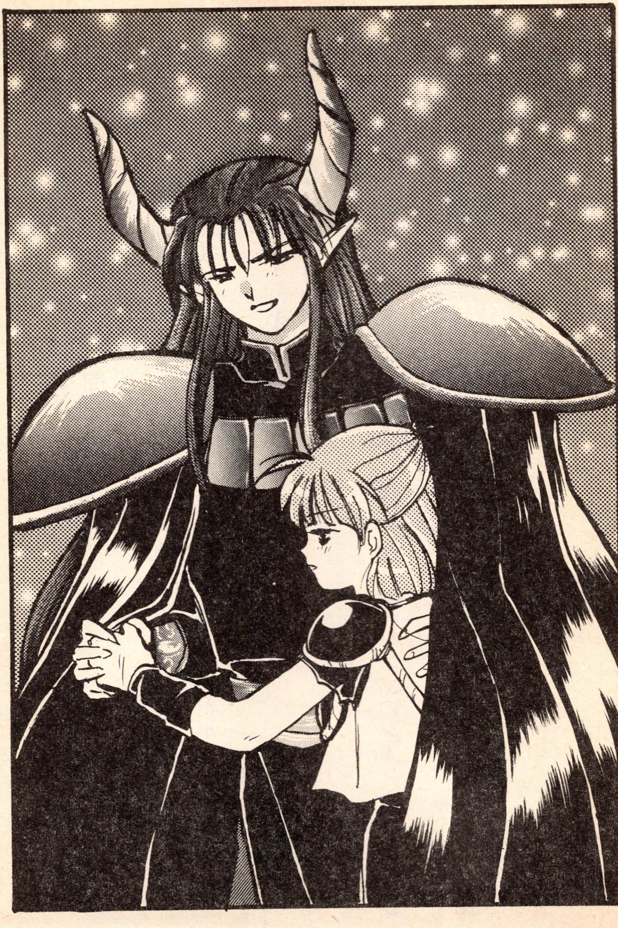
「そぉんなコトないって。サタンも、ちょっとは優しくなったんだから。だよね★　サタン」

『いや、オレはいつでも、この国を支配する気でいるぞ』

「ほらぁ！」

「だ――っ！」
まったくもう！
「サタン！　ホントにこの国を支配するんなら、まずボクが相手になるよ！」
マサムネさんみたいな、一生懸命この国のコトを考えてるヒトがいる〝日出る国〟を、これ以上メチャクチャになんかさせないぞ！
『そんな、つれないことを言うな。アルル……』
ふわっ……。
いきなり、サタンは真顔でボクに近づき、そっと抱きよせた。
いつもみたいにゴーインなやり方じゃない。あくまでも自然だ。
「…………！」
ボクはふと、マサムネさんに抱きしめられたときのコトを思い出した。感覚が、そのときによく似てるってコト……？
そう感じた途端……！
ドキドキドキドキ……！
胸が騒ぎはじめる。
な、なんなの……？
『アルル……』

ものすごくマジメな顔で、サタンはボクを見つめた。
だけどボクは、恥ずかしいような恐いような気持ちがいっぱいで、サタンの顔を見れない。
「…………」
のども詰まっちゃって、声が出せない。
どどど、どうしよう……？
どうすればいいの……？　わっかんないよぉ……！
いつもみたいにガバッ！　と抱こうとすれば、思いっきり巴投げ（ともえなげ）をしてやるのに……！　こんなムードじゃ、それもできやしない。
どうしていいのかわかんない状況のボクをじっと見ながら、サタンはゆっくりと口を開いた。
『賭（か）けなんてもはや関係あるか……！　この場で、お前の唇を奪ってやる……！』
え？
賭けってなに？　なんのコト……？
なぁんて考えてるあいだに、サタンは心持ち唇をとがらせて、ボクの顔にぐぐっと近づけた。
「ああっ！　サタン様ぁ！」
聞こえてるのかいないのか、ルルーの声を無視して、サタンは唇を近づけるのをやめない。
ちょ、ちょぉっと待ってよ！
そんな、キスだとかなんだとかって、ボクにはまだ……！



「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」

だけど、身体がいうことをゼンゼン聞かない！

声が出せない！

抵抗できないよぉ……！

でも、こういうムードも、ちょっといいかなぁ……ってナニ考えてんだボクは！

ぐぐ〜〜っ！

あああっ！　ボクの唇まで、あとちょっと……！

ってところまでサタンの唇が迫った瞬間！

「！」

ボクの頭の中に、ルシファー先生とサタンの〝魔力封印の儀式〟のあのシーンが突然うかびあがった！

つまり、双子の兄弟で、男同士の、ルシファー先生とサタンが思いっきり唇を重ねたあの瞬間を……！

「ダメ――――――――っ！」

うるぁずど〜ん！

ボクは、金縛りが解けた瞬間の勢いを利用して、これ以上ないってくらい思いっきり、サタンを投げ飛ばした！

どんがらがっしゃぁ――んっ！

サタンの身体は、勢いよく洞窟（どうくつ）の壁にブチあたる。

「サタン様ぁ！」

慌ててサタンに駆け寄るルルーを、ボクは肩で息をしながら見つめていた。

あ、あぶないところだった……。

もう少しで、ボクのファーストキスが奪われちゃうとこ。

これは一流の魔導師になって、だれかいいヒトが見つかってから、そのヒトにあげるんだもんね。その相手が、たとえサタンだったとしても、そのときのボクはきっと後悔しないと思う。

だけど、いまはちょっと……。

でもこのままほっといたら、またいつものようにゴーインに迫ってくるようになっちゃうかもしんないなぁ。

さっきみたいにムードたっぷりで来られても、それはそれで困るんだケド。……いや、こっちのほうが手に負えなさそうだなぁ。

「どうしよう……」

と悩んでると、

「ぐーぐー」
カーバンクルがボクの足をつっついた。
「なぁに？　カーくん」
「ぐー！」
ぴょっ、とカーバンクルはボクの肩に乗って、真っ赤なヒョウタンを差し出す。
この国に来る前に、港町でサタンを吸い込んじゃったアレだ。
「これでサタンをまた吸い込んじゃえっていうワケ？」
「ぐぅー！」
カーバンクルは、コックリとうなずいた。
「カーくんも、ずいぶんキョーアクなコトを考えるのね……」
ニヤリ。
カーバンクルの口が、ぐぐっとゆがむ。
「う……」
何度見ても慣れそうにないなぁ、このカーくんの顔。
このコの考えも、いっこーに読めないし……。
まぁいいや。
これに入れてどっかに飛ばしちゃえば、サスガのサタンも、しばらくなにもできないでしょ。

我ながら、ボクもちょっとイジワルだね★
ボクはヒョウタンのフタを抜いてから、立ち上がろうとしてるサタンのところにニコヤカに近づいた。
「サ〜タン★」
ちょっち、ワザとらしかったかな……？
だけどサタンは、ホコリを払いながら、ぶっきらぼうに答えた。
『なんだ？』
その瞬間、ボクはヒョウタンの口をサタンに向ける！
ひゅごおおおおおおおおお……ッ！
『おわぁぁぁぁあっ！　またしてもぉぉぉぉぉぉぉ……！』
叫び声に尾を引かせながら、サタンは吸いこまれていった。
キュキュッ！
そして、ボクはフタを閉める、と……。
これでオーケー。
「ちょっとアルル！　サタン様になぁんてコトするのよ！」
予想通り、ルルーが怒って文句を言うけど、ボクは気にしな〜い。

「この〝日出る国〟のためには、こうするしかなかったのよ。許して」

半分ホントで、半分ウソだけど……。

「よかったら、これルルーにあげるよ」

「え？　ホント？」

「だけど、この国を出てから開けてよね。マサムネさんとか、七ぷよ神さんたちの迷惑になっちゃうから」

「うんうん、わかったわ！」

「しかし、それでは面白くないな」

ヒョイッ。

「あ！」

ルルーより早く、誰かが上からヒョウタンをつかんだ。

見ると、シュテルン博士がボクの後ろに立っていた。

「せっかくだから、これを使って、ひとつルルーくんに課題を与えよう」

ポンポンと、手の上でヒョウタンを跳ねさせながら、博士は話す。

「なんですの？」

いかにもじれったそうに、ルルーは言った。もう、早くヒョウタンからサタンを出したくってしょうがないってカンジだ。

「なに、簡単なことだ。いまから、わたしがこのヒョウタンを思いきり遠くに投げる。ルルーくんは、それを拾えばいい。無事に手に入れられたら、ヒョウタンはキミのものだ。どうだ、やってみるか？」

「わかりましたわ！　サタン様のためなら、たとえ火の中、ぷよぷよ地獄の中！　ですわ」

「その意気だ、ルルーくん」

博士は、ルルーの肩を優しく叩いた。

美しい師弟愛ってヤツ？……って、いつのまにルルーは博士のところに弟子入りしてたんだろ？

そういえば、最新型の魔導レーダーを、ルルーは持ってたっけ。その頃からなのかな？　いろいろ、ルルーもやってるんだなぁ……。

ってボクが考えてるあいだに、

「いっくぞぉ〜……！」

博士はヒョウタンを持った腕をぐるんぐるん回しはじめた。

そして……、

「っしゃあっ！」

ブォンッ！

気合一閃（いっせん）！　博士はヒョウタンを思いっきり投げる！
キラ――ン！
あっという間に、ヒョウタンは星になっちゃった。さすが、シュテルン博士のパワーはシャレになってない……。
「では博士、行ってまいりますわ」
「おう！　気をつけてな！」
「ねぇねぇルルー、どうしてそうやって平然としてられるの？」
「あなたとは、鍛えかたが違うからよ」
「それもあるが、わたしのところに弟子入りしてた頃は、よくこういう修業をさせたものだから、もう慣れてしまったのだろう」
横から、博士が口を挟んだ。
「そ、そんな博士！　なにもバラさなくても……！」
「はっはっは、すまんすまん」
「まぁ、頑張ってね、ルルー」
ボクは、心をこめてそう言った。
サタンがまた出てくるのはちょっとヤだけど、ルルーには頑張って修業してほしいもんね。
友達なんだし。

「もう、あなたなんかにサタン様は渡さないからね」
それだけ言うと、ルルーはひょひょいっとジャンプしながら、ボクが開けた天井の大穴を通って地上に出ていった。ミノタウロスも、そのあとに続く。
ボクとシュテルン博士は、しばしその姿を見守った。
そこへ……。
「あの〜……」
途方にくれたような、マサムネさんの声。
振り向くと、マサムネさんだけじゃなくて、七ぷよ神さんたちもおんなじような顔をしてる。
「なに？　マサムネさん」
「拙者たちは、これからどうすればいいのでござろう……？」
『まあ、ぷよぷよ大明神は、もとから存在していないことがわかったワケだし、その脅威すらも消え去った……』
ルシファー先生のコトバを、シュテルン博士が引き継いだ。
「数百年前の脅威であったサタンも、いまやあの状態だし……」
「とりあえず、めでたしめでたしなんじゃないの？　ね★」
最後にボクが、みんなに向かってウインクした。
よかったよかった。これで〝日出る国〟も安泰だ……！

エピローグ

大団円、大団円★

……さぁ〜て、帰りましょ

ボクとルシファー先生は、港の桟橋に立っていた。

後ろには、ドレイク船長のゴッツイ船が待ってる。思いっきり形がちがうから、スグ目立つ。

他の船は、みんな四角い帆をたてて、ちょっとボクらの国では見ない、角ばった造りをしてる。だけど、ドレイク船長のは、カッチョイイ流線形で、帆も立ててない。一応、マストはあるけどね。

実は、待ってるのはボクたちのほう。ドレイク船長が、いま一生懸命に出港の準備をしてるところなのだ。

そして、目の前には見送りに来てくれた七ぷよ神さんたち。

……は、いいんだケド。

キョロキョロ。

ボクは、右のほうを見渡してみた。



いない。
キョロキョロ。
今度は左。
でもやっぱりいない。
ぴょぴょん！
ジャンプして、七ぷよ神さんたちの後ろのほうも見てみる。
それでもいない。
「…………」
あれぇ〜、どうしちゃったんだろう？　あのヒトは……？
『どうした、アルルくん。キョロキョロして』
あんまりボクがキョロキョロするもんだから、ルシファー先生がいぶかしげに聞いてきた。
「い、いや、なんでもないです」
『そうか……』
ローブの下のニコニコ顔が、「すべてお見通しだよ」って言ってるように感じるのは、もしかして気のせい……？
「いろいろと、迷惑かけたであるな」
いきなり、〝寿老人〟のまものが口を開いた。

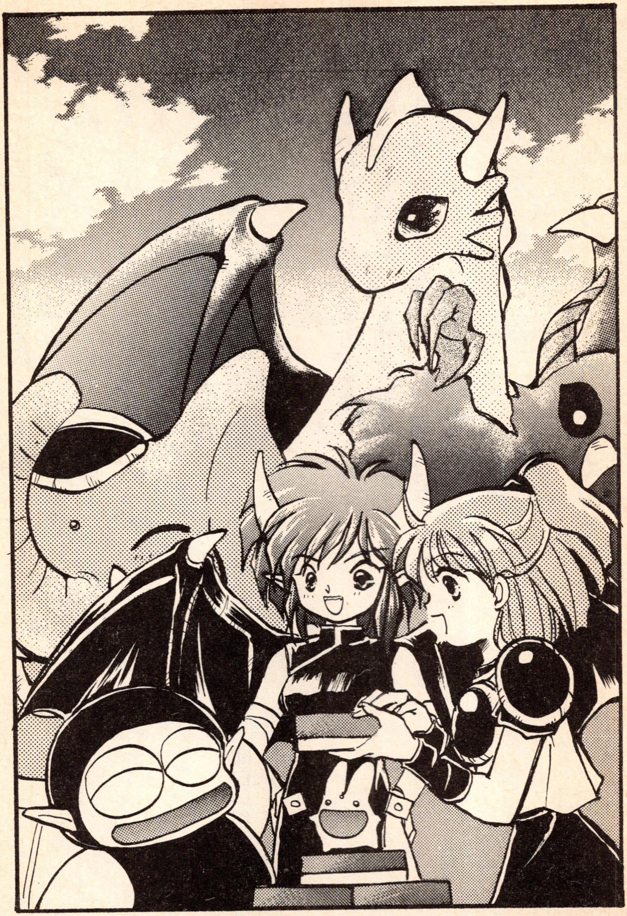
「これからは、またあんな化け物にダマされないよう、気をつけるぜ」
と〝恵比須〟のすけとうだら。
「だから、お前も元気でいるんだぞ」
すっと、〝毘沙門〟のドラコケンタウロスは右手を出した。それにつられるように、ボクもガッチリ握手。
「みんなも、元気でね！」
別れるのはツライけど、もうずぅっと会えないってワケじゃなし。またドレイク船長にお船を借りて、ここに来ればいいだけだもんね。
だから、ボクは泣かないぞ……！
「そやそや、土産わたすの忘れとった」
〝大黒〟のさそりまんが、背負っていたふろしきづつみをボクらの前で広げた。
その中にあるのは、い～っぱいの箱入りぷよまん！
「ほれ、持ってきなはれ」
「わぁ、ありがとう！」
「ぐー！」
ぴょ～んとボクの肩から、カーバンクルはぷよまんの箱に飛び移った。そして、うれしそうに踊りはじめる。

『あいかわらずだな、カーバンクルくんは。船の中で全部食べずに、ちゃんと向こうに着くまで残しておくんだぞ』
「ぐー！」
わっかりましたぁっ！　ってカンジで、カーバンクルは右手をシュタッとあげた。
あははははは……！
そんなカーバンクルの姿がミョーにおかしくて、ボクらはいっせいに笑い出す。
そこへ、船の上からドレイク船長の声が……。
「おーい！　準備できたぞーっ！」
「はぁーい！」
そろそろ、ホントにお別れの時間だ。
「キシャ――――――ツ！」
「な、なんて言ってるの？」
〝福禄寿〟ドラゴンの雄叫(おたけ)びを、〝布袋〟のぞう大魔王が通訳する。
「また遊びに来い、と言ってるんだゾウ」
「うん！　ぜぇ〜ったいにまた来るよ！」
ボクは、ぷよまんの箱を持って、いちど大きく手を振ってから、船に乗り込んだ。

「じゃぁ――ねぇ――っ！」
だけど……。
見送りの中にマサムネさんの姿はなかった。
ちょっと、悲しいな……。

＊　＊　＊

松の生い茂る、小高い丘の上。
出港し、徐々に速度をあげていく船を、じっと見守る男がひとり。単に形が珍しいから見ているわけではない。そこに想い人が乗っているのだ。
マサムネであった。
「……………」
サムライは、甲板の上の少女を、ずっと見つめつづける。
「これで、本当によかったのか？」
出し抜けに、シュテルンがマサムネの後ろから声をかけた。しかし、マサムネはさして驚いたふうはない。
「直接会えば、きっと未練が残るでござる。さすれば、拙者はこの国を出奔してしまうでござ



ろう……。だから、これでよかったのでござる」
「気の済むまで追いかけるというのも、美しい愛のかたちだとわたしは思うがな。あのルルーくんがいい例だ」
「逆に、堪え忍ぶという愛のかたちもあるでござるよ、シュテルン殿」
「まあ、確かにそうだな」
「ところで、シュテルン殿は船に乗らなくてよかったのでござるか？」
「え？　いやぁ、まぁ……この国で、少々修業して行こうと思ってな……。面白い相手もいることだし」
ニヤリ。
シュテルンは微笑(ほほえ)む。マサムネも、表情でそれに応えた。
「ふふ……。拙者なら、いつでも相手になるでござるよ」
船が完全に見えなくなった頃、剣士と格闘家は丘から姿を消した……。

＊　＊　＊

「あ――――っ！　すっかり忘れてた！」

静かに走る船の甲板。突然思い当たって、ボクはおっきな声をだした。
『なにを忘れていたのだ？　アルルくん』
「シュテルン博士ですよ！　ルシファー先生。博士が船に乗ってません」
『ああ……』
ポン！
　と先生は手を打つ。
『そういえば』
「シュテルン博士なら……！」
　帆の見張り台から、ドレイク船長がおっきな声で言った。
「あの国で少し修業するとか言ってたぞ。……まぁ、ホントは船酔いがこわいんだろうけどな」
「うんうん」
　博士の酔いかたは、ソーゼツだったからねぇ……。
「でもさ、結局は船に乗って帰ってこなくちゃいけないんじゃないの？」
「いや、わかんねぇぞ。あの博士のことだからなぁ……。あの国からオレたちの国まで届くような橋でも造っちまうんじゃねぇの？」
『確かに、シュテルンならやりかねん』

ルシファー先生のヒトコトで、ボクら3人は高らかに笑った。
カーバンクルは、ぷよまんの食べ過ぎでお休み中……。

*　*　*

砂漠。
東西南北どちらを向いても、砂の地平線しか見渡すことができない。
「あった――っ!」
「ぶもーっ!」
その砂漠のド真ん中で、ルルーはようやく目的の品を発見した。
早速拾い上げ、ヒョウタンの栓を抜く。
ポポン!
爆発的な煙とともに、ヒョウタンの中から現れたのは、〝魔界の貴公子〟サタン。
「サタン様! 大丈夫ですか?」
『ああ、助かった。礼を言うぞ』
「そんな……★ それより、これからどうなさいますの?」

『ヒョウタンの中で、少々面白い趣向を考えついた』
「どんな趣向ですの？」
『モンスターを多数集めて徒党を組ませ、それをアルルにぶつけるのだ。七ぷよ神のように、徒党に名前をつけてな』
「それは名案ですわ！　サタン様」
『よし、さっそく〝ぷよぷよ勝負〟に強いモンスターどもを探すとするか。……そして、ルシファーのヤツに賭けを取り消させてやる！』
最後は、ルルーには聞き取れないほどの小さな声でつぶやく。
「あたくしもお手伝いしますわ！」
サタン、ルルー、ミノタウロスの3人はやがて、広大な砂漠地帯からワープした。
行き先は、まだ誰も知らない……。

＊　＊　＊

ザザザァッ……！
波間をすべる船の音、ほっぺを優しくなでる潮風。
う～ん、気持ちいいな。

ボクは、甲板の上で外をじっと眺めていた。
となりには、ルシファー先生もいる。
「ねぇ、ルシファー先生」
『なんだ？　アルルくん』
「どうして、先生はぷよぷよ大明神なんかに捕まっちゃったんですか？」
ずぅ〜っと、ボクはそれが気になってたんだ。ルシファー先生くらいの実力があったら、あっという間に解決できただろうに……。
『キミの修業のためさ』
「え……？」
これって、先生が仕組んだことなの？
『冗談だ』
「もう！　先生ったら！」
イジワルなんだから。プンプン！
『本当は、占いで出たことなのだ』
「どういうコトです？」
『キミがこの件を解決せねば意味がないという結果だったのだ。わたしでも事件そのものは解決できただろうが、それでは最終的に悲劇的なことになっていた』

「…………」
『で、この事件にアルルくんを引っ張り出すにはどうしたらいいか？　と考えた。そして、それには大明神につかまるのがてっとりばやいという結論に達したワケだ』
「そんなキケンな！　もし、ボクが助けに行かなかったらどうするつもりだったんですか？」
ふ～む、と先生は考えこんだ。
『それは考えなかったな。だいいち、想像がつかん。キミは、わたしになにかあっても助けに行かない自分の姿というものを想像できるかね？』
「ううん……」
そんなマネ、できるわけないよ！　先生は、ボクの大切な師匠なんだから！
『まあ、そういうワケだ。答えになったかな？』
「はぁ、なんとなく……」
ボクの気持ちを知ってて利用するところが、ルシファー先生のちょっとずるいところだ。でも、どうしても憎めないんだけどね……。
先生は、ボクの肩にポンと手を置いた。
『修業のためというのも、あながちデタラメではないんだぞ。いろいろなことを体験して、勉強になっただろう？』
「うん！　辛いことや、悲しいこともあったケド、楽しかったです！」

『うむ。楽しいことも、辛いことも、悲しいことも、すべて寛大に許容できるようにならなければ、一流の魔導師の道は開けないぞ。これからも、精進、精進だ』

「はい！　がんばります！」

帰ったら、またルシファー先生との修業が始まるんだ。

一流の魔導師になるそのときまで……。

がんばるぞぃ！

終わり……かな？

あとぐぁき

魔導物語はとぉってもも楽し。
みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。
と、きたもんだ★
ちょっと、前巻のときと変えてみました。
いやいや、ンなことを話してるバアイじゃなくって……。
まあ、とにもかくにも、魔導物語の第2巻、ようやくのお目見えでございます。
いや〜、長かったっスねぇ。約1年ですか。1巻目がでてから。
そのあいだ、魔導物語——ぷよぷよ関連はいろんな事がありました。『ぷよぷよ通(2)』は発売されるし、それに伴って、「全日本ぷよマスターズ(でしたっけ?)」は開催されるし、スーパーファミコンを始め、いろんなゲーム機で魔導物語やぷよぷよが移植されることになってるし、「ぷよまん」は出るわ「お好みソース」は出るわ……。
ぷよぷよ、魔導物語の勢いは、留まるところを知らないようです。さすがはコンパイルさん。
これからもドシドシがんばってください。

え？　てめーももっと書けって？　1年も開けやがってって？

はぁぁっ！　ずびばぜん。

それもこれも、すべてボクの遅筆のせい。優し〜い担当編集コビー氏をはじめ、コンパイルの皆様、そして読者諸氏に多大なる御迷惑をおかけしております。ホントは、もうちょっと早く出す予定だったんですけどね〜。

なぁんて、過ぎ去ったことを悔やんでもしかたがない。多少の時間がかかったぶん、自分の中では最高のデキになったと自負しております。ボクの全身全霊をかけた作品を、ずずずいっとスミからスミまでお楽しみください。

って、もうココを読んでるってコトは、本編には目を通していただいたんですよね。

え？　読んでない？　しかも立ち読み？

それはいけません。すぐにそのままレジへ持っていってください。なんでかっていうと、この本は呪われているからです。

前巻『ぷよぷよ大魔王の降臨っ！』では、立ち読みすると、ルルーから〝女王乱舞〟をブチかまされるという呪いがかかっていました。今回はさらに激しくなってまして、シュテルン博士の〝四神降臨究極拳〟とマサムネの〝無双影刃〟が一気に飛んでくることになってます。非常にキケンですので、立ち読みの方はくれぐれもお気をつけください。

とまぁ、本の押し売りはこれくらいにして……。

今回ついに、ルシファー先生も実はアルルのことを……★　という事実が露見してしまいました。今後、アルルをはじめ、サタン、ルシファー先生、そしてルルーたちは、いったいどうなってしまうんでしょうねぇ〜。楽しみですねぇ〜。非常に気になりますねぇ〜。ってボクが言ってどうする。

しかも、ルシファー先生とサタンの〝アレ〟もありましたからねぇ〜。大丈夫なのかなぁ。カミソリ入りの手紙とか送られてこないだろうなぁ……。本編で好き勝手なことをやるだけやっといて、後で心配になる小心者のボクであった。シェゾも変態よばわりしちゃったし……。とにもかくにも、そのへんもあわせて、感想を是非よせてくださいね。3巻の参考にもしたいと思ってます。もしかすると、あなたのアイデアが次の作品に反映されるかもしれない……！

一応、3巻目やそれ以降も、どんどん魔導物語は続けていこうと思っています。そして、それとあわせて、いずれはボクのオリジナル作品もね。

大丈夫！　今度はお待たせしません！　ボクは誓ったんです。マシンガンのように書きまくって、そういう意味で編集さんに御迷惑をおかけし、読者のみなさんに喜んでいただける作家になろうと……！

と、いつも書きおわったところで誓うんですけどねぇ〜。ホントに大丈夫なのかしら？　我

ながら心配だったりします。っておいおい。

こんないい加減なボクですが、魔導物語とともに末永く見守ってくださるよう、よろしくお願いします。そして、そんなみなさんの声を、是非お手紙やなんかで聞かせていただけるとうれしいな★

最後にひと言……。

ぷよまんはオイシイ！

是非一度、御賞味ください。いや、マジで。

一九九五年三月吉日　ＦＦＡＲ事務所にて

まどうものがたり

魔導物語 2

ぷよぷよ大明神の復活っ！

やまもとつよし

山本 剛

角川文庫 9627

平成七年四月一日　初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部（〇三）三八一七—八四五一

　　　営業部（〇三）三八一七—八五二一

〒一〇二　振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

S 56-2　ISBN4-04-415602-6　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか？
ぜひ、ご感想をお送りください。

〈ファンレターのあて先〉
〒113 東京都文京区本郷5-24-5
角川書店 書籍第一編集部気付
「山本 剛先生」係


めぐり会ったのが運の尽き!?
空みて歩こう
冴木 忍
ILLUSTRATION 伊藤真美
元スリのマユリと変な貴族のサイ。
ひょんなことから出会った二人の前に起こる出来事(アクシデント)は!?
全3巻完結
空みて歩こう①
空みて歩こう②
空みて歩こう③
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO